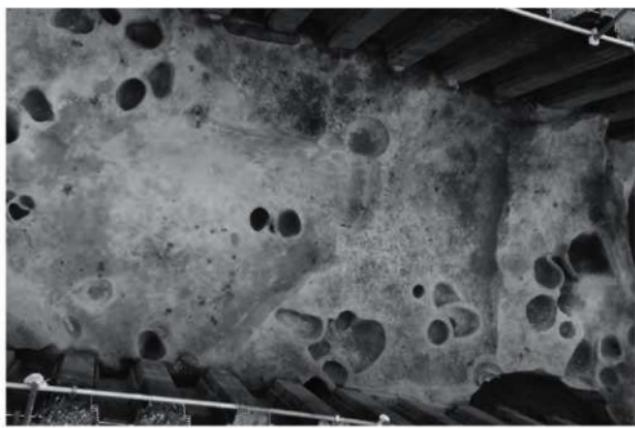


Fig.89 SC030845 実測図 (1/60)



Ph.134 SC030845 (西から)

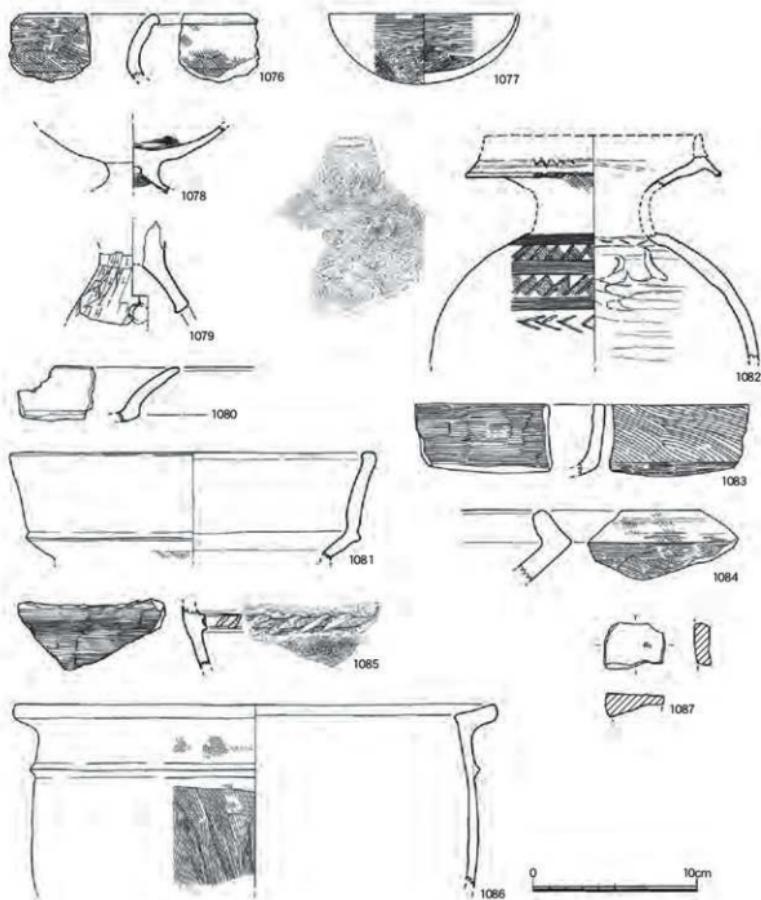


Fig.90 SC030845 出土遺物実測図 (1/3)



Ph.135 SC030845 出土遺物

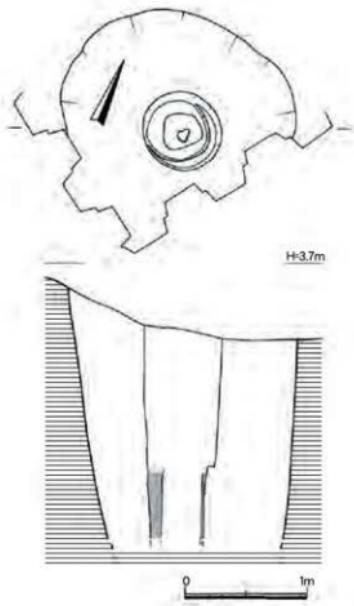
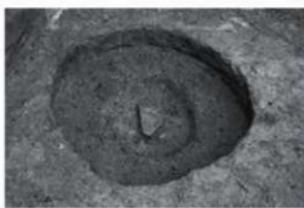


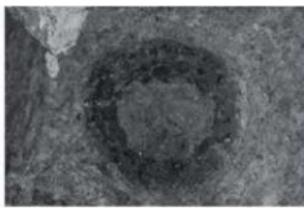
Fig.91 SE030495 実測図 (1/40)



Ph.136 SE030495 (南から)



Ph.137 SE030495 井側上層 (北から)



Ph.139 SE030495 井側 (東から)



Ph.138 SE030495 中層 (東から)

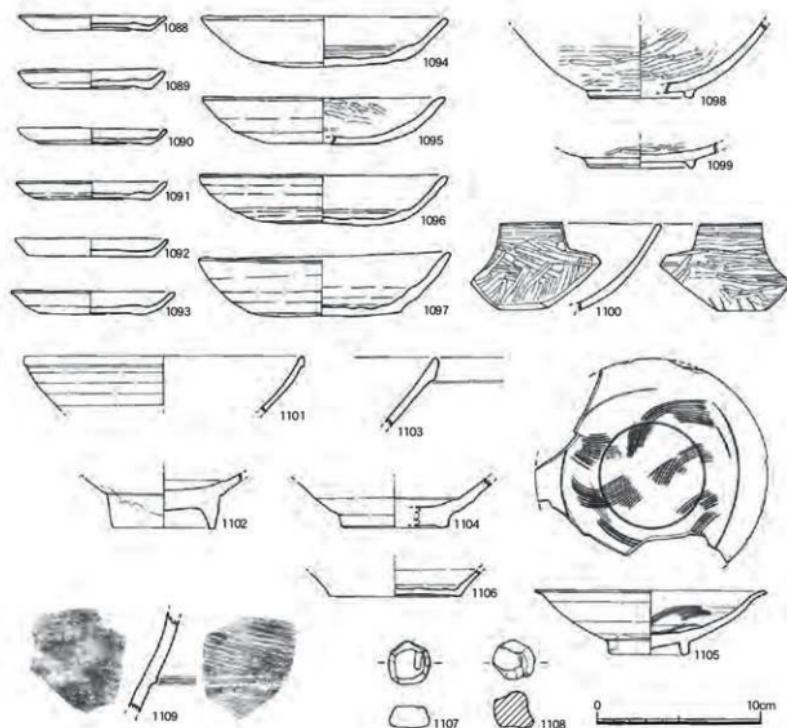


Fig.92 SE030495 井側内出土遺物実測図 (1/3)

(2) 井戸 (SE)

SE030495 (Fig.91 Ph.136-139) 調査区東側に位置し、東側と南側は調査区外へ延びる。掘方の平面形は楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.6mを測る。壁はほぼ直立に掘られており、標高約1.4mまで掘削したが、それ以上は崩落の危険があったため、掘削できなかった。井側は掘方のほぼ中央に位置し、検出面から確認できた。検出面で直径約65cmを測る。約10cm下げるとき、一辺20cmほどの石材が出土した(Ph.137)。さらに遺構面から約1.5m下、標高約2.0m付近で、井側の縁に幅10-15cmほどで全周する炭化物層を検出した(Ph.138・139)。これは、下層まで続く。炭化物層の中には直径30cmほどで、灰黒色土を斑状に含む茶褐色シルト層が堆積する。水溜の内部と考えられるが、境内に木質等は確認できなかった。

出土遺物 (Fig.92-94) 1088-1109は井側内から出土した遺物である。1088-1093は回転糸切り底の土師器の小皿で、外底部に板状痕を有し、口径は9.0-10.1cmを測る。色調は1090と1092が明橙色、それ以外は橙色を呈する。また、1088-1091は胎土も精良で、回転ナデで調

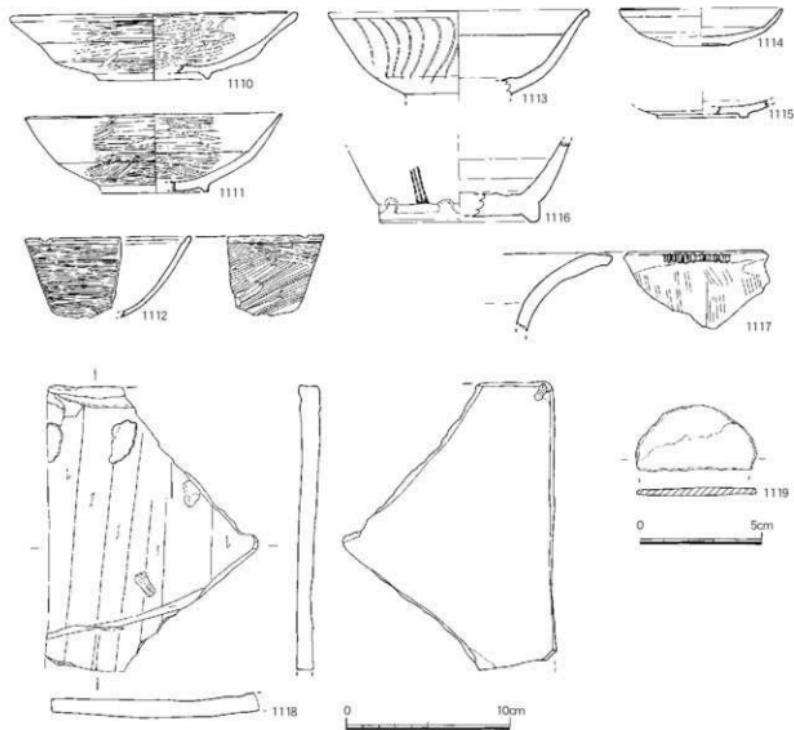


Fig.93 SEO30495 挖方出土遺物実測図 (1/3 · 1/2)

整したのち、内底部に横方向のナデを施す等、類似点が多い。1094-1096は回転ヘラ切り底の土師器の杯で、1094・1096は外底部に板状圧痕を有する。口径は15.0-15.2cmを測り、橙色を呈する。1094は全体に煤が付着しており、二次的に被熱を受けたものと考えられる。1097は回転糸切り底の土師器の杯で、口径は15.4cmを測る。胎土に金雲母を少量含み、色調は明橙色を呈する。1098-1100は瓦器椀である。1098は内外面ともに幅広の粗い磨きを施す。色調は外面が灰白色、内面は黒色を呈し、銀化する。1100は幅広の磨きを密に施し、色調は内外面ともに灰黒色である。1101-1105は白磁である。1101は碗II類、1102は碗V類、1103・1104は碗IV類、1105は碗VI-1b類である。1106は陶器の壺の底部片である。茶褐色粒を含む灰色の胎土で、色調は浅黄色を呈する。1107は瓦玉で、瓦質の平瓦を使用しているが、器面の磨滅が著しく、調整等は不明である。重さは11.2gを量る。1108は砂岩製の石球で、重さは13.9gである。色調は褐色を呈する。1109は、高麗陶器か。体部下半に1条の細い突帯を巡らす。胎土は粘性を帶び、暗紫灰色から灰色を呈する。外面は平行タタキの後ナデ、内面は格子状の當て具を部分的にナデ消す。1110-1119は掘方出土の遺物である。1110は瓦器椀で、内外面ともに粗な磨きを施す。1111は黒色土器A類の椀で、体部

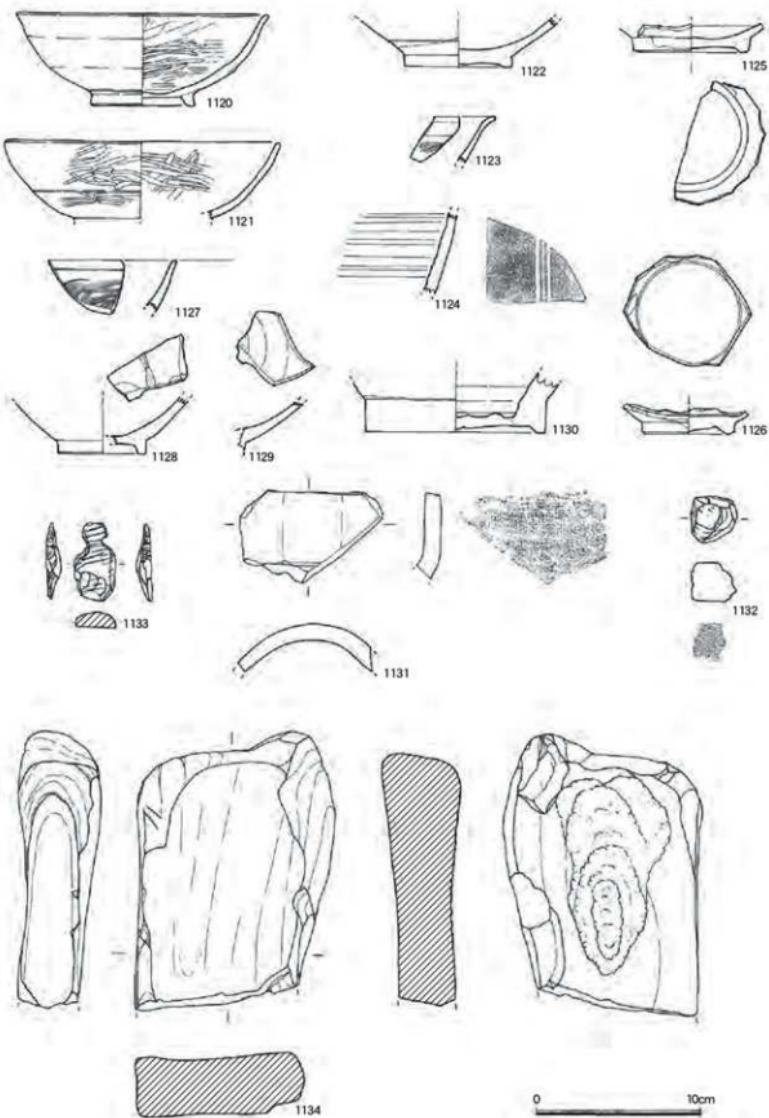


Fig.94 SE030495 上層出土遺物実測図 (1/3)

中位に段を有する。内外面ともに丁寧に磨き、内面は黒色、外面は灰橙色を呈する。1112は楕葉型黒色土器B類の楕の口縁部片で、口縁内面の端部付近に浅い沈線をもつ。内外面ともに細かい磨きを行い、底部内面に暗文を施す。1113-1116は白磁である。1113は碗V-2b類、1114は皿VI-1b類、1115は小碗の底部片で、精良な白色の胎土に化粧土を施し、白濁色の釉を高台疊付けの半分までかける。高台内の露胎部は明橙色を呈する。1116は壺の底部片で、外面には縦方向に2本セットの隆線を6か所に施し、区切る。1117は弥生土器の広口壺である。口縁上端は強いヨコナデが施され、四状を呈する。口唇部には刻みを入れる。1118は陶質の平瓦で、厚さは1.0cm前後と薄い。両面ともに工具によるナデで調整する。1119は鉄片で直径5.0cmを測る円盤状の鉄製品で、1/2が残る。厚さ0.4cmである。1120-1134は井戸と掘方の上層より出土した遺物である。1120は土師器の椀で、内面は磨きを行い、工具痕が多く残る。外面は回転ナデで調整する。1121は瓦器椀で、内外面ともに細かく磨く。1122-1126は白磁である。1122は碗IV類、1123は碗V類、1124は水注の体部片で、外面に3条の縦方向の平行沈線を入れる。胎土は橙色を呈し、灰白色的釉がかかる。1125・1126は白磁を使用した瓦玉である。1125は1/2を欠損する。底部と体部の境に段を有し、その部分から丁寧に打ち搔く。精良な白色から白橙色を呈する胎土に化粧土が施され、白色釉が高台付近までかかる。1126は碗II類の底部片で、重さは65.1gを量る。1127は龍泉窯系青磁碗I類である。1128・1129は越州窯系青磁の椀で、ともに見込みに目跡が残る。1128は茶褐色の胎土に、茶黄色の釉が全面にかかり、疊付け部の釉を搔き取る。1129は黒色粒を含む茶灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。釉の発色が悪く、部分的に白濁を呈する。1130は陶器の壺の底部片である。1131は土師質の丸瓦の玉縁部である。凸面はナデで調整し、凹面には布目が残る。1132は瓦玉で、瓦質の平瓦を使用する。凸面はナデで調整されるが、かすかに繩の痕跡がある。凹面には布目が残る。重さは20.2gを量る。1133は摘みを有する滑石製品である。擦痕を残し、磨かれている面もあるが、自然面も残り、製作途中か不明である。現状で重さは13.7gである。1134は砂岩製の砥石で、2面が砥面として使用される。他一面は中心部に敲打痕が多く残り、台石として使用されたと考えられる。他に炉壁、鉄釘、鉄滓が出土する。井戸の時期は出土遺物より12世紀前半に使用され、12世紀中頃から後半に廃絶されたと考えられる。

SE030804 (Fig.95 Ph.140-145) 調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。掘方の平面形は楕円形を呈し、掘方断面の立ち上がりから推定すると長径約6.0m、短径約5.0mを測る大型のものである。そのためか、壁の傾斜は緩やかに作られる。掘方の覆土は茶褐色シルトでラミナ状に堆積する。井戸はやや南側よりに付けられ、検出面から約1.0m下(標高2.75m)で確認した(Ph.142)。2重の方形枠が設置され、内部に円形の水溜を検出した(Ph.144)。外側の方形枠は一辺1.3-1.4mを測り、内側の方形枠は一辺0.8m前後である。その間に灰色シルトが堆積する。外側の方形枠は標高2.2mまで続き、内側の方形枠は水溜まで続くが、土圧のためか、かなり歪む。また、水溜は検出面で、直径55cmを測り、内側の方形枠との間の覆土は灰黄色シルトである。方形の板材や押さえのための杭等は確認できなかった。水溜には曲物が使用されており、標高約1.0m付近で、横方向の板目を検出した(Ph.145)。曲物の高さは約30cm、直径40cmを測る。

出土遺物 (Fig.96・97 Ph.146) 1135-1137は水溜内から出土した遺物である。1135は土師器の壺で、口径13.0cm、器高3.0cmを測る。底部はヘラ切りで、部分的にナデで調整する。金雲母を含む精良な胎土で、明橙色を呈する。1136は須恵器の壺蓋で、口縁は端部でわずかに折り曲げる。復元口径13.1cmを測り、天井部はヘラ切りである。1137は擦痕を有する灰色の石材である。器面には砂が多量に付着し、重さは40.0gを量る。1138は井戸から出土した土師器の底部片である。底

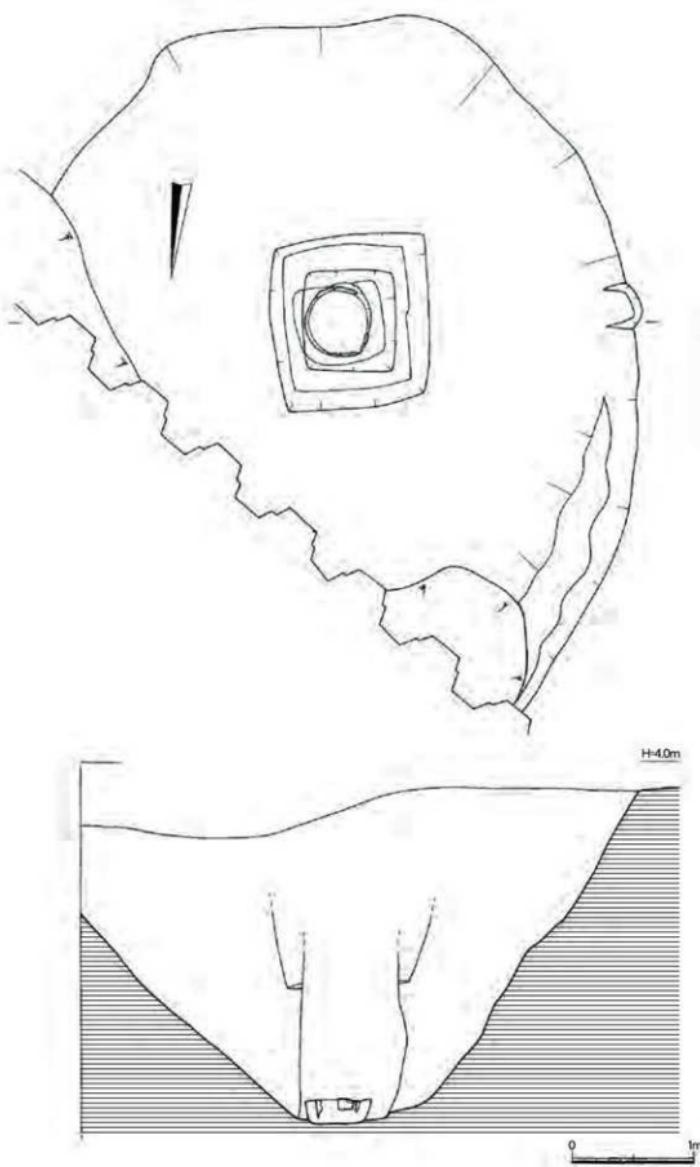
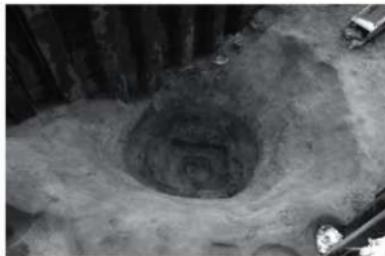


Fig.95 SEO30804 実測図 (1/40)



Ph.140 SE030804 (南から)



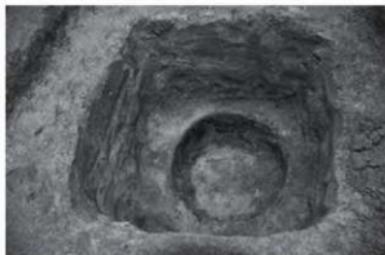
Ph.141 SE030804 (北から)



Ph.142 SE030804 井側検出状況 (南から)



Ph.143 SE030804 井側 (南から)



Ph.144 SE030804 井側・曲物 (西から)



Ph.145 SE030804 曲物 (西から)

部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面中央にはヘラの擦痕を有する。胎土は精良で、色調は明橙色である。1139~1151は掘方出土の遺物である。1139~1146は須恵器である。1139は返りをもつ环蓋で、口縁端部付近は回転ナデで調整する。1140・1141は口縁端部を折り曲げたもので、天井部は回転ヘラ削りを行って仕上げる。1142は环で、器壁は薄く、体部は外方向に直線的に開く。底部はナデで調整する。1143・1144は高台付环で、高台は体部と底部の境よりやや内側に付く。高台内はナデで仕上げる。1145は返りを有する环身である。1146は妻の口縁部で、口縁端部で粘土を外に折り曲げ、幅広とする。頸部外面にタタキがわずかに残る。色調は1139・1144が赤褐色を呈するが、他は灰色である。1147は砂岩の砥石片で、1面のみ残存する。器面には溝状の凹線が残る。1148は管状土錘で、下端をわずかに欠損する。現状で重さは7.0gを量る。1149は弥生土器の

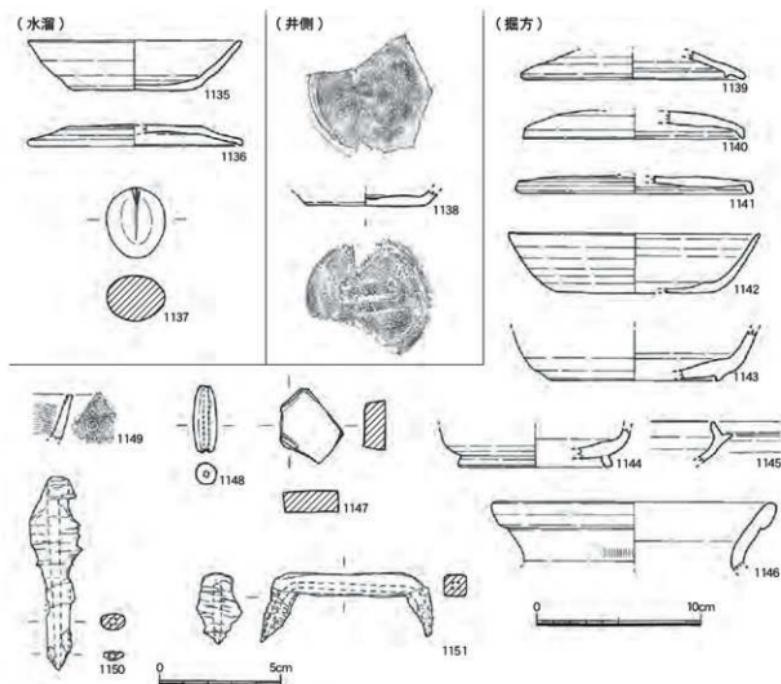
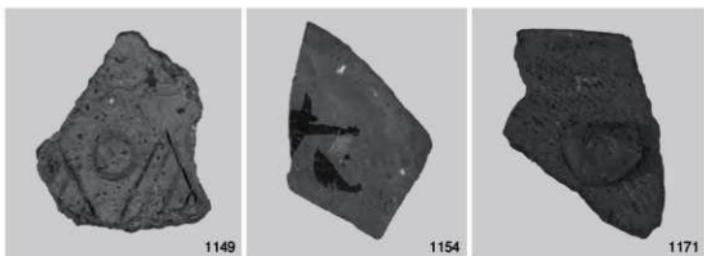


Fig.96 SE030804 出土遺物実測図① (1/3・1/2)



Ph.146 SE030804 出土遺物

複合口縁壺の小片である。外面はナデ、内面は刷毛目で調整した後、外面に波状文、山形文、竹管文を施す。色調は橙色で、胎土に金雲母、白色砂粒を含む。1150・1151は鉄製品である。1150は釘で、長さ 11.8cm 以上、幅 0.35~0.7cm を測る。基部には木質が付着する。1151は一辺 0.4cm を測る断面方形の鎧である。両端部に木質が遺存する。渡りは長さ約 8.0cm を測り、爪は 3.0~4.0cm である。両爪はやや外側に開く。1152~1172 は上層より出土した遺物である。1152~1159 は土師器、1152

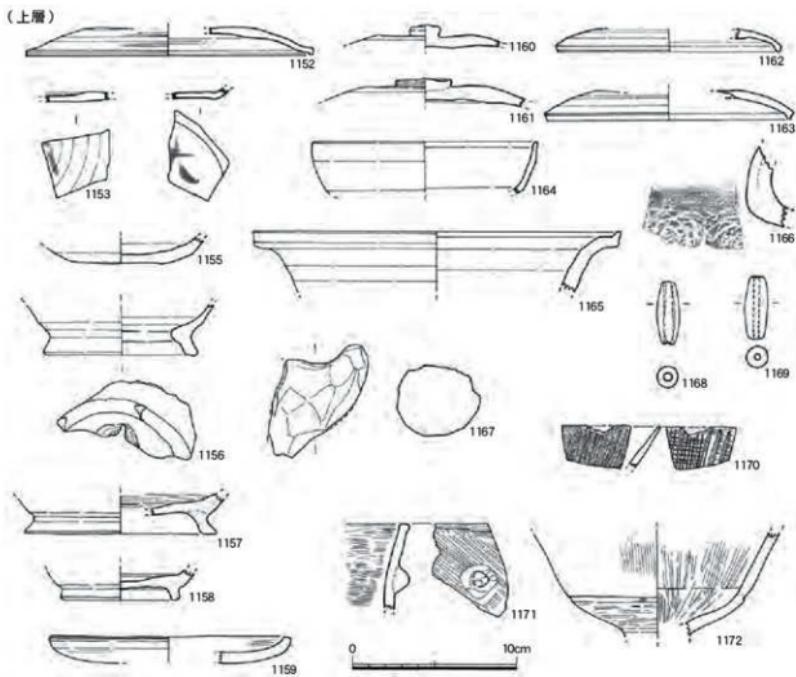
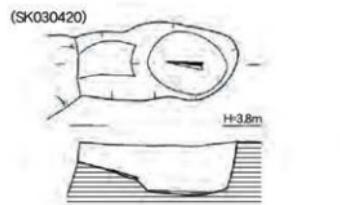
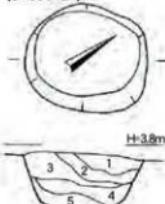


Fig.97 SE030804 出土遺物実測図② (1/3)

は蓋で、口縁端部を下方に折り曲げる。天井部はヘラ削りを行った後、部分的に磨く。胎土に金雲母、赤褐色粒を多く含み、色調は明褐色を呈する。1153・1154は底部片で、ヘラ切り後、ナデで仕上げる。外底部に墨書き有し、1154は「夫」か。1155は坏で、外底部はヘラ切り未調整である。1156-1158は高台付坏である。外底部はヘラ切りで、底部と体部の境に高台を有する。1157の胎土は精良で、内面は磨きを施す。1159は皿で口縁は底部からわずかに上方へ引き上げ、端部は平坦に仕上げる。1160-1166は須恵器である。1160・1161は摘みを有する蓋で、天井部は回転ヘラ削りが残る。1162・1163は口縁端部を下方に折り曲げた蓋で、1163の天井部は回転ヘラ削りで仕上げる。1164は坏身、1165は盤、1166は大甕である。1167は土師器の甕の把手である。1168・1169はほぼ完形の管状土錐である。重さは 5.5g, 6.2g である。1170-1172は下層の混入遺物の土師器で、1170は直口壺の口縁部片で、内外面ともに細い研磨調整を行った後、縦方向のジグザグ状の暗文を施す。1171はこぶ状突起付甕か。口縁は外反気味に開き、端部上面は平坦に仕上げ、外方向にわずかに突出する。1172は高坏で、内面は刷毛目で調整した後、放射状に暗文を施す。他に金属坩堝、鉄滓、炉壁が出土する。井戸の掘削時期は 8世紀中頃に行われ、後半にかけて使用され、9世紀初頭には廃絶されたと考えられる。



(SK030421)



(SK030425)



SK030421

- 1 明灰褐色シルト(炭化物繊維を少量含む)
- 2 灰褐色粘質土(炭化物小片を含み、明灰褐色シルトが埋没する)。
- 3 1層の明灰褐色粘質土(炭化物繊維を埋没)。
- 4 明灰褐色シルト(炭化物シルトが埋没する)。
- 5 灰褐色シルト(炭化物繊維を少量含む)



Ph.147 SK030420 (南西から)

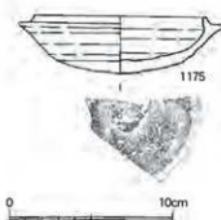


Ph.148 SK030421 土層 (西から)

(SK030420)



(SK030421)

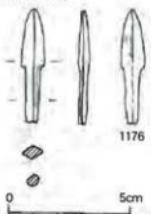


0 10cm



Ph.149 SK030421 (西から)

(SK030425)



0 5cm



Ph.150 SK030425 出土遺物

Fig.98 SK030420・030421・030425 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/2)

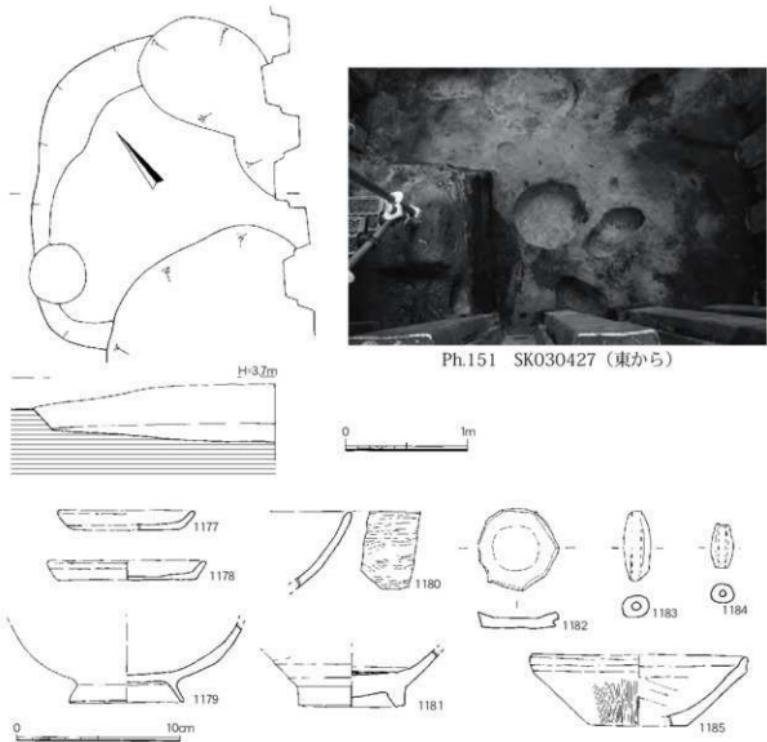


Fig.99 SK030427 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

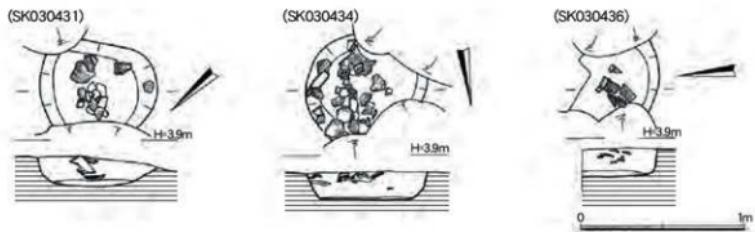
(3) 土坑 (SK)

SK030420 (Fig.98 Ph.147) 調査区東側に位置し、北側を他の遺構に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、現存長 1.3m、幅 0.6m を測る。断面は階段状で、北側にテラスをもつ。南側の最深部で 40cm を測る。覆土は灰色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.98) 1173 は土師器の椀で、断面逆台形の低い高台が付き、体部は丸みを帯びる。内外面ともに手持ちのヘラ磨きを施す。他に遺物は出土せず、土坑の時期は 12 世紀前後と考えられる。

SK030421 (Fig.98 Ph.148・149) 調査区東側に位置する。略円形の平面プランで、直径 0.9-1.0m を測る。断面は逆台形で、深さは 45cm である。土層からは南西方向からの流れ込みが窺える。覆土は灰褐色シルト、粘質土を主体とし、一辺 1-2cm の炭化物を多く含む。

出土遺物 (Fig.98) 1174 は土師器の椀の口縁部片で、復元口径 19.2cm を測る。1175 は須恵器の環身で、返りを有する。外底部にヘラ記号をもつ。他にヘラ切り底の土師器、白磁片、ガラス坩堝が出土し、11 世紀後半の土坑と考えられる。



Ph.152 SK030431 (南西から)



Ph.153 SK030434・030436 (南から)

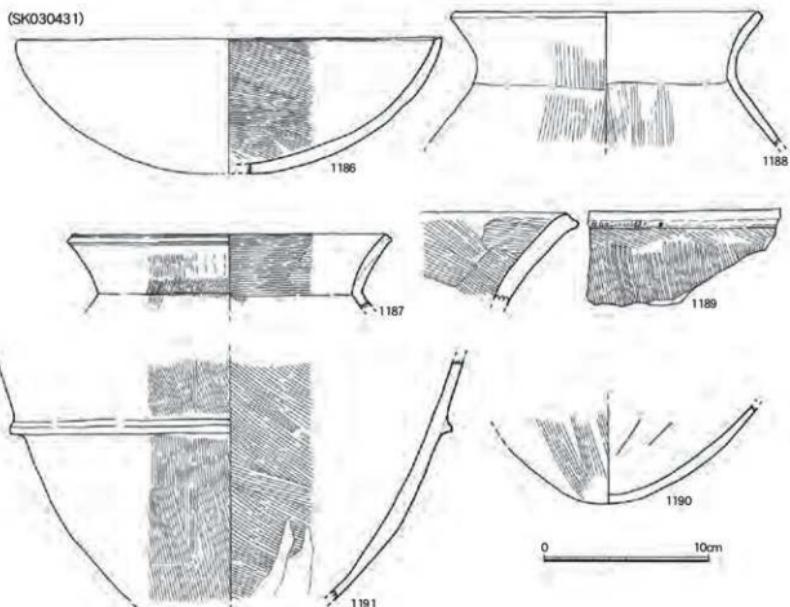


Fig.100 SK030431・030434・030436 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

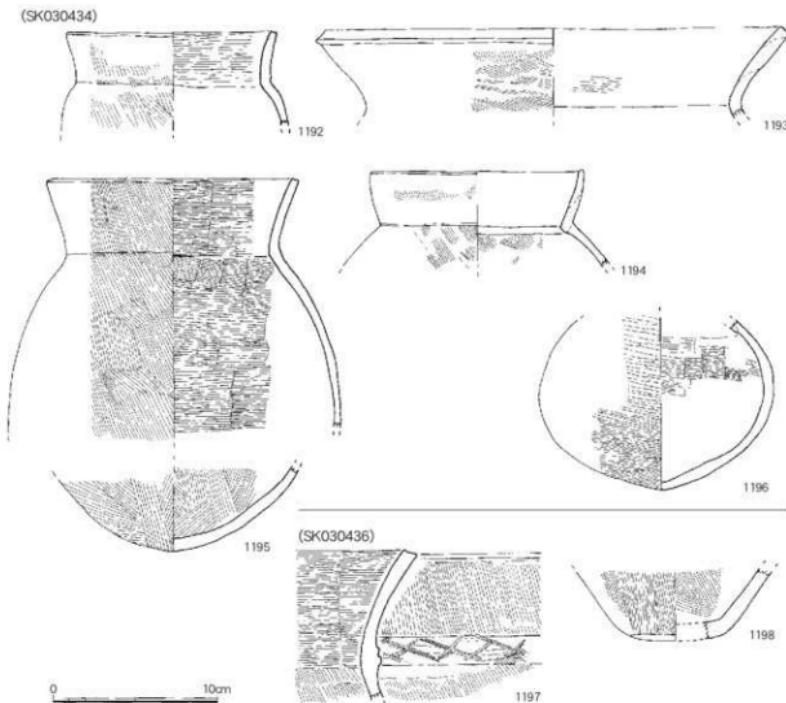


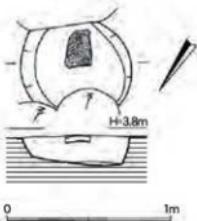
Fig.101 SK030434・030436 出土遺物実測図 (1/3)

SK030425 (Fig.98) 調査区東側に位置し、東側は矢板に切られる。平面プランは開丸方形を呈し、長径 1.1m 以上、短径 0.9m を測る。断面は逆台形で、深さは 15cm である。覆土は茶褐色シルトで、炭化物をわずかに含む。

出土遺物 (Fig.98 Ph.150) 1176 は下層遺物の混入と考えられる鎧を有する柳葉系の銅鏡である。全長 4.65cm、刃部は長さ 2.3cm、幅 0.9cm、厚さ 0.55cm を測る。茎の断面は円形を呈する。他に土師器、高麗陶器等が出土し、土坑の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半と考えられる。

SK030427 (Fig.99 Ph.151) 調査区東側に位置し、東側は他の遺構に切られる。平面プランは方形を呈し、南北方向は一辺 2.6m、東西方向は 2.0m 以上を測る。底面は中央がわざかに深くなつており、深さは現存で 45cm を測る。覆土は茶褐色シルトで、炭化物、焼土を含む。

出土遺物 (Fig.99) 1177・1178 は回転糸切り底の土師器の皿で、1178 は外底部に板状压痕を有する。1179 は土師器の椀で、細く高い高台を有する。1180 は瓦器椀である。1181 は白磁碗 VII類で、内面見込みの釉を環状に掻き取り、目跡も残る。1182 は瓦玉で、土師器の平底を使用し、



Ph.154 SK030437 (南から)

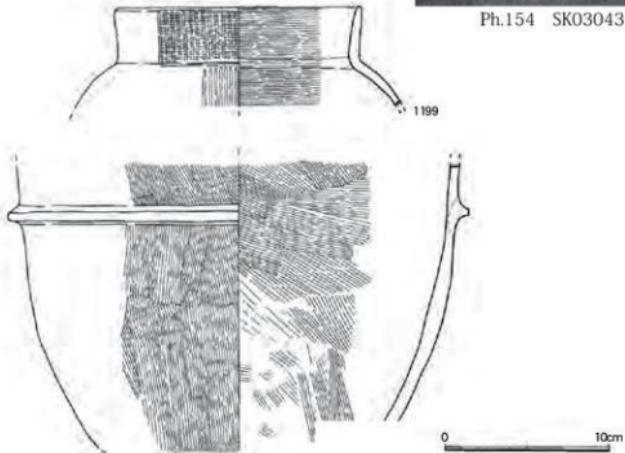


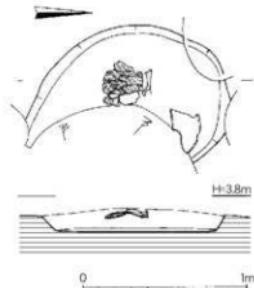
Fig.102 SK030437 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

縁辺を丁寧に打ち欠く。重さは 25.7g である。1183・1184 は管状土錐で、1183 は使用により、磨滅が著しい。1184 はほぼ完形である。重さは 8.5g、3.9g を量る。1185 は下層遺物の混入で、土師器の鉢である。他に回転ヘラ切り底の土師器、鉄塊系遺物、鉄釘、炉壁等を含み、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

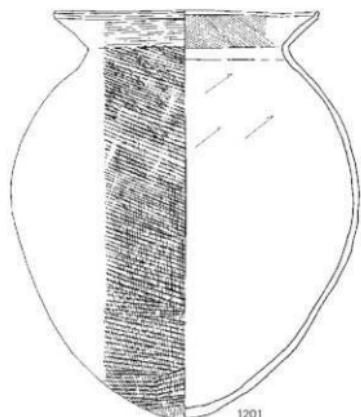
SK030431 (Fig.100 Ph.152) 調査区東側に位置し、西側は他の遺構に切られる。平面プランは直径 0.7m の略円形を呈すると考えられる。深さは 18cm を測り、中央にまとまって土器が出土した。覆土は茶褐色シルトで、炭化物を少量含む。

出土遺物 (Fig.100) 1186-1191 は弥生土器である。1186 は丸底の鉢で、体部内面は細かい刷毛目調整が残る。1187-1191 は甕で、内外面ともに刷毛目で調整し、1188・1190 の内面は縦方向の籠ナデを行う。1189 は大甕で、口縁部上端は四状に窪ませ、口唇部に刻みを入れる。1190 は丸底の底部で、内面は工具によるナデが施される。1191 は胴部片で、断面台形の突帯を巡らす。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代前期前葉と考えられる。

SK030434 (Fig.100 Ph.153) 調査区東側に位置する。平面プランは直径 0.7m の円形を呈し、深さは 16cm を測る。上層にまとめて土器が出土した。覆土は茶褐色シルトを主体とする。



Ph.155 SK030461 (西から)



Ph.156 SK030461 遺物出土状況 (西から)



Fig.103 SK030461 実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.101) 1192-1196 は弥生土器である。1192 は小型の甕、1193 は大甕の口縁部片で、内面には一部刷毛目が残る。1194・1195 はV様式系の甕で、1195 は胴部を一部欠損するが、丸底の底部をもち、底部内面に放射状のハケ調整が認められる。1196 は長頸甕の体部片で、底部は突出させ、丸底とする。他に鉄片が出土する。土坑の時期は弥生時代終末から古墳時代前期前葉と考えられる。

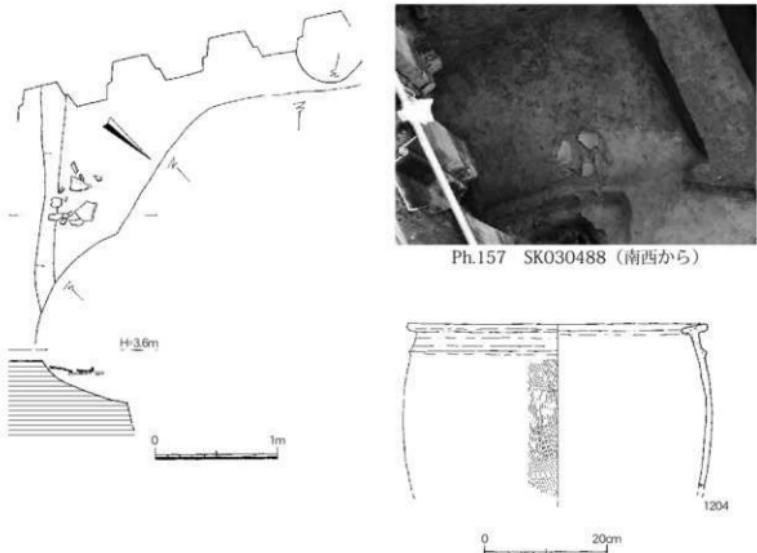


Fig.104 SK030488 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/8）

SK030436 (Fig.100 Ph.153) 調査区東側に位置する。平面プランは円形と思われるが、他の遺構に大部分を削平される。深さは 18cm を測る。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.101) 1197・1198 は弥生土器の裏で、1197 は口縁部片で、頸部に刻目突帯を有する。1198 は凸レンズ状の底部片である。土坑の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

SK030437 (Fig.102 Ph.154) 調査区東側に位置する。平面プランは、直径 0.7m の円形を呈する。断面は方形をなし、深さは 18cm を測る。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.102) 1199・1200 は弥生土器である。1199 は直口壺で、内面には細かい横向の刷毛目が残る。外表面は刷毛目調整の後、縱方向の磨きを入れる。1200 は壺の胸部片で、中位に台形状の突帯を巡らす。これらの出土遺物から土坑の時期は弥生時代後期後葉から終末と考えられる。

SK030461 (Fig.103 Ph.155・156) 調査区中央に位置し、東側を他の遺構に切られる。平面プランは梢円形を呈し、長径約 1.3m、短径 1.0m を測る。断面は方形をなし、深さは 13cm を測る。庄内式甕が横に潰れた状態で出土した。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.103) 1201 は庄内式の甕で、一部欠損するが、ほぼ完形に復元できる。卵型の体部から口縁が開き、口縁端部は摘まみあげる。器壁は薄く、外表面はタタキ、内面は削りで調整される。1201 は大型の複合口縁甕の頸部片である。三角突帯を巡らせ、刻みを入れる。1203 は大型の鉢で、復元口径 38.6cm を測る。内外面ともに刷毛目調整されるが、ナデ消される。これらの出土遺物から土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

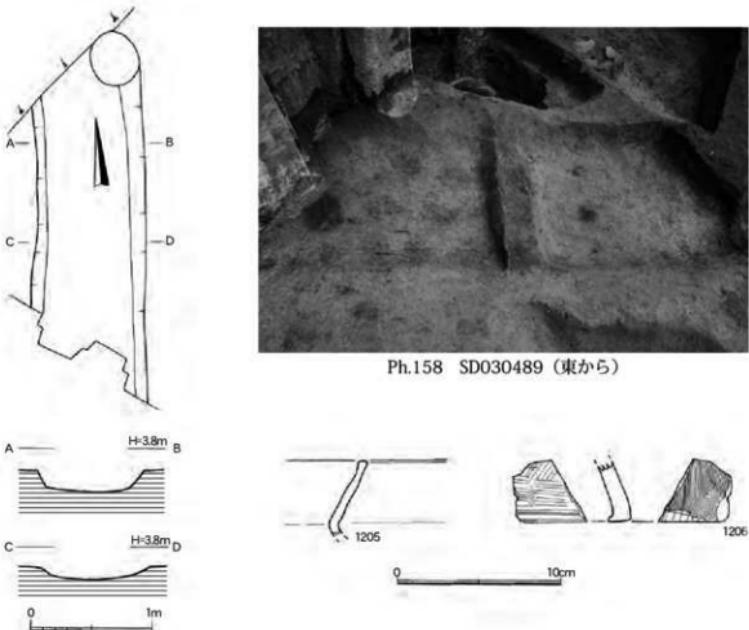


Fig.105 SD030489 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK030488 (Fig.104 Ph.157) 調査区中央に位置し、遺構の大部分は SE030804 と ST030490 に削平される。平面プランは不明で、深さは 30cm ほどである。上面より、弥生土器の大甕が出土する。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物 (Fig.104) 1204 は甕棺の破片で、付近の甕棺が壊された際、ここに廃棄されたと考えられる。復元口径 49.2cm を測り、口縁部は内面側に伸びる「T」字状を呈し、上端はほぼ平坦である。口縁下に断面三角形の低い突帯を貼付する。内面をナデ、外面は刷毛目で調整する。色調は赤橙色を呈する。他は須恵器の壺蓋、高台付壺等が出土し、土坑の時期は古代と考えられる。

(4) 溝 (SD)

SD030489 (Fig.105 Ph.158) 調査区中央に位置し、北側を SE030804 に切られ、南側は調査区外へ延びる。溝の幅は 0.9m、深さは最深で 18cm と遺存状況は悪く、長さ 2.5m を確認した。溝の底面は北側が南側より 10cm 程度深くなり、僅かな傾斜がうかがえる。覆土は灰褐色シルトに橙褐色砂質土や灰色シルトが斑状に混入する。

出土遺物 (Fig.105) 1205 は布留系土器の甕の口縁部片で、口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は水平に仕上げる。1206 は弥生土器の器台の下端部である。端部は内に突出し、平坦をなす。内外面ともに刷毛目で調整する。これらの出土遺物から溝の時期は古墳時代前期後葉と考えられる。

(5) 裹棺 (ST) (Ph.159)

東西幅13mの間に7基の裹棺墓を検出した。弥生時代中期前葉の小児棺5基と成人棺1基が比較的の短期間に営まれており、それからやや時間を置き、後期中葉に裹棺墓1基が形成される。最も高い砂丘列に並列して分布すると考えられる。後世の遺構に削平されるものの遺存状況はよく、成人棺においては人骨も残っていた。掘方については、地山である砂丘とほぼ同色、同質の黄褐色砂であったため、検出が困難であった。掘り過ぎ等があるかと思われる。

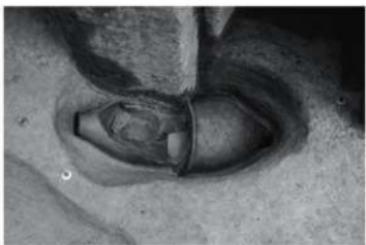
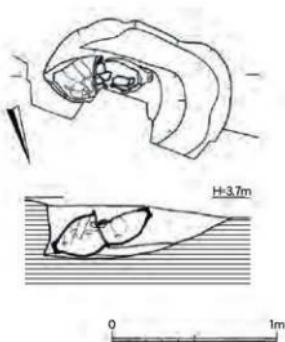
ST030465 (Fig.106 Ph.160・161) 調査区中央に位置する接口式小児用裹棺墓で、上巣、下巣ともに巣を用いる。北側は矢板で切られるが、墓壇平面プランは隅丸方形を呈すると考えられる。長さ1.15m、幅0.65m以上、深さ0.35mを測る。掘方の東壁面に下巣を21°の角度で据え、主軸方位はN-75°Wである。上巣の割れた破片が下巣底部付近まで入りこんでいるため、まだ空洞であった際に破損し、その後、土砂が入り込んだと考えられる。人骨等は出土しなかった。弥生時代中期前葉に位置付けられる。

出土遺物 (Fig.106 Ph.162) 1207は上巣として用いられた小形の巣で、やや内傾する逆「L」字状の口縁部を有し、口唇部は丸味をもつ。やや張りのある胴部は口縁下ですぼみ、外面は縦方向の刷毛目調整を行う。口縁部の内外面はヨコナデ、内面はナデを施す。底部は厚みがあり、僅かに上げ底状を呈する。口径23.2cm、器高31.6cmを測り、橙色の色調である。1208は下巣に使用された小形巣で、形態や調整、色調は上巣と同様である。口径24.5cm、器高32.8cmを測る。

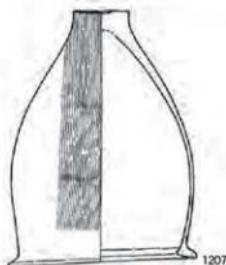
ST030477 (Fig.107 Ph.163・164) 調査区中央に位置する。上巣、下巣ともに巣を用いた接口式小児用裹棺墓であるが、上巣は下巣より小型で、下巣の内径は28.5cm、上巣の外径は29.5cmであるため、口縁の接する箇所はわずかである。そのため、巣棺が土圧で割れ、破片が内部に落ち込



Ph.159 3区裹棺墓（南から）



Ph.160 ST030465 (南から)



Ph.161 ST030465 (南から)

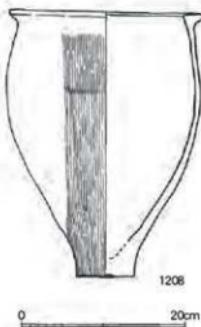
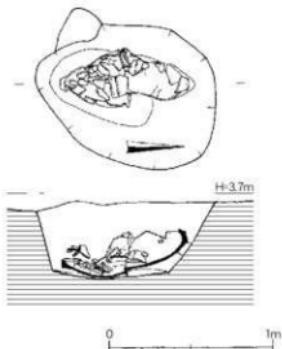


Fig.106 ST030465 実測図 (1/30)

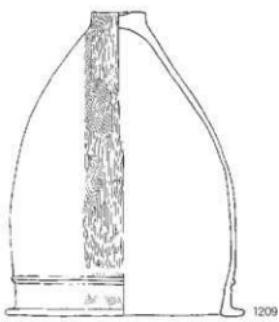
および出土遺物実測図 (1/6)

んだ際、上蓋もずれ、口縁の一部が下蓋内に入り込んだと考えられる(Ph.163)。掘方は南側を後世のピットに削平されるが、平面プランは歪な楕円形を呈し、長径は1.1m、短径0.85m、深さ0.45mを測る。下蓋はほぼ水平に据えられ、上蓋がわずかに14°の角度で入れられる。主軸方位は座標北と同じである。N-0°-Wである。下蓋からは歯が底面より10cmほど浮いた状態で2点出土した。年齢は3-6歳の幼児と推定される(付編5参照)。蓋棺は弥生時代中期前葉に位置付けられる。

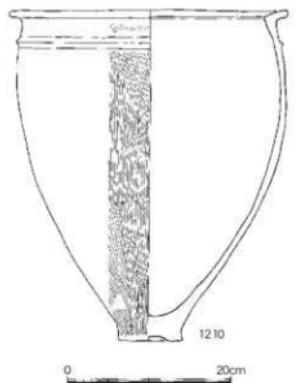
Ph.162 ST030465 出土遺物



Ph.163 ST030477 (東から)



Ph.164 ST030477 (東から)



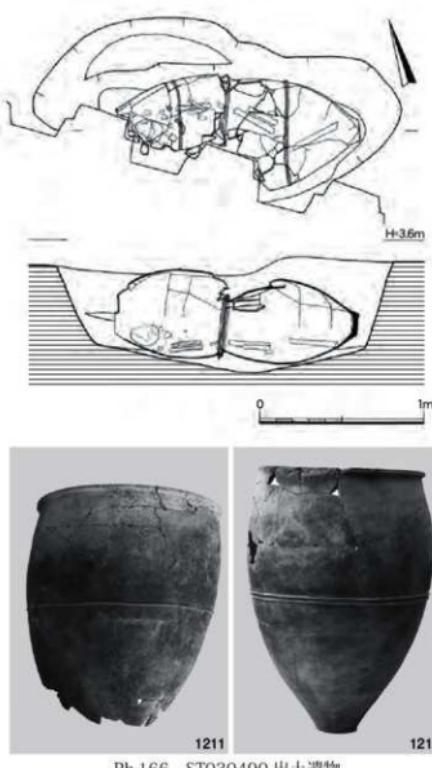
1209



1210

Fig.107 ST030477 実測図 (1/30)
および出土遺物実測図 (1/6)

Ph.165 ST030477 出土遺物



Ph.166 ST030490 出土遺物

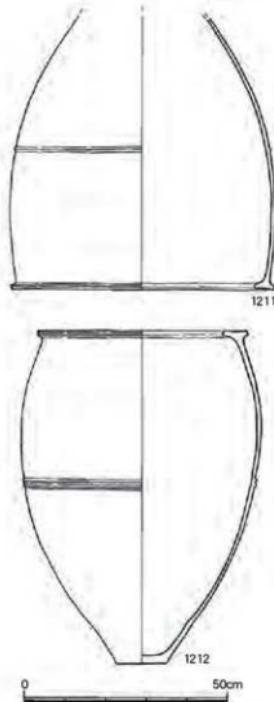


Fig.108 ST030490 実測図 (1/30)
および出土遺物実測図 (1/12)

出土遺物 (Fig. 107 Ph.165) 1209 は上裏に使われた小形の甕で、口径 29.7cm、器高 35.5cm を測る。上面が平坦な逆「L」字状口縁を有し、口唇部は丸く收める。胸部の張りはほとんどなく、直線的な上半部の口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。底部は僅かに上げ底を呈する。外面は縱方向の刷毛目、内面はナデ調整を行うが、突帯から口縁部の内外面にはヨコナデを加える。器面の色調は赤橙色を主体とする。1210 は下甕として用いられた小形の甕で、口縁部は内傾する逆「L」字状を呈する。胸部は僅かに張りがあり、口縁下に断面三角形の低い突帯を配する。底部は僅かな上げ底をなす。外面調整は縱方向の細かい刷毛目、内面はナデ、突帯から口縁部の内外面にはヨコナデを行い、色調は橙色をなす。口径 34.5cm、器高 40.8cm を測る。



Ph.167 ST030490 (北から)



Ph.168 ST030490 人骨 (北から)



Ph.169 ST030490 人骨 (北から)



Ph.170 ST030490 人骨 (北から)

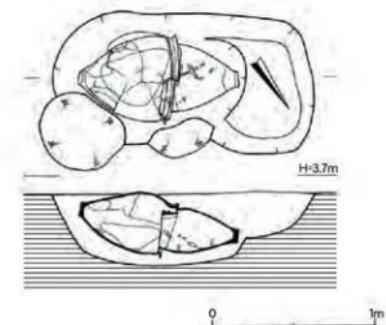


Ph.171 ST030490 (北から)



Ph.172 ST030490 挖方 (北から)

ST030490 (Fig.108 Ph.167~172) 調査区中央に位置し、南側は矢板に切られる。接口式の成人用槨棺墓で、上蓋、下蓋とともに蓋を用いる。墓壙平面プランは歪な楕円形を呈し、長径 2.2m、短径 0.9m 以上、深さ 0.7m を測る。東壁面に下蓋を 4° の角度で据え、主軸方位は N-74°-W である。矢板で削平を受けるまでは遺存状況は良好であったと考えられる。下蓋については、口縁が一周しておらず、一部打ち欠いている可能性がある。なお、人骨も出土するが、外觀以上に骨は脆く、取り上げの際に、碎けたものも多数ある。腕と足は折り曲げられ、頭蓋骨は前方に倒れた状況で検出した。人骨は成人男性とされる（付編 5 参照）。また、頭蓋骨外面及び大腿骨にげっ歯類の噛み傷が確認される。槨棺墓は弥生時代中期前葉に位置付けられる。



Ph.173 ST030492 (南から)



Ph.174 ST030492 人骨 (南から)



Ph.175 ST030492 挖方 (南から)

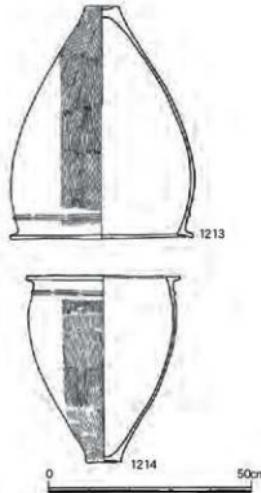
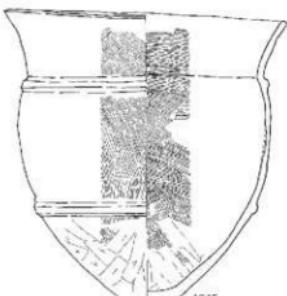
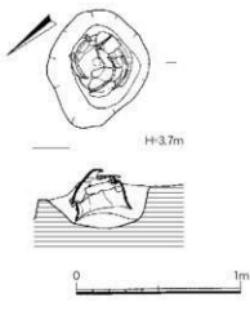


Fig.109 ST030492 実測図 (1/30)
および出土遺物実測図 (1/12)



Ph.176 ST030492 出土遺物



Ph.177 ST030667 (南から)



Ph.178 ST030667 (南から)

Fig.110 ST030667 実測図 (1/30)
および出土遺物実測図 (1/6)



Ph.179 ST030667 出土遺物

出土遺物 (Fig. 108 Ph.166) 1211は上縁に使用された甕で、底部を欠失する。復元口径 64.0cm、残存器高 67.0cm を測る。口縁部は内面側に伸びる「T」字状を呈し、上面はほぼ平坦である。胴部は口縁下で僅かにすぼまり、中位に断面三角形の低い突帯を貼付する。内外面を丁寧にナデ調整する。色調は黄橙色を主体とし、胴部下半には黒斑が認められる。1212は下縁に用いられた甕で、口縁部の形態は上縁に類似する。やや張りのある胴部には 2 条の断面三角形の突帯が巡り、そこから平底の底部に直線的にすぼまる。器面には丁寧なナデを施し、橙色の色調を呈する。復元口径 51.2cm、器高 81.3cm を測る。

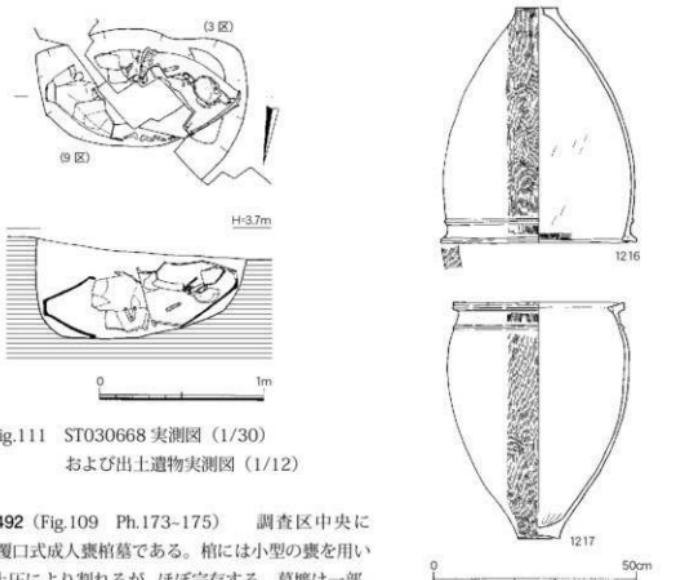
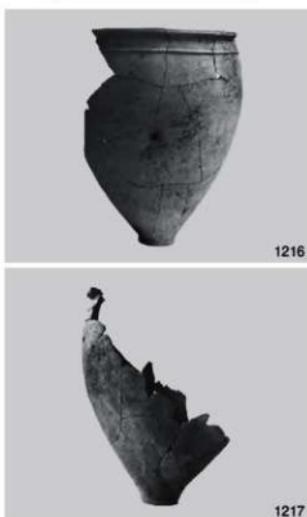


Fig.111 ST030668 実測図 (1/30)
および出土遺物実測図 (1/12)

ST030492 (Fig.109 Ph.173-175) 調査区中央に位置する覆口式成人喪棺墓である。棺には小型の喪を用いており、土圧により割れるが、ほぼ完存する。墓壙は一部、後世の遺構に切られるものの、遺存状況は良好である。小振りの下喪を墓壙の西側テラス下に埋置し、被葬者の膝を折り曲げ、足から挿入し、やや大振りの喪をかぶせ、埋葬する。検出した墓壙の平面プランは隅丸方形を呈し、長辺1.6m、短辺0.8mを測る。深さは0.65mで、西側にテラスを検出したが、喪棺の設置をからは、別遺構である可能性も考えられる。喪棺は10°の角度で据えられ、主軸方位はN-55°-Wである。人骨の遺存状況は悪く、足の一部と約30cmの範囲内で歯が出土する。また、喪棺内2ヵ所に5-10cmの範囲で、白色を帯びた膜状のものを検出したが、脆く、取り上げることはできなかった。歯の出土状況から頭骨等に関わるものと考えられる。人骨は5-6歳前後の幼児と推定される(付図5参照)。弥生時代中期前葉の喪棺墓である。

出土遺物 (Fig. 109 Ph.176) 1213は上喪に使われた小形の喪で、口径44.6cm、器高56.4cmを測る。口縁部は内傾する逆「L」字状をなし、上面は僅かに凹面を呈する。やや張りのある胴部は口縁下ですばり、断面三角形の突帶が1条配される。胴部最大径は上位にあ



Ph.180 ST030668 出土遺物



Ph.181 3区 ST030668（南東から）

Ph.182 9区 ST030668（北から）



Ph.183 3区 ST030668 人骨（南から）

Ph.184 3区 ST030668 人骨（南から）



Ph.185 3区 ST030668 挖方（南東から）

Ph.186 3区 ST030667・030668（南から）

り、底部は上げ底を呈する。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデ調整を行う。色調は主に橙色である。1214は下甕に用いられた小形甕である。逆「L」字状の口縁部を有し、口唇部は面取りを施す。胴部は上位にやや張りがあり、僅かにすぼむ口縁下に断面三角形の低い突帯を貼付する。口径37.4cm、器高45.4cmで、黄橙色を呈する。

ST030667 (Fig.110 Ph.177・178) 調査区東側に位置する倒置式の小児用甕棺墓である。棺には甕を用い、南側がやや6.0cmほど高く、傾く。胴部付近から上部は割れ、墓壙底面に甕棺底部片が落ち込む。内部からは何も出土しなかった。甕棺墓は弥生時代後期中葉に位置付けられる。

出土遺物 (Fig.110 Ph.179) 1215は口径35.0cm、器高36.3cmを測る甕である。「く」字状に外反する長い口縁部を有し、口唇部は面をなす。口縁内面の屈曲部の稜はやや鋸歯状であり、

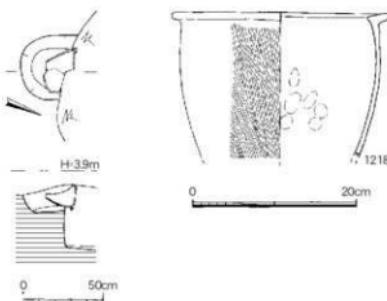


Fig.112 ST030811 実測図 (1/30)
および出土遺物実測図 (1/6)



Ph.188 ST030811 出土喪棺

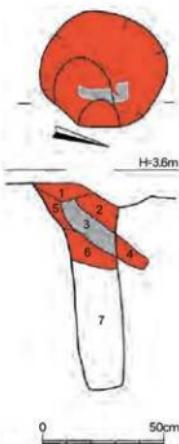
底部は不安定なレンズ底状を呈する。外面の頸部と胴部下半に、断面台形状の低い突帯が巡る。内外面に刷毛目が顕著に認められるが、外面の底部には削りの痕跡が残る。にぶい黄橙色の色調を呈する。

ST030668 (Fig.111 Ph.181~186) 調査区東側に位置する接口式小児用喪棺墓で、上蓋、下蓋とともに蓋を用いる。北側は9区に及び、一部、矢板で削平されるが、9区で下蓋の続きを確認した。墓壇の平面プランは隅丸方形を呈し、長径1.3m、短径0.7m、深さ0.6mを測る。喪棺は9°の角度で据えられ、主軸方位はN-100°-Wである。喪棺内からは、遺存状況は非常に悪いが、頭骨、腕骨、下肢骨が出土する。頭蓋骨は転がり、原位置を保っていない。人骨は5歳前後の幼児と推定される(付編5参照)。弥生時代中期前葉の喪棺墓と考えられる。

出土遺物 (Fig. 111 Ph.180) 1216は上蓋として使われた小形の蓋で、やや内傾する逆「L」字状の口縁部を呈し、ほとんど張りのない胴部の上位に断面三角形のシャープな突帯が1条巡る。外面は縱方向の刷毛目、内面は口縁部の一部に横方向の刷毛目が残るが、大半をヘラ状工具によるナデを施す。復元口径47.8cm、器高57.2cmを測り、橙色の色調を呈する。1217は下蓋に利用された小形の蓋で、復元口径41.5cm、器高57.5cmを測る。口縁部は内傾する逆「L」字状をなし、口唇部を広く面取りする。胴部の張りは鈍く、僅かにすぼまる口縁下に断面三角形の突帯を配する。外面は縱方向の細かい刷毛目調整、内面をナデで仕上げる。色調は橙色を主体とする。

ST030811 (Fig.112 Ph.187) 調査区中央南側に位置し、南側の大部分をSK030696に切られる。また、上部をSC030845に削平され、遺存状況は悪く、蓋の口縁付近の一部が残存するのみである。他の遺物等は確認できなかった。弥生時代中期前葉の喪棺墓と考えられる。

出土遺物 (Fig. 112 Ph.188) 1218は復元口径27.0cmを測る蓋で、下半部を欠損する。内傾する逆「L」字状口縁部を有し、口唇部は丸い。胴部にはやや張りが認められ、外面は刷毛目、内面はナデ調整を施し、一部に指オサエが残る。器面が主に橙色を呈する。



Ph.189 SP030429 土層 (南西から)

SP030429
 1 明赤褐色細砂(赤色顔料、灰色鉛少量混入)
 2 明赤褐色細砂(赤色顔料、黄褐色細砂が塊状に混入)
 3 褐赤褐色細砂(土木相等含む化物質混入)
 4 赤褐色細砂(赤色顔料、灰化物質混入)
 5 赤褐色細砂(土木相等含む化物質混入、赤色顔料)
 6 黄褐色細砂(明赤褐色細砂が塊状に混入、赤色顔料)
 7 灰褐色細砂(灰化物質混入)

Fig.113 SP030429 実測図 (1/20)



Ph.190 SP030429 赤色顔料 (北から)



Ph.191 SP030429 (南から)

(6) ピット (SP)

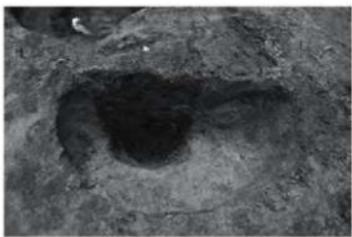
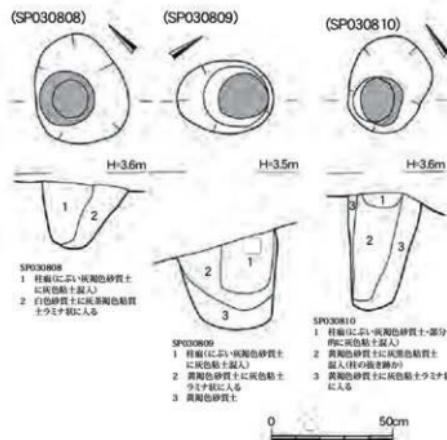
西側調査区はピットが東西方向に並ぶことは平面上で確認できるが、南北方向で対応する柱を確認することができず、掘立柱建物を建てるまでは至らなかった。

SP030429 (Fig.113 Ph.189-191) 調査区東側中央に位置し、南側を SK030272 に切られる。平面プランは円形を呈すると思われ、直径約 0.5m を測る。深さは 0.85m と深く、覆土の上層（1-6 層）約 35cm は明赤褐色を呈し、分析の結果、赤色顔料（ベンガラ）が検出された（III-34.2. 保存科学的調査参照）。下層の 7 層は灰褐色細砂で、赤色顔料は全く見られなかった。3・4 層の土層の乱れは植物の根等によるものと思われ、やや粘質を帯びた覆土である。遺物は出土せず、切り合い間係から 11 世紀後半以前の時期であるが、詳細は不明である。

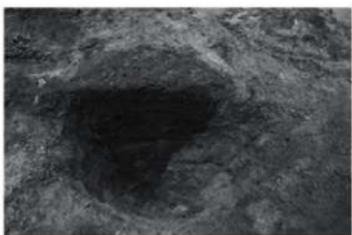
SP030805 (Fig.114 Ph.192) 調査区西側中央に位置し、北側と南側を井戸で切られる。掘方の平面プランは約 60cm の略円形を呈し、東側により柱痕跡を確認した。柱は直径約 16cm、周縁には灰黒色を呈する粘質土が部分的に巡り、焼土を含む。土師片が 2 片出土するのみで時期は不明で



Ph.192 SP030805 土層（南東から）



Ph.193 SP030806 土層（南東から）



Ph.194 SP030808 土層（南から）

Fig.114 SP030805・030806・030808・
030809・030810 実測図 (1/20)



Ph.196 SP030810 土層（南から）



Ph.195 SP030809 土層（南から）

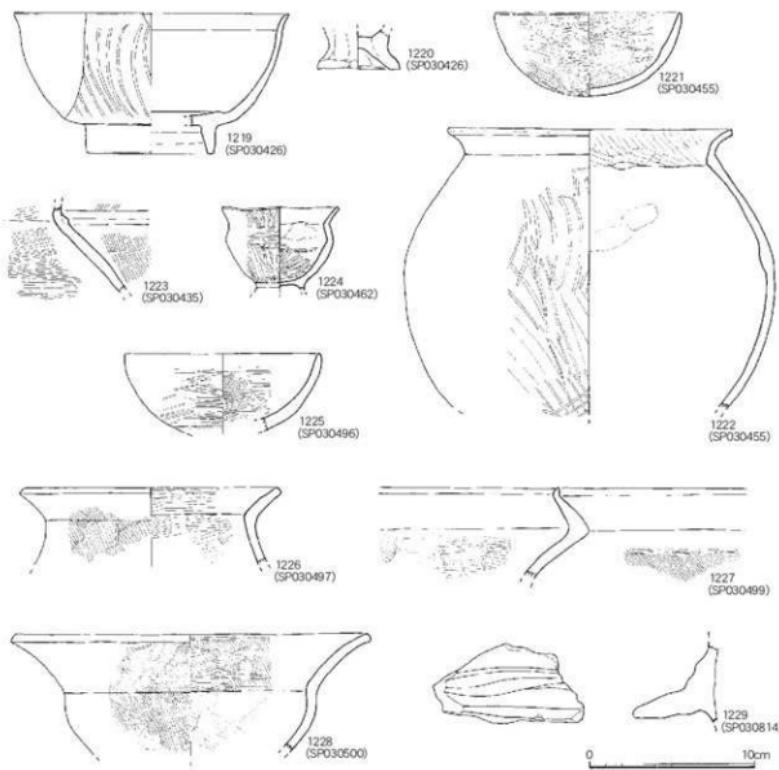


Fig.115 第5面 SP 出土遺物実測図 (1/3)

あるが、他のピットの覆土の状況等から 11 世紀後半から 12 世紀前後と考えられる。

SP030806 (Fig.114 Ph.193) 調査区西側中央、SP030805 から約 0.9m 東側に位置する。掘方の平面プランは約 30-40cm の楕円形を呈し、ほぼ中央で柱痕跡を確認した。柱は直径約 16cm、覆土は黒色を呈し、粘質を帯びる。また、焼土や炭化物を多く含む。土師小片が出土するのみで、時期は不明であるが、SP030805 に連なるピットであると思われる。

SP030808 (Fig.114 Ph.194) 調査区西側中央に位置し、SP030806 から約 0.8m 北側に離れる。掘方の平面プランは約 35-45cm の楕円形を呈し、西側よりに柱痕跡がある。柱は直径約 23cm、覆土は灰黒色を呈し、粘質を帯び、焼土や炭化物を多く含む点は前述のピットと同様である。掘方から白磁、施釉陶器が出土しており、ピットの時期は 11 世紀後半から 12 世紀前後と考えられる。

SP030809 (Fig.114 Ph.195) 調査区西側中央に位置する。掘方の平面プランは約30~40cmの楕円形を呈し、北東側により柱痕跡がある。柱は直径約20cm、覆土は黒色を呈し、粘質を帶び、炭化物を含む。柱痕跡からは回転糸切り底、ヘラ切り底の土師器、鉄釘が出土する。出土遺物からピットの時期は11世紀後半から12世紀前半と考えられる。

SP030810 (Fig.114 Ph.196) 調査区西側中央、SP030809から約1.4m東側に位置する。掘方の平面プランは約35~40cmの楕円形を呈し、西端に柱痕跡がある。柱は直径約18cm、柱底面はやや西側に傾く。覆土は上層のみ灰黒色を呈し、粘質を帶び、焼土や炭化物を多く含む。下層は灰黒色土と黄褐色砂の層状である。白磁、瓦器小片が出土しており、ピットの時期は11世紀後半から12世紀前後と考えられる。

SP 出土遺物 (Fig.115) 1219・1220はSP030426出土、1219は白磁碗で、細く高い高台が付く。見込みは広く、底部と体部の境に段をもって立ち上がり、口縁端部で外反する。少量の黒色粒を含む灰白色の胎土に化粧土を施し、やや縁を帯びた灰白色の釉が高台骨付を巻き込んで高台内までかかる。外面に縱籠花弁文を施し、細かい貫入が全面に入る。1220はミニチュア土器の脚部である。内外面ともに指ナデで整形する。1221・1222はSP030455出土の土師器である。1221は丸底坏で、内面体部中位を肥厚させ、段を有し、体部と口縁の境とする。底部外面は削り、他はナデで調整した後、細い磨きを施す。胎土に金雲母を多量に含み、色調は明褐色を呈する。1222は甕で球状の体部に口縁が強く外反する。底部内面は削りのちナデ、肩部内面付近には指オサエが残る。口縁部内面は粗い刷毛目で調整する。口縁から体部にかけては縱方向の工具によるナデを施す。体部内面中位以下には焦げ、外面には煤が付着する。1223はSP030435出土の複合口縁壺である。頸部に三角突帯を巡らす。1224はSP030462出土の弥生土器の小型壺である。器壁は薄く、胎土は精良で、金雲母を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。指ナデで調整した後、外面は縱方向、一部頸部付近は横方向の細かい研磨を施す。1225はSP030496出土の土師器の鉢である。1226はSP030497出土の弥生土器の甕の口縁部片で、内外面ともに刷毛目で調整される。口縁部外面には多量の煤が付着する。胎土に大粒の金雲母を多量に含み、色調は明橙色を呈する。1227はSP030499出土の複合口縁壺の小片である。1228はSP030500出土の高坏の坏部片で、丸味を持った体部から口縁は外に大きく外反する。1229はSP030814出土の移動式竈の底部分である。底の上面に焦げ、内面に煤が付着する。

(7) 包含層・その他の出土遺物 (Fig.116-127 Ph.197~206)

1230-1255は1-2面の包含層出土遺物である。1230は完形の回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径9.8cm、器高1.2cmを測り、外底部に板状圧痕を有する。1231は完形の回転糸切り底の土師器の小皿で、口径8.9cm、器高1.1cmを測る。1232はほぼ完形の回転糸切り底の土師器の小皿で、口径6.8cm、器高1.6cmを測る。口縁端部に2箇所煤の付着があり、灯明皿として使用する。1233は瓦器椀の底部片である。1234は青白磁の火灯器の小片である。黒色粒を含む精良な胎土に体部内面上半から外面にかけて青味がかる灰白色釉がかかる。全体に細かい貫入が入る。1235-1237は白磁である。1235は皿II-1a類、1236は皿III-1類、1237は碗V類である。1238は龍泉窯系青磁碗II-b類である。1239は龍泉窯系青磁の小皿で、肩部には摘みを有し、横方向と縱方向に沈線を入れ、区画する。灰白色的胎土に淡緑灰色の釉がかかる。1240は施釉陶器の口縁部片である。明橙色の胎土に黄灰褐色の釉がかかる。外面には竈で片彫りの文様を施す。1241は施釉陶器の壺の胴部片である。微細な黒色砂粒を含む灰色の胎土に黄褐色の釉がかかる。外面には花文が描かれる。1242は天目茶碗で口縁下に段を有する。1243・1244は圓盤状土製品で、1243は回転糸切り底の土師器を

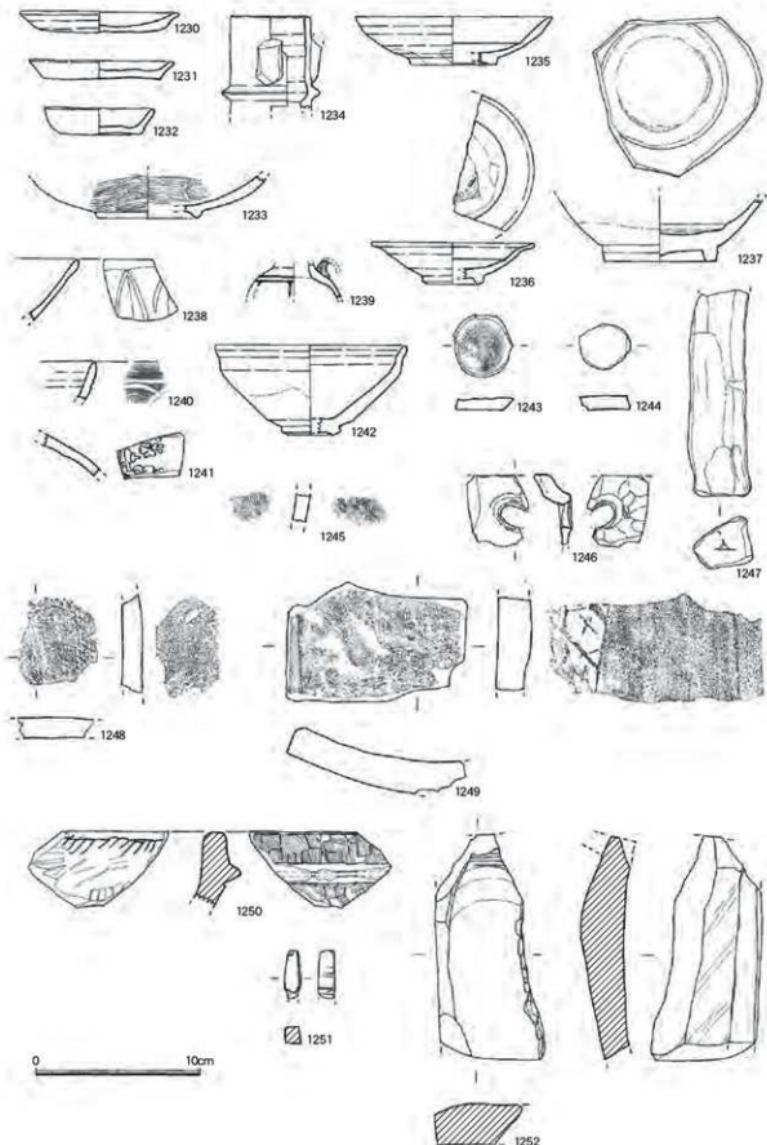


Fig.116 第1-2面包含層出土遺物実測図① (1/3)

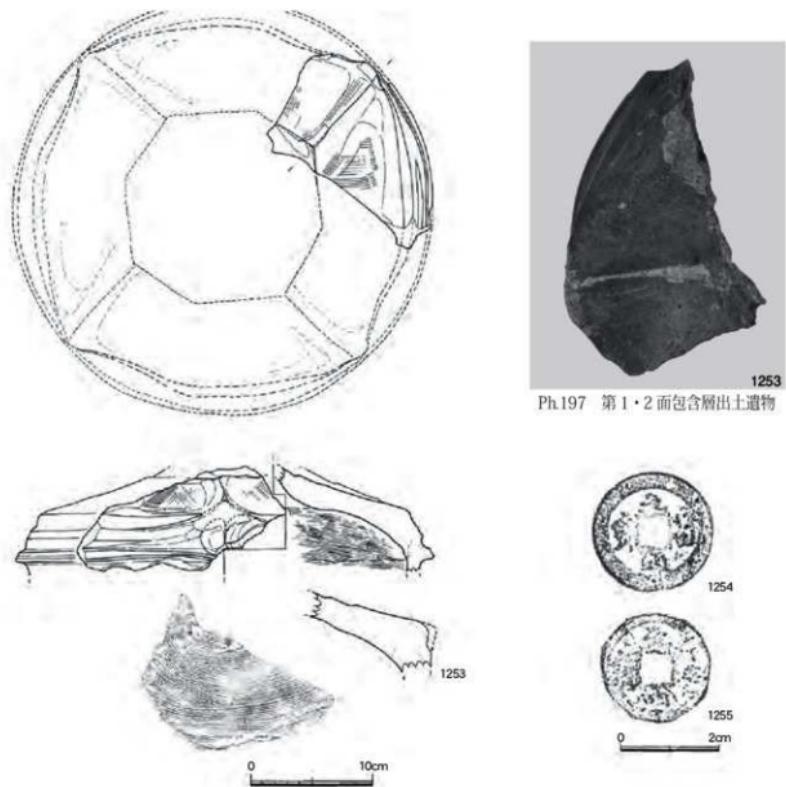


Fig.117 第1・2面包含層出土遺物実測図② (1/4・1/1)

用いる。重さは 12.9g、8.2g である。1245 は製塙土器、1246 は蜻壺、1247 は土師質の竈窓である。1248 は瓦質の平瓦で、凸面には縄目、凹面に布目が残り、部分的にナデ消している。1249 は須恵質の平瓦で、凸面には斜格子、凹面には布目が残り、側面はナデで調整する。1250 は滑石製石鍋の口縁部片で、破面は研磨される。外面から口線上端部は煤が付着する。1251 は滑石製の鍤か。1/2 の残存で、中央部に 2 方向から抉りが入る。細かく研磨され、丁寧に仕上げられ、重さは現状で 5.5g を量る。1252 は粘板岩製の砥石である。本来は硯として利用されており、縁はほぼ失われるが、海部でわずかに痕跡がうかがえる。1253 は瓦質の大型の蓋か。器壁は 2.0cm と厚く、復元口径は 34.0cm を測る。口縁は天井部から外方向に延び、返りを有する形状と思われる。また、天井は稜線により 4 分割され、稜線は口縁部で突出する。外面の調整はナデで仕上げられるが、刷毛目が部分的に残る。内面は刷毛目調整である。煤等の付着はみられない。1254・1255 は銅鏡である。1254 は北宋で、「元符通寶」(初鑄年: 1098 年) である。1255 は表面に木質が付着し、一部不明だが「元祐通寶」である。

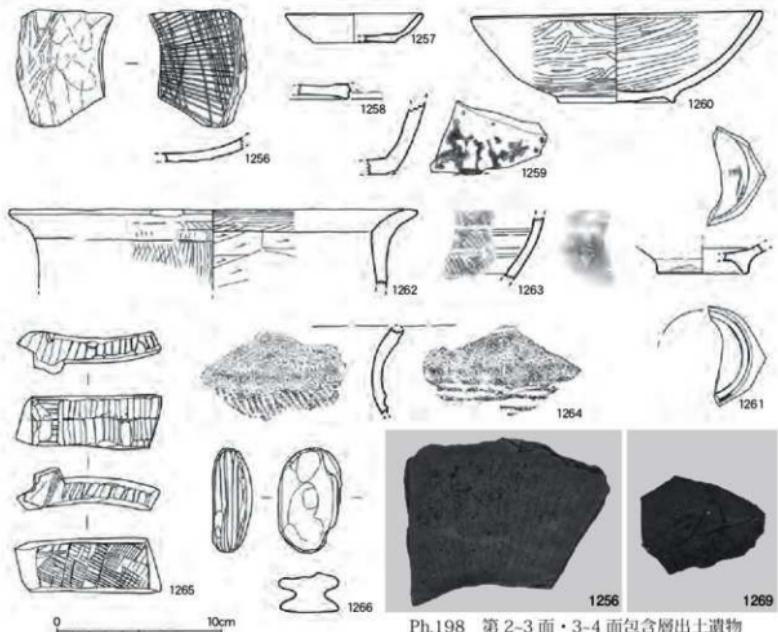


Fig.118 第2-3面・3-4面包含層出土遺物実測図 (1/3)

1256-1266は2-3面の包含層出土遺物である。1256は土器師の高環の環部片である。内面はナデで調整したのち、斜方向に磨きを入れ、放射状の細かい暗文を施す。外面は指ナデ、指オサエで調整される。胎土には金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。1257は須恵器の環である。復元口径84cm、器高1.8cmを測る。底面には自然釉がかかる。1258・1259は防長産の縄軸陶器である。1258は円盤状高台を有する皿と考えられる。橙色から灰橙色を呈する胎土に淡緑色の釉が全面にかかり、部分的に橙色を呈する。1259は壺の底部片と思われ、磨滅が著しいが、軟質の橙色の胎土に濃緑色の釉がかかる。1260は瓦器椀、1261は越州窯系青磁碗である。1262は土器師の腰で、体部外面は刷毛目、内面は削りで調整される。1263は高麗陶器の壺の体部片である。外面は平行タタキの後、部分的にナデ消す。内面は当て具痕が残り、等間隔に沈線を巡らす。1264は製塙土器で、内外面に粗いタタキが残る。1265は滑石製石鍋の二次加工品である。破面は丁寧に研磨調整される。煤・焦げ等の付着はみられない。1266は土製の鍤で、断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が側面に縱方向に一条巡る。側面は部分的に剥離する。重さは57.2gを量る。

1267-1296は3-4面の包含層出土遺物である。1267は楠葉型黒色土器A類で、横方向の細かい磨きを施したのち、暗文を描く。1268はほぼ完形の瓦器皿である。内面中位は強いヨコナデにより四状に窪む。胎土に雲母を多量に含み、全面丁寧なナデで仕上げる。1269-1278は須恵器である。1269は天井部片で、外面にヘラ描きを有する。1270は宝珠形の摘みをもつ环蓋である。天井はヘラ削りで調整し、ヘラ記号を刻む。1271は环蓋で、天井部にヘラ削りが残るが、難なナデで仕上げる。1272は口縁端部を下方につまみ出した环蓋である。天井部にはヘラ削りが残る。1270・1271とも

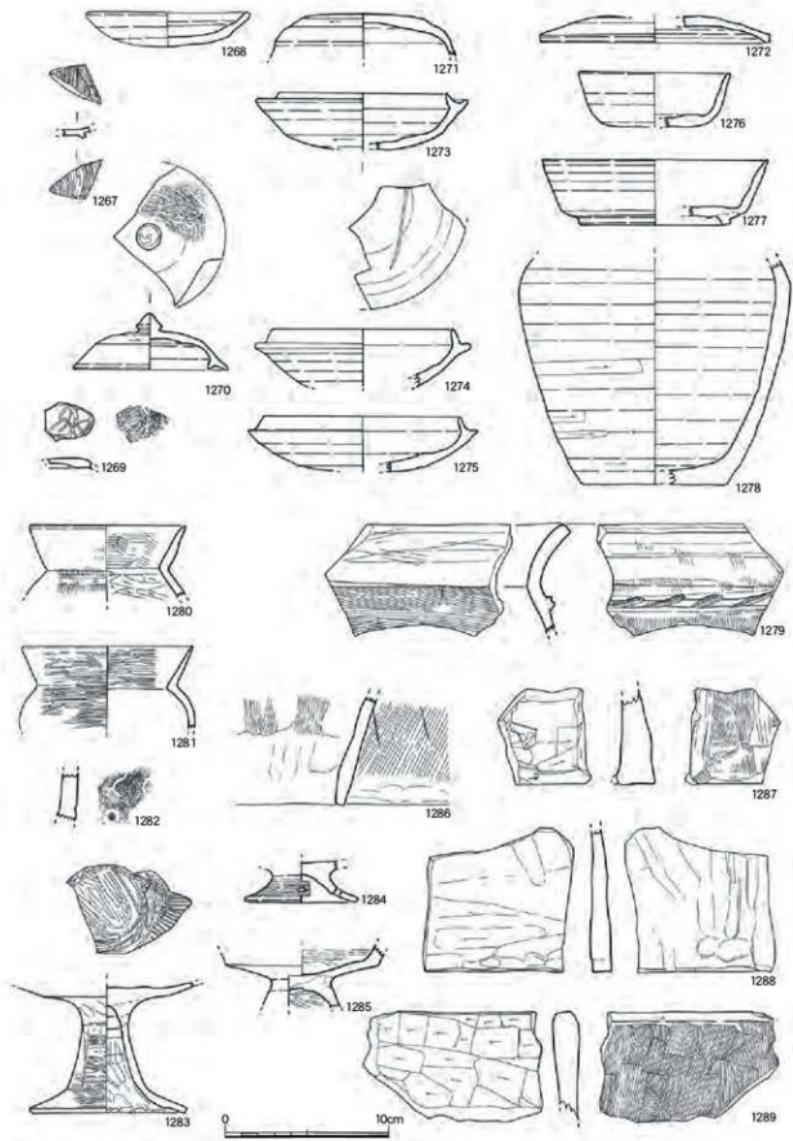


Fig.119 第3-4面包含層出土遺物実測図① (1/3)

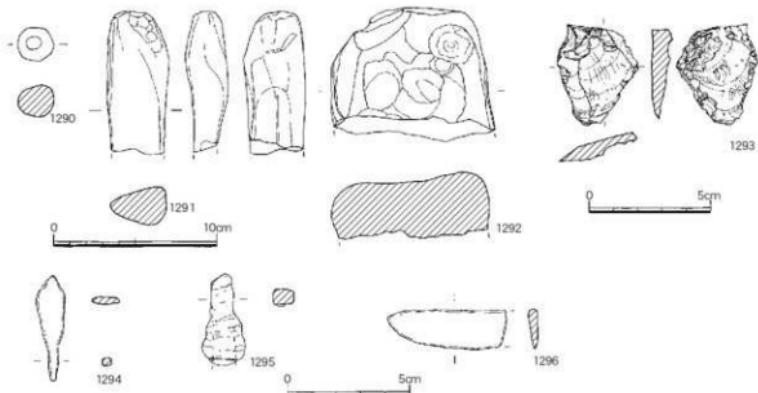
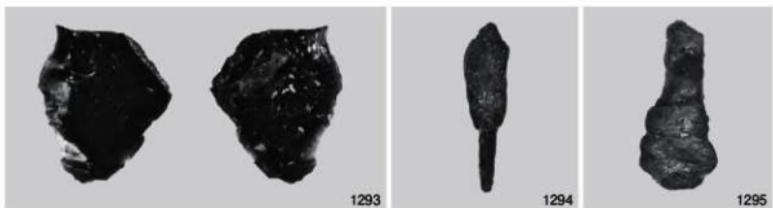


Fig.120 第3~4面包含層出土遺物実測図② (1/3・1/2)



Ph.199 第3~4面包含層出土遺物

に胎土は灰色を呈するが、色調は暗褐色である。1273~1275は返りを有する坏身である。1273の底部はヘラ削りであるが、他はヘラ切り、未調整である。1273は底部にヘラ記号を有する。1276は小型の坏身で、体部は外側に直線的に延び、端部は丸く仕上げる。底部はヘラ切り、未調整で、体部は回転ナデを施す。1277は高台付坏身で、断面方形の高台が底部と体部の境よりやや内側に付く。1278は長胴壺の底部片で、丁寧な回転ナデで調整する。1279は弥生土器の甕の口縁部片で、頸部下には断面台形の突帯が造り、刻みを施す。金雲母を多量に含み、焼成は良好である。1280~1289は土器師である。1280・1281は小型丸底壺、1282は畿内系の二重口縁壺の口縁部片で、竹管文を施す。粒子の大きい金雲母を多量に含み、色調は淡橙色を呈する。1283は小型の高坏で、坏部外面には細かい暗文を施す。1284は脚付鉢で、脚の中位に穿孔を有する。体部は横方向の磨きで調整される。1285は小型器台である。1286は甕の底部片で、内面には焦げが付着する。1287~1289は移動式窯で、1287・1288は脚部片、1289は受部片である。1290は砂岩製の石球で、10.0gを量る。1291は粘板岩製の砥石の破片である。2面を砥面として利用し、側面と上端は叩打具として利用する。現状で、重さは104.6gである。1292は変成岩製の台石である。大半は欠損するが、上面の使用部分は凹状に窪む。一部褐色を呈しており、被熱した可能性が考えられる。1293は黒曜石で、使用痕のある剥片である。自然面が1面残り、角礫を使用する。気泡が多く、色調は漆黒色を呈する。重さは9.7gである。1294~1296は鉄製品である。1294は柳葉系の有茎式鉄鎌で、長さ4.3cm、

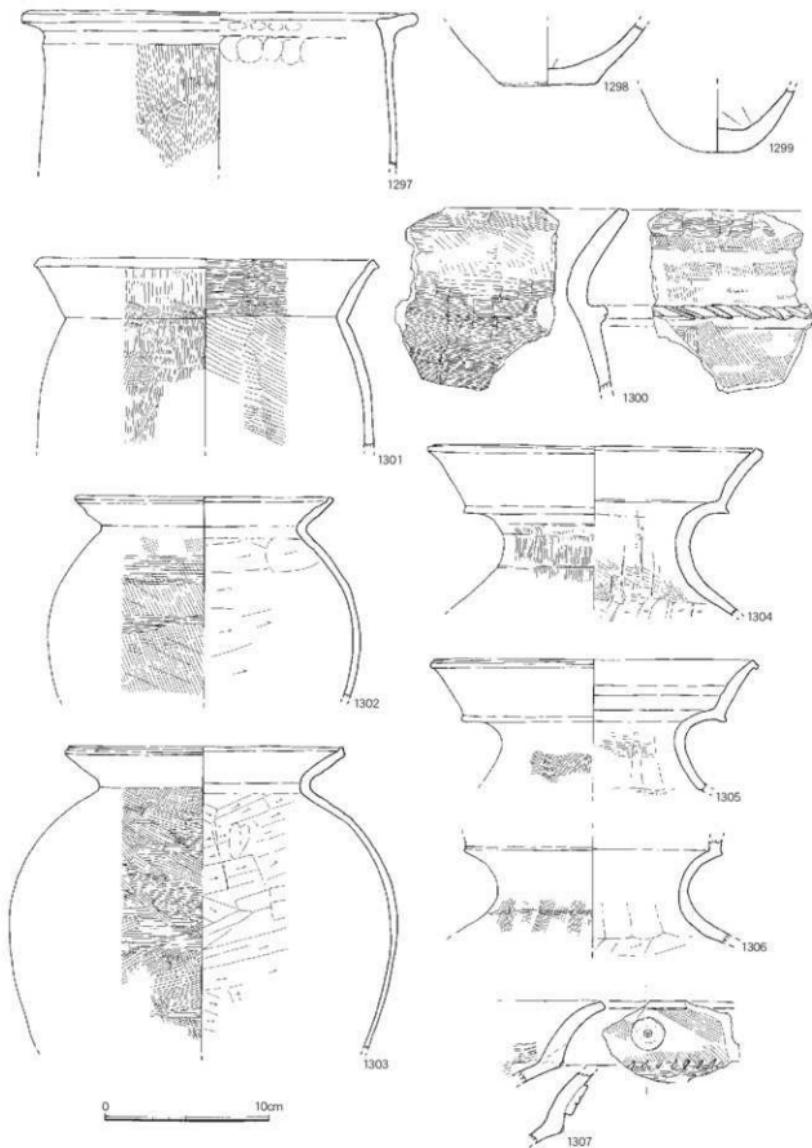


Fig.121 第4-5面包含層出土遺物実測図① (1/3)

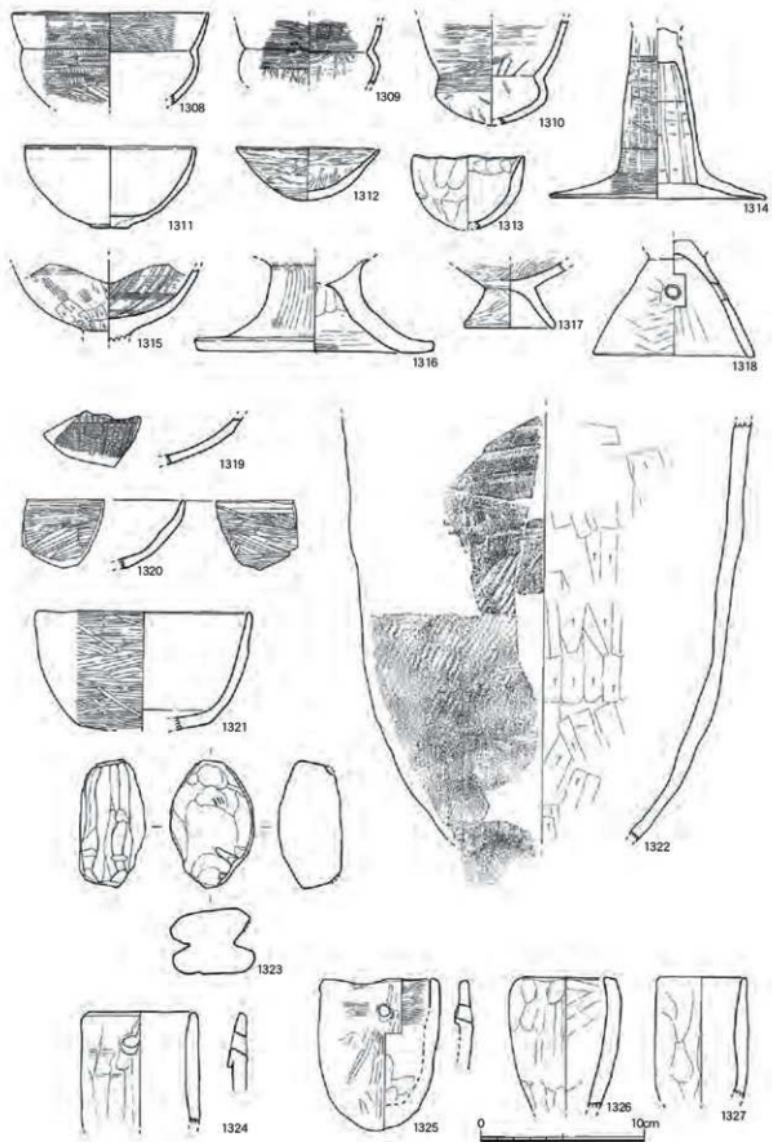


Fig.122 第4-5面包含層出土遺物実測図② (1/3)

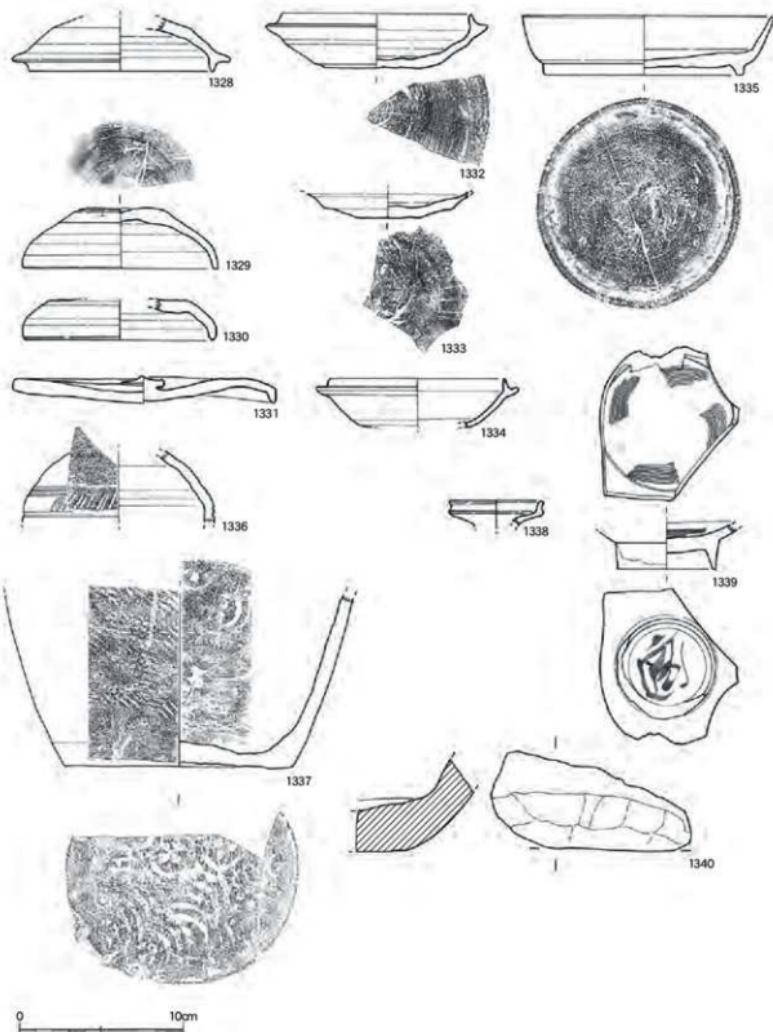


Fig.123 第4-5面包含層出土遺物実測図③ (1/3)

身幅 1.2cm を測る。茎は断面方形をなす。1295 は先端部を欠損する釘で、頭部は鈍く折れ曲がる。1296 は刃部の先端のみが残る刀子である。

1297-1348は4-5面の包含層出土遺物である。1297-1300は弥生土器である。1297は逆「L」字口縁を有する甕の口縁部片である。砂粒を多く含み、色調は内面が明橙色、外面は茶橙色を呈する。1298は壺の底部片で、やや丸味を帯びた平底を呈する。1299は小型甕の底部片で、丸底を有し、内外面ともにナデで調整する。1300は大甕の口縁部片で、頸部下に突帶を巡らせ、工具で刻目を入れる。内外面ともに細かい刷毛目で調整する。1301-1318は土師器である。1301は甕で、口縁端部は角張り、内外面ともに刷毛目で調整する。1302・1303は布留系の甕で口縁端部は摘み上げる。外面は刷毛目、内面は削りで調整する。1304-1306は山陰系の二重口縁壺で、頸部から口縁部は大きく外に開く。頸部外面は細かい縱方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目、体部内面は削りで調整する。胎土に金雲母、白色砂粒を多く含み、色調は淡橙色を基調とする。1307は二重口縁甕の口縁部片で、口縁中位に大きな円形竹管文を貼り付け、口縁下端には刻みを巡らす。東海系の可能性も考えられる。内外面ともに刷毛目調整が残る。胎土は金雲母、白色砂粒を含み、色調は淡橙色である。1308-1310は精製の小型丸底壺である。1308の口縁は短く、内湾気味に立ち上がり、1309・1310の口縁は長く伸びる。縱方向の研磨のち、細い横方向の研磨で仕上げる。胎土は精良で、色調は明褐色を呈する。1311は小型の平底鉢で、直径2.3cmの小さな平底から体部は内湾気味に立ち上がる。復元口径10.4cm、器高5.0cmを測る。胎土は精良で、色調は淡橙色である。丁寧なナデで調整され、器壁も薄い。1312は精製鉢で、内外面ともに粗い磨きで調整する。胎土は金雲母を多量に含み、明褐色を呈する。1313は手捏ねの小椀である。丸底から体部を立ち上げ、口縁は直線的に引き延ばす。復元口径6.8cm、器高4.5cmである。胎土は金雲母を含み、色調は橙色、灰橙色を呈する。1314・1315は高杯で、1314は脚が長く、縱長に面取りされ、その後、横方向に磨かれる。また、裾部にも同様の細かい磨きを施す。胎土は精製され、多量の金雲母を含み、色調は明褐色である。1315は杯部が椀状で、外面は刷毛目のち、ナデ、内面は横方向の刷毛目で調整した後、縱方向の暗文を施す。胎土は精製され、褐色を呈する。1316・1317は脚付鉢である。1316は外面縱方向の磨き、内面は横方向の刷毛目がかすかに残る。1317は小型で、精製された胎土で、内外面ともに磨きを施し、丁寧に作られる。1318は小型器台で、脚部上半に2箇所穿孔を有する。1319-1321は都城系の土師器である。1319は壺の底部片で、内外面ともに回転ナデと指ナデで調整したのち、体部内面に放射状の細かい暗文を施す。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、色調は明橙色、底部外面は黒色を呈する。1320は壺の口縁部片で、内外面ともに不規則な細い磨きを行う。胎土に赤褐色粒と細かい雲母を含み、色調は褐色である。1321は椀で、底部は丸みを有する。外面は底部まで細かい磨きで調整するが、内面は回転ナデで仕上げる。胎土は白色砂粒、赤褐色粒を含み、色調は内面が橙色、外面は赤褐色である。1322は土師器の瓶の胴部片か。外面は粗いタタキで調整した後、削りに近い横方向のナデを施す。外面には多量の煤が付着する。1323は大型の土錘で、重さは140.25gを量る。断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が側面に縱方向に一条巡る。1324-1327は蜻蛉壺である。1324は比較的丁寧に作られ、ナデで仕上げられる。1325-1327の外面は工具による調整痕、指ナデ等が残る。1325は完形品である。1328-1337は須恵器である。1328-1331は壺蓋で、1328は返りを有する。1329・1330は器高が高く、1329の天井部はヘラ切り、1330はヘラ切りで仕上げる。1329はヘラ記号を有する。1331は偏平な摘みをもち、口縁端部は下方に折り曲げる。天井部にはヘラ削りが残る。1332-1334は返りを有する壺身である。1332は底部にヘラ記号を刻み、1333は底部から体部にかけて縱方向の沈線が不規則に多数入る。1335は高台付壺で底部は回転ヘラ切り未調整で、ヘラ記号が残る。1336は甕の体部片で、中位に2条の沈線を巡らせ、その間に刻み、肩部にカキ目を施す。1337は長胴瓶で、外面にはタタキ、内面と底部外面には當て具痕が残る。



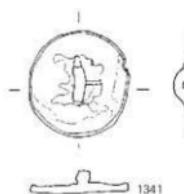
Ph.200 東側中央 4~5 包含層出土小型素文鏡

Ph.201 東側中央 4~5 包含出土小型素文鏡



Ph.202 東側 4~5 包含層出土鐵斧

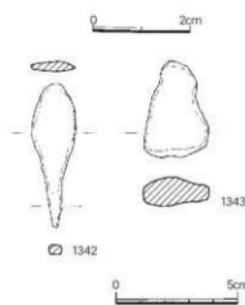
Ph.203 東側中央 4~5 包含層出土砥石



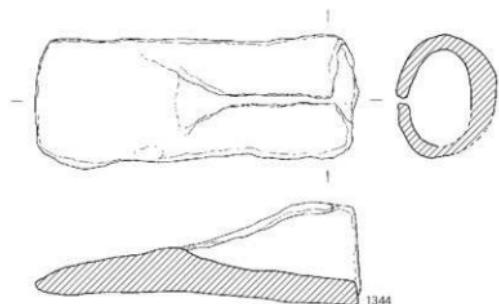
1341



Ph.204 第 4~5 層包含出土小型素文鏡



1342



1343

Fig.124 第 4~5 層包含出土遺物実測図④ (1/1・1/2)



Ph.205 第4-5面包含層出土遺物

1338は越州窯系青磁の小壺の小片である。1339は白磁碗V類の底部片で、高台内には墨書が残る。1340は大型の滑石製石鍋の底部片である。外底部には煤が付着する。1341は調査区中央から出土したほぼ完形の青銅製の小型素文鏡である。鏡面の一部をわずかに欠損する。直径2.1cm、厚さ1.0mmと極めて小型である。鏡面はやや凸面状をなし、遺存状況は良好である。鼻鉗は断面長方形のアーチ状で、幅1mm、高さ0.5mmの鉢孔をもつ。鉢孔の前面には幅1.0mm、長さ4.0mmの溝が残り、孔を穿つ際に付けられたものと考えられる。1342-1344は鉄製品である。1342は柳葉系の有茎式の鉄鎌で、長さ5.9cm、身幅1.8cm、茎は方形で断面1.5cmである。1343は長さ3.9cm、幅2.6cm、厚さ0.8-1.2cmの不整形の鉄の塊である。1344は袋状鉄斧で、長さ13.3cm、幅5.0cmを測る。袋部は楕円形に近く、内径2.5-4.0cm、また、身と袋部の境界には明瞭な段を有する。1345は粘板岩製の大型砥石で、下面が欠損する。撥形を呈しており、上面はよく研磨され、凹状に窪む。また、鉄製品を磨いたような沈線や擦痕も多く残る。1346は粘板岩製の手持ち砥石である。破片であり、砥面は4面が残存する。1347は粒子の細かい礫岩製の敲石で、重さは1.0kgを量る。上下端と4側面すべて使用されており、痕跡が明瞭に残る。1348は礫岩製の台石である。上面のみ敲打痕が残る。

1349-1373はその他の遺構や撹乱から出土した遺物である。1349・1350は弥生土器である。

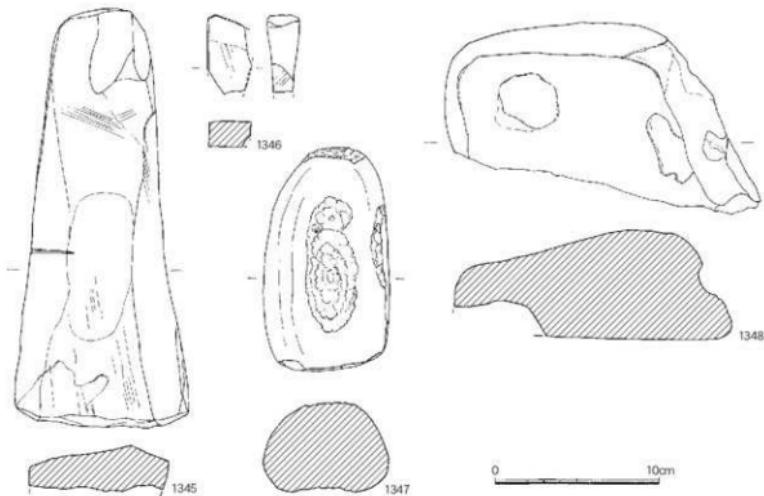


Fig. 125 第4-5面包含層出土遺物実測図⑤ (1/3)

1349は複合口縁壺の頸部片で、頸部外面は縱方向、内面は横方向の刷毛目、体部外面はナデ、内面は指オサエで調整する。1350は大甕の丸底気味の底部片である。1351-1355は須恵器である。1351・1352は脚付小型壺の小片で、外底部には削りが残る。1353は平瓶の肩部片で、回転ナデで調整する。1354・1355は甕の肩部片である。1356は楠葉型瓦器椀の底部片で、断面三角形の低い高台が付く。内面は密な研磨で調整した後、見込みに連結輪状文を施す。1357は白磁碗で、高台は欠損する。胎土は淡橙色を呈し、化粧土を施したのち、黄白色の釉がかかる。見込みには笠と櫛で花文が描かれる。外面には鶴蓮弁が刻まれる。1358は龍泉窯系青磁の蓋で、外面に飛雲を描く。灰色の胎土に青味を帯びた緑色釉がかかる。口縁端部の釉は搔き取る。1359は龍泉窯系青磁壺の肩部片である。肩には沈線が巡り、体部上半には距による文様が描かれる。1360は白磁壺の底部片である。1361は施釉陶器の小壺の底部片で、外底部に墨書を有する。赤褐色の胎土に濁緑色の釉が外面下半まで施釉される。1362は施釉陶器の鉢で、口縁端部には目跡が残る。黒色粒を含む灰色の胎土に濁緑色の釉がかかる。1363は瓦質土器の捏鉢である。内面はよく使用され、滑らかとなる。1364は土製の管状土鍤で、重さは3.0gである。1365は滑石製の鍤か。頭部付近に横方向に一周巡らす沈線と縱方向に1条沈線を入れる。紐を固定させるものと考えられる。2/3を欠損するが、重さは12.1gを量る。1366は砂岩製の石球で、重さは6.6gである。1367は滑石製のミニチュアの容器か。中央を窪ませており、底部はよく研磨されるが、側面等は未調整である。1368は瓦質の鬼瓦の破片である。1369-1371は黒曜石の使用痕のある剥片である。不純物、白色砂粒を含み、漆黒色を呈する。1369は上端と背面左側基端部、1370は下端に自然面が残り、その状況から角礫と思われる。1369は長さ3.3cm、最大幅2.35cm、最大厚1.2cm、重量8.6gである。基端部に打流痕が残る。腹面の左側中央と右側と下端に使用痕がみられる。1370は長さ2.8cm、最大幅3.85cm、最大厚0.95cm、

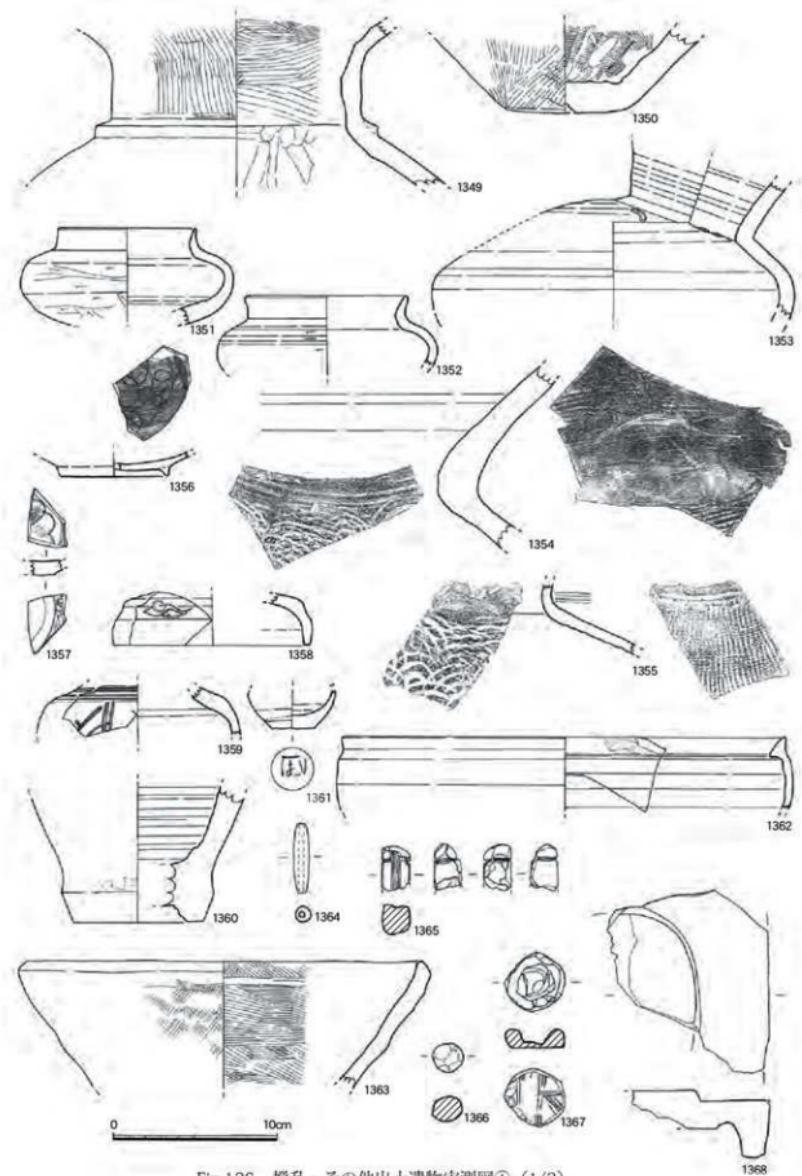


Fig.126 携乱・その他出土遺物実測図① (1/3)

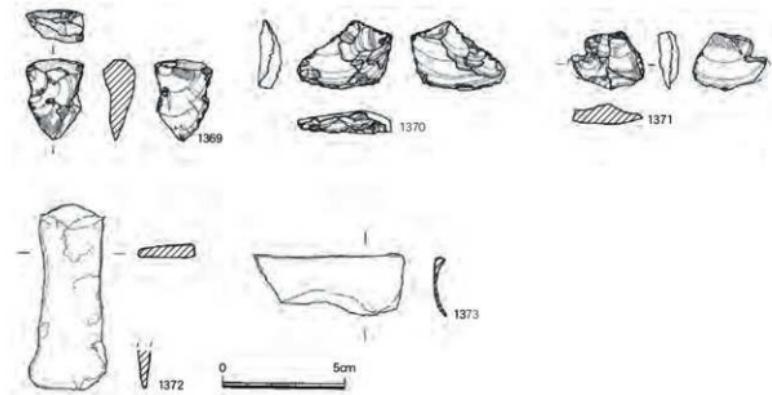
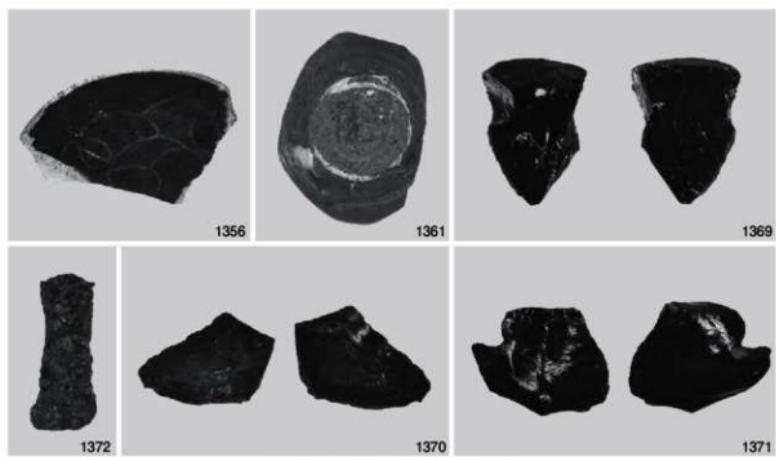


Fig.127 摂乱・その他出土遺物実測図② (1/2)



Ph.206 摂乱・その他出土遺物

重量 7.9g である。腹面右側に調整のための剥離を行い、使用痕は腹面の右縁辺と下端にみられる。背面の色調は他とくらべ、濁っており、風化している。使用痕を残した時期より、古い剥離と考えられる。1371 は背面の左側中央を欠損するが、現存で長さ 2.35cm、最大幅 3.0cm、最大厚 0.8cm、重量 4.6g である。腹面右側中央の抉れた箇所に自然面を残す。基端部に打流痕は残っていない。使用痕は腹面左側の縁辺と一部下端に認められる。1372 は板状鉄斧と考えられる。基部は断面方形で、厚さ 0.3-0.6cm、長さ 7.5cm 以上、刃部はわずかに膨らむ。1373 は青銅製の不定形の切断片で、長さ 6.1cm、最大幅 2.5cm、最大厚 1.0-4.0mm を測る。

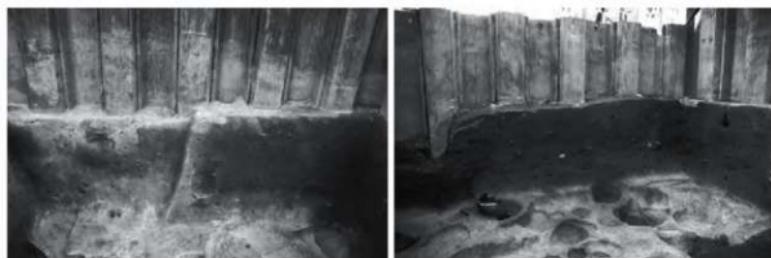
7) 小結

3 区は 203 次調査の中央に位置し、旧地形の砂丘 I (博多濱南側砂丘列) の頂部から南斜面に立地する。遺構の初源は甕棺墓であり、中期前葉の小児棺 5 基と成人棺 1 基、後期中葉の甕棺墓 1 基を検出した。調査区南側の 14 区、北側の 9・12・15 区、西側の 8 区でも確認でき、列埋葬の形態をとる。後世の遺構に削平されているものもあるが、甕棺の遺存状況は比較的良好であった。集落遺構としては、やや遅れて、中期中葉の土坑を検出し、終末期にかけて集落が形成されたと考えられる。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては、調査区全面で、竪穴住居跡、土坑、ピットが密集した状況で確認できる。なお、この時期の遺物と考えられる小型素文鏡が包含層から出土した。鏡面の一部をわずかに欠損するが、ほぼ完形品で、直径 2.1cm、厚さ 1.0mm と極めて小さく、断面長方形のアーチ状の鼻鉗をもつ。小型素文鏡は他に元岡・桑原遺跡群 42 次調査で 2 面、雀居遺跡 9 次調査で 1 面、多く良込田遺跡 6 次調査で 1 面が出土している。直径 3.2-4.2cm を測り、内区と外区の区別がある。墓から副葬品として出土するものと、宗像市の沖ノ島や鳥取県の長瀬高浜遺跡のように祭祀遺構や住居跡から出土したものがある。3 区の遺物は出土状況等から祭祀的なものと考えられる。また、第 5 面で検出したピット SPO30429 内の砂は赤色を呈しており、ベンガラが付着していた。北側の 9 区からは、内面に水銀朱が付着した甕 (9 区 Fig.133-1197) が出土している。博多遺跡群では 50 次調査 945 号住居から水銀朱が付着した石杵が出土し、赤色顔料の生産が行われていたと考えられる。また、この時期すでに鍛鍊鍛冶が行われていたことが、検出された遺構や出土遺物から確認されている。本調査区においても、様々な形に切断された鉄片が出土しており、南隣の 142 次調査、約 160m 北東側の 147 次調査とあわせて、一大鉄器製作拠点がこの地に存在していたことを示すものである。その後、古墳時代中期・後期の遺構、遺物は激減し、7 世紀に土坑等が少數ながらみられるようになる。7 世紀末から 8 世紀にかけて多くの都城系の土師器が比較的多く見られ、墨書き器も出土する。なお、8 世紀中ごろに掘削され、9 世紀初頭に廃絶された大型の井戸 SEO30804 を検出した。10 世紀から 11 世紀前半にかけては、遺構は減少するが、11 世紀後半から 12 世紀に再び、遺構が調査区全面で展開する。博多遺跡群で最も濃密に遺構が展開する時期であり、手工業も盛んに行われていた。12 世紀前半の土坑 SKO30273 からは、粒状滓、鍛造剥片、鉄滓が出土し、中世においても鍛冶が行われていたことを示す。また、この土坑からは、栽培種のイネが出土する。この時期の他の遺構から、モモやオオムギ、アズキ亜属、オニグルミ、カキノキ、ヒエ属、コムギ、ダイズ属、ソバが得られ、当時の人のびとの食生活を知ることができた。その後、14 世紀にかけては、遺構は減少するが、大型の土師器の廃棄土坑 SKO30007 を検出した。この時期の土師器の大量廃棄は、鎮西探題設置に由来するものと考えられている。土層から最上層、上層、中層、下層と 4 度の廃棄が行われたことがうかがえ、土師器のサイズ等、各層に大きな違いはなく、比較的、短期間に集中的に廃棄されたと考えられる。その重量は、最上層が 95,408g、上層が 22,831g、中層が 114,630g、下層が 15,370g、他にベルト等から 55,374kg で総重量 303,613g となる。出土中の完形の土師器の皿、壺の 1 枚あたりの平均重量を推定すると、概ね、小皿 40g、壺 120g であった。そうすると、最上層では小皿のみであれば 2,385 枚、壺のみであれば 795 枚、上層では 570 枚もしくは 190 枚、中層では 2,865 枚もしくは 955 枚、下層では 384 枚もしくは 128 枚となる。総重量では小皿 7,590 枚または、壺 2,530 枚となる。中世において饗宴に用いられた土師器の壺や皿は、一回限りの使い捨ての器とされていることから、一度に使用された土師器の枚数と饗宴の規模がうかがい知れる。その後、鎮西探題は 1333 年に滅亡し、周辺は畠地となり、その状況は近世初頭まで続く。9 区においても、この後、遺構は絶続し、近世までほとんど遺構は見られない。

5. 4 区の報告

1) 各遺構検出面の概要・基本層序

4区では遺構面を4面設定した。土置場の関係上、まず調査区の東側約2/3を調査したのちに、反転して西側1/3の調査を行った。第1面は灰褐色土層上面で標高4.4～4.5mである。陶磁器類



Ph.1 調査区北壁土層

Ph.2 調査区西壁土層



Ph.3 調査区東壁土層

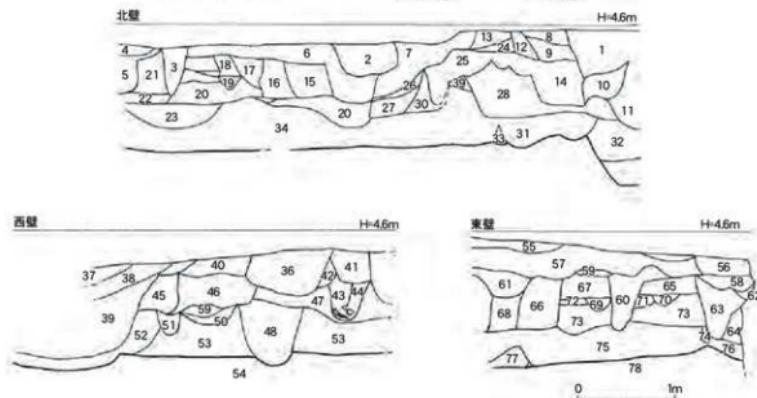


Fig.1 調査区土層図 (1/50)

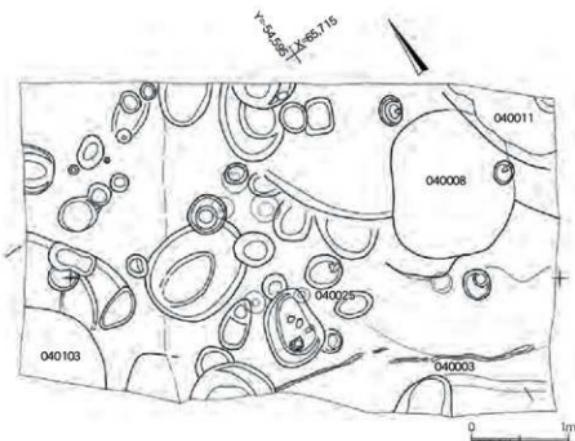


Fig.2 第1面遺構図 (1/50)



Ph.4 調査区第1面西側（南から）



Ph.5 調査区第1面東側（南から）

やガラス製品が投棄されていた土坑、土師器環が多量に出土した土坑、柱穴が検出された。第2面は第1面から約30cm掘り下げた標高約4.1mの灰茶褐色～明茶褐色砂質土層上面である。第1面遺構の掘り残し遺構や土坑、柱穴が確認された。第3面は標高約3.9mの明茶褐色砂質土層に灰茶褐色砂質土層が一部混じる土層上面である。ここでも土坑や柱穴が中心となるが、この第3面と最下面の第4面の中間で弥生時代終末から古墳時代初頭土器の散布が検出された。第4面は基盤層である黄褐色砂質土層となる。上面遺構の掘り残しや住居跡、埋葬遺構が検出された。

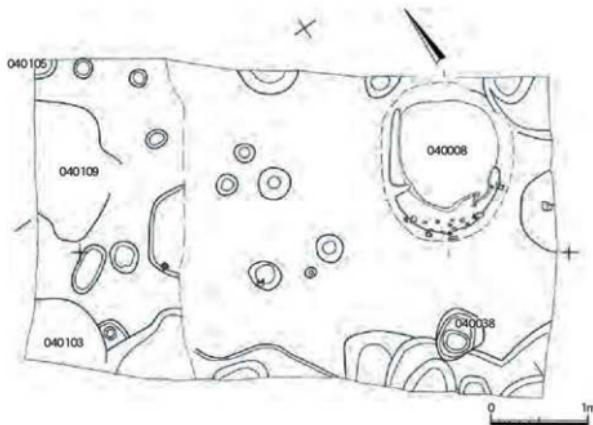


Fig.3 第2面遺構図 (1/50)



Ph.6 調査区第2面西側（南から）



Ph.7 調査区第2面東側（南から）

2) 遺構と遺物

(1) 穫穴住居跡 (S C)

SC040080 (Fig. 6) 調査区南側、第4面で検出した。調査区壁に切られており全体の平面形状は不明であるが、おそらく方形になると思われる。貼床、柱穴等は不明である。古墳時代初頭のほぼ完形の甕が床面上に伏せた状態で出土した。他にも小型土器等が出土している。古墳時代初頭である。

出土遺物 (Fig.6・1～6) 1は床面上に伏せた状態で検出された。ほぼ完形の甕である。器壁は薄く丁寧な作りでやや尖り底。口径 14.8cm、器高 19.7cmである。胴部外面は斜め～横方向のタタ

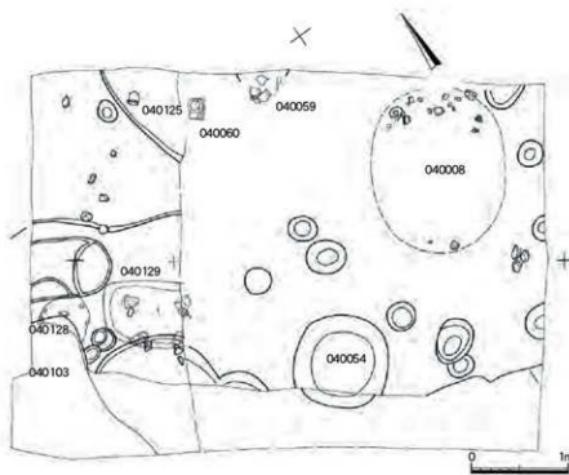


Fig.4 第3面遺構図 (1/50)



Ph.8 調査区第3面西側（南から）



Ph.9 調査区第3面東側（南から）

キ調整のちハケメを施す。胴部内面の上半部はヘラナデ、底部付近は縦方向のヘラナデを施す。口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケのちナデ調整である。2、3も張。いずれも器壁は薄く胴部は大きく張り出す。2の口径は16.6cm。胴部外面はハケメのちタタキ調整、内面はヘラケズリ、口縁部外面はナデ、内面はハケメが施される。3は胴部外面の上部に3条の波状文が施される。復元口径15.0cm。4は手づくねの小型鉢。口径6.7cm、器高4.9cm。外面にハケメが施され、内面はヘラケズリによる調整がなされる。5は支脚。外面にハケメが見られる。6は小型壺。復元口径8.6cm。外面にハケメが見られる。灰褐色を呈する。

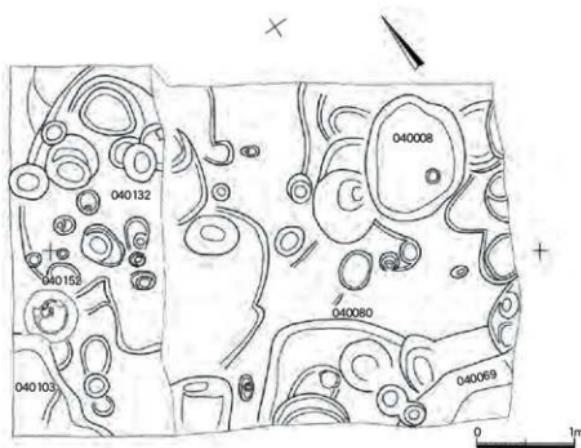
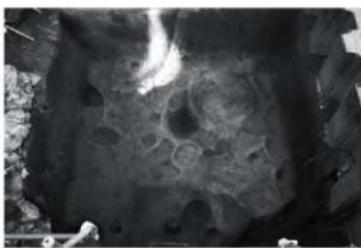


Fig.5 第4面遺構図(1/50)



Ph.10 調査区第4面西側(南から)



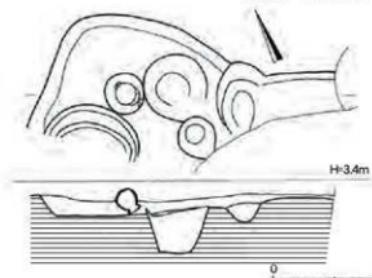
Ph.11 調査区第4面東側(南から)

SC040132 (Fig. 7) 調査区西側に位置する。これも平面形状は不明瞭であるが、貼床状の土屑が見えるため住居跡としている。甕、甕棺口縁部、器台が出土している。古墳時代初頭。

出土遺物 (Fig. 7・7 ~ 11) 7 ~ 9 は甕または壺の口縁部である。口径は 15.2cm, 14.0cm, 22.0cm。いずれも口縁部が屈曲する。山陰系。10 は甕棺の口縁部片。11 は器台の口縁部。復元口径 11.4cm。



Ph.12 040080 土器出土状況（北から）



Ph.13 040080 (北から)

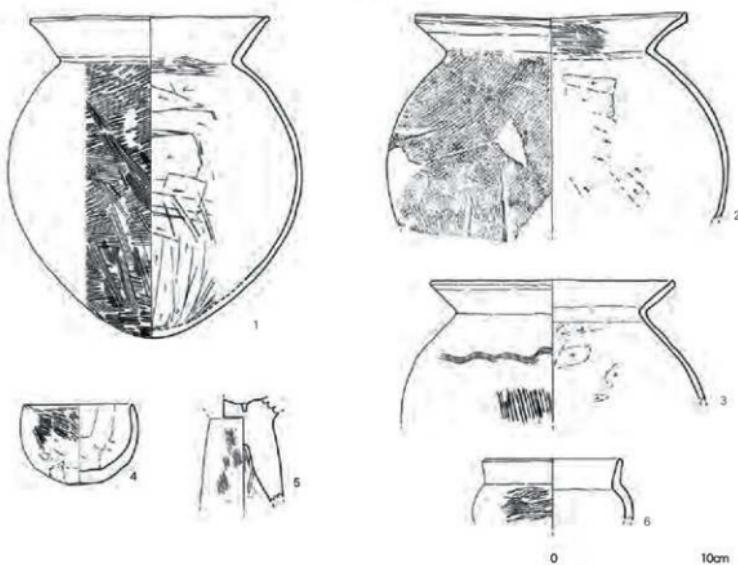


Fig.6 040080 遺構図・出土遺物実測図 (1/40・1/3)

(2) 土坑 (SK)

SK040003 (Fig.8) 第1面で検出した。調査区南東側に位置する。壁に切られる。平面は梢円形を呈し、東西軸が60cm、深さ50cm。龍泉窯系の青磁皿が出土している。

出土遺物 (Fig.8・12) 12は龍泉窯系の青磁皿。復元口径13.0cm、器高3.6cm、底径5.0cm。内面見込みに片切り彫り文と柳描文が施され、内外面に施釉されるが、外底は露胎となる。緑灰色を呈する。

SK040011 (Fig.9) 第1面で検出した。調査区北東壁に切られる。平面形と規模は不明だが、深さは60cm。白磁皿と鉄製品が出土している。

出土遺物 (Fig.9・13、14) 13は白磁皿。復元口径9.7cm、器高2.7cm、底径4.0cm。内面から外面上部まで透明釉かかる。見込み内面は釉を輪状に搔き取る。灰白色を呈する。14は鉄釘か。長さは5.1cmで断面は方形を呈する。

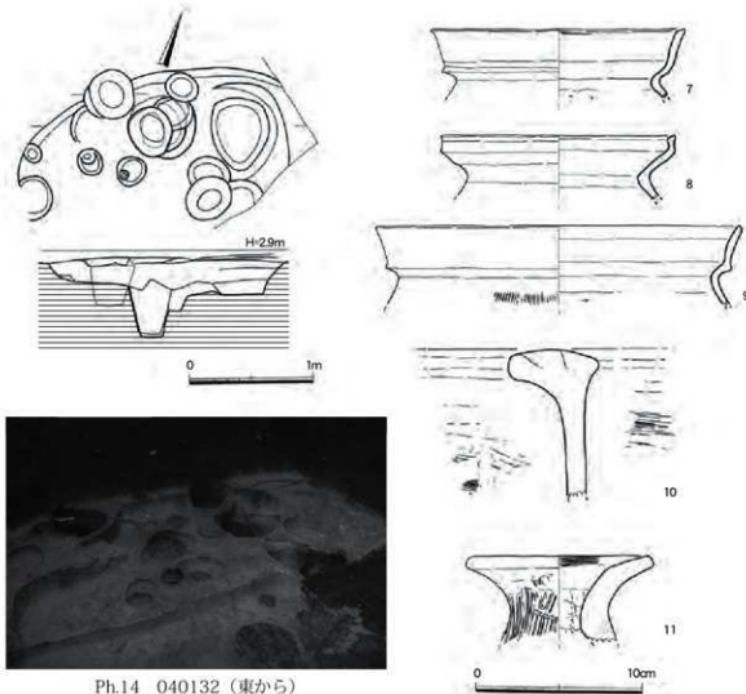


Fig.7 040132 遺構図・出土遺物実測図 (1/40・1/3)

SK040008 (Fig.10) 調査区の北東角、第1面で検出した。第4面の砂丘面まで掘り込まれていて深い土坑である。平面橢円形で長軸1.54m、短軸1.24m、深さ1.1m。上面から下面まで遺物が検出された。長期にわたって遺物が投棄された土坑と思われる。白磁を中心として、陶器、瓦器、土師器皿、ガラス製品などが出土している。12世紀代。

出土遺物 (Fig.11, 12) 15～21は上層出土。15、16は白磁碗。15は口径13.4cm、器高4.4cm。灰白色胎土の器壁内面及び外面、高台疊付まで透明釉がかかる。高台内部は露胎となり、墨書が見られるが字体は不明。見込みには櫛描文が施される。16は底径7.4cm、内面には釉がかかるが、外面は露胎。灰白色胎土に灰白色釉がかかる。17は越州窯系青磁碗の底部。底径10.0cm。内面は釉がかかるが、外面は露胎である。見込内面に胎土目が残る。灰色胎土に灰白色釉がかかる。18は四耳壺。復元口径13.4cm。灰色の胎土で器壁外面及び口縁部内面まで灰褐色の釉がかかり、内面下半は露胎となる。19は土師器皿。口径9.0cm、器高1.0cm、底径7.2cm。底部はハラ切りで板圧痕が残る。20は土師器の裏。復元口径11.0cm。明褐色を呈する。外面にハケメが残る。21は平瓦。外面は縄目痕、内面は布目痕が残る。

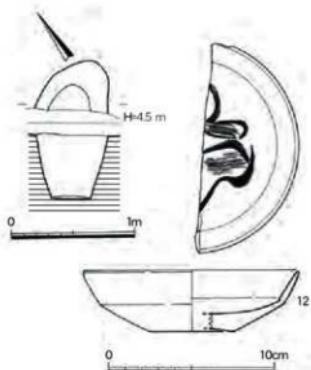


Fig.8 040003 遺構図・出土遺物
実測図 (1/40・1/3)

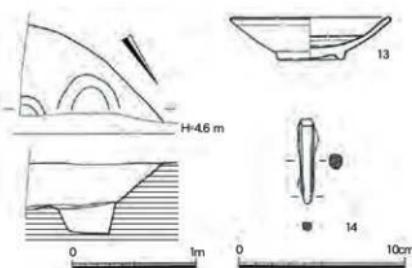


Fig.9 040011 遺構図・出土遺物
実測図 (1/40・1/3)

22～45は下層出土。22～29は白磁碗。22は口径15.6cm、器高5.6cm、底径6.4cm。内面及び外面上部まで透明釉がかかるが、見込みは輪状に釉が掻き取られる。胎土は灰白色。23は大型の碗。口縁部は玉縁。復元口径28.4cm。灰白色胎土に透明釉がかかる。残存部分には全面施釉される。24は復元口径16.8cm、器高6.1cm、底径5.9cm。内面及び外面に灰白色的透明釉がかかるが、高台は露胎となる。胎土は灰白色で、内面前面に櫛描文が施される。25、26は口径16.7cm、16.0cm、器高7.0cm、7.6cm、底径6.1cm、6.2cm。口縁部はやや外反する。内外面に透明釉がかかり、高台はいずれも露胎となる。27～29は白磁碗底部。底径は5.9cm、6.4cm、5.0cm。いずれも灰白色胎土の内外面に灰白色透明釉が施釉されるが、高台は露胎となる。29は高台内部に墨書が見られるが字体は不明。30は青磁碗。復元口径14.0cm、器高4.2cm、底径4.9cm。内外面と高台疊付まで灰白色の胎土に灰色の釉がかかるが、高台内部は露胎である。見込みに櫛描文が施される。31～33は陶器。31は鉢。赤褐

色胎土に釉がかかる。口縁部内面に一条の突起が巡る。復元口径は 23.8cm。32 は甕もしくは壺の底部。底径 20.6cm。青灰色を呈する胎土。33 は坩堝。復元底径 8.6cm。灰白色の胎土の内面にガラス質が付着する。34 は脚付鉢の脚部である。穿孔が見られる。35、36 は瓦器塊。口径 16.8cm、17.0cm、器高はいずれも 5.1cm、底径 7.4cm、6.8cm。いずれもごく低い高台がつき、内面にはミガキ痕が残る。灰白色を呈する。37、38 は土師器塊。口径 15.7cm、15.0cm、器高 3.4cm、2.3cm、底径 7.0cm、10.0cm。糸切り底で板目痕が残る。39 は土師器皿。口径 9.0cm、器高 1.3cm、底径 5.8cm。糸切り底。40、41 はごく小型の皿状を呈する器形であるが、用途は不明である。40 は磁器。口径 7.4cm、器高 0.4cm、底径 7.2cm。内面及び底部端まで施釉される。白地に黒褐色の水文様が施され、白色釉がかけられる。41 は陶器。口径 7.2cm、器高 1.3cm、底径 4.0cm。内面のみ黒褐色の釉が施される。42～43 はガラス製品。42 は L 字状を呈し長さ 22mm、径は 2～3 mm。色は透明。43、44 はガラス小玉。各々径 12mm、5 mm、長さ 11mm、3～4 mm、孔径 3 mm、2 mm。43 は透明緑色、44 は緑色を呈する。45 は不明土製品。残存長さ 18.6cm で平面は棒状であるが、片側がやや湾曲する。断面は三角形を呈する。

SK040025 (Fig.13) 調査区南壁寄りに位置する。第 1 面での検出である。平面楕円形で長軸 78cm、短軸 63cm、深さ 17cm。陶器の壺、水注が出土している。12 世紀代。

出土遺物 (Fig.13) 46 は四耳壺の口縁部。口径 10.0cm。内外面に釉がかかり、灰褐色を呈する。47 は陶器の水注か。復元口径 9.0cm。内外面に釉がかかる。灰赤褐色を呈する。

SK040054 (Fig.14) 第 3 面検出。調査区南壁東寄りに位置する。平面ほぼ円形で径 53cm。深さ 27cm。白磁、青磁、陶器などが出土している。

出土遺物 (Fig.14) 48 は白磁碗の底部。復元底径 6.0cm。内面及び外面下半まで灰白色の胎土に灰白色釉がかかるが、底部は露胎となる。49 は青白磁の水注の底部。復元底径 9.5cm。外面には透明釉がかかるが、内面及び底部は露胎となる。青灰色の胎土で外面には片切り彫りによる太い沈線が施される。50 は陶器壺。復元底径 8.4cm。赤褐色胎土の内外面に灰褐色の釉がかかる。51 は青磁碗の胸部。内外面ともに片切り彫りによる細かな文様が施され、灰色胎土の両面に釉がかかる。52 は土師器皿。復元口径 8.6cm、器高 1.2cm。ヘラ切りによる底部。京都系の土師器。53 は鉄製釘。長さは 8.4cm で断面は方形を呈する。

SK040069 (Fig.15) 第 4 面で検出。調査区南東角に切られており、平面形と規模は不明。深さは 50cm 以上。

出土遺物 (Fig.15) 54 は高麗陶器と思われる須恵質の壺。復元口径 19.0cm。黒灰色を呈する。

SK040103 (Fig.16) 調査区南西角付近、第 1 面で検出した。上層から下層まで土師器塊を中心とした遺物が投棄されていた。平面形や規模は不明だが最大長約 100cm、深さ 90cm を越える。

出土遺物 (Fig.17) 55～60 は土師器塊。口径 13.3～12cm、器高 2.8～2.0cm、底径 9.3～7.0cm。いずれも糸切り底で 56 は板压痕が見られる。61～64 は土師器皿。口径 8.3～7.2cm、器高 1.7～1.5 cm、底径 5.0～6.0cm。いずれも糸切り底。65 は東播系のこね鉢。復元口径 25.6cm。66 は陶器の甕口縁部。復元口径 45.0cm。内外面に施釉される。外面は灰白色、内面は黄橙色を呈する。

67 は青白磁の水注。復元口径 10.6cm。オリーブ色釉が内外面にかかる。68 は陶器鉢。口縁部下に鍔がつく。復元口径 17.6cm。灰褐色～暗青灰色胎土の器壁の内外面に灰褐色釉がかかる。69 は越州窯系の青磁碗。復元底径 5.0cm。高台置付は露胎となるほかは、内外面ともに灰オリーブ色釉がかかる。胎土は灰白色。70 は陶器の卸皿。黄瀬戸。内面に卸目が残る。71～75 は土師器皿。口径 8.6～7.5 cm、器高 1.7～1.3cm、底径 5.2～6.6cm。いずれも糸切り底。

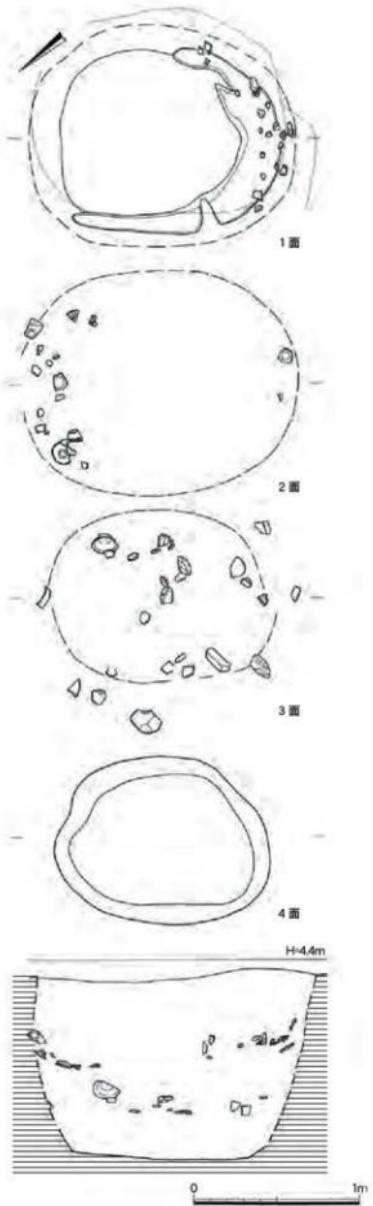
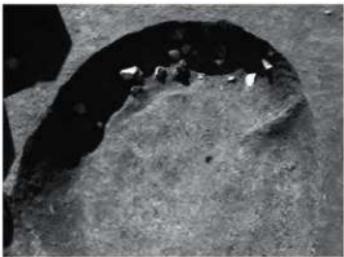


Fig.10 040008 遺構図 (1/30)



Ph.15 040008 1面 (北から)



Ph.16 040008 2面 (南から)



Ph.17 040008 3面 (西から)



Ph.18 040008 4面 (南から)

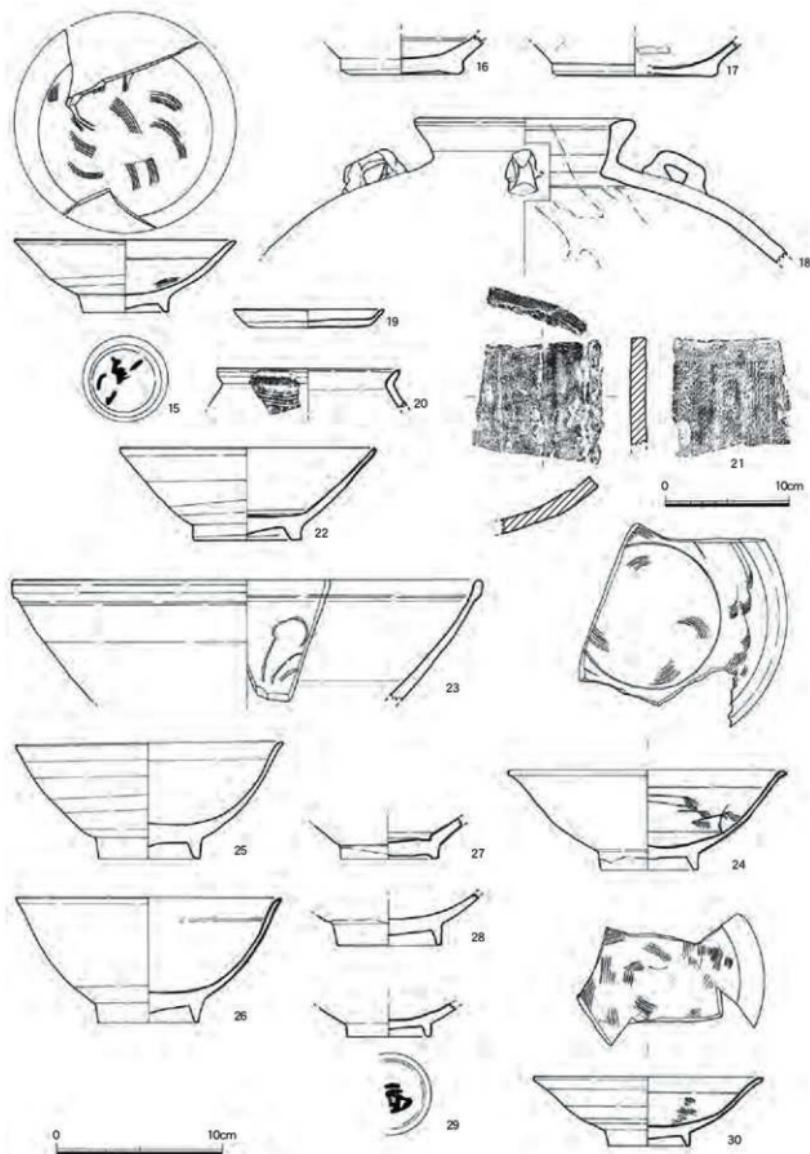


Fig.11 040008 出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)

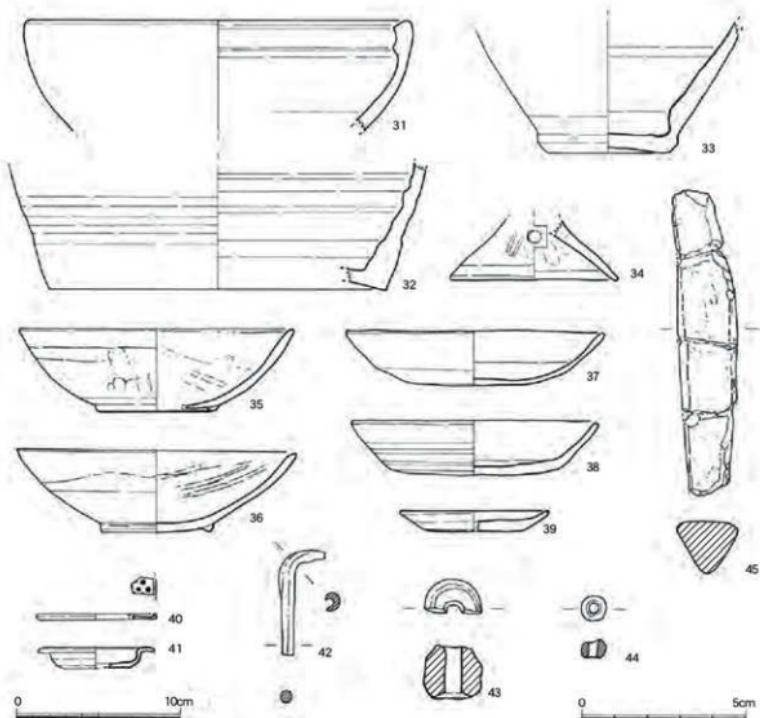


Fig.12 040008 出土遺物実測図 2 (1/3・2/3)

SK040105 (Fig.18) 調査区北西角付近に位置する。平面形の残存長20cmの土坑。第1面で検出した。

出土遺物 (Fig.18) 76は坩堝の口縁部片。ガラス質が付着する。

SK040109 (Fig.19) 調査区西側壁第2面で検出した。掘方平面は不定形の土坑。白磁碗、陶器、土師器などが散布していた。

出土遺物 (Fig.19) 77、78は白磁碗。77は復元口径15.6cm、器高5.8cm、底径5.8cm。玉縁の口縁部で、灰白色胎土の内外面に透明釉がかかるが、底部は露胎となる。78の復元口径12.8cm、残高4.5cm。灰白色胎土の内外面に灰白色釉がかかるが、胴部下部は露胎となる。79は高台付の土師器塊である。復元口径14.8cm、器高5.5cm、底径6.0cm。外面に一部ミガキが残る。灰白色を呈する。80は陶器鉢。口縁部内面に一条の突起が巡る。復元口径25.2cm。釉ははがれている。81は滑石製の紡錘車。径は4.1cm、厚さは1.2cm、孔径0.8cm。丁寧に磨いて仕上げられる。82は弥生土器の裏の底部。内面にハケメが残る。底径は4.7cm。

SK040125 (Fig.20) 調査区北西壁寄り第3面上で検出した。掘方は明確でない土坑状遺構で、

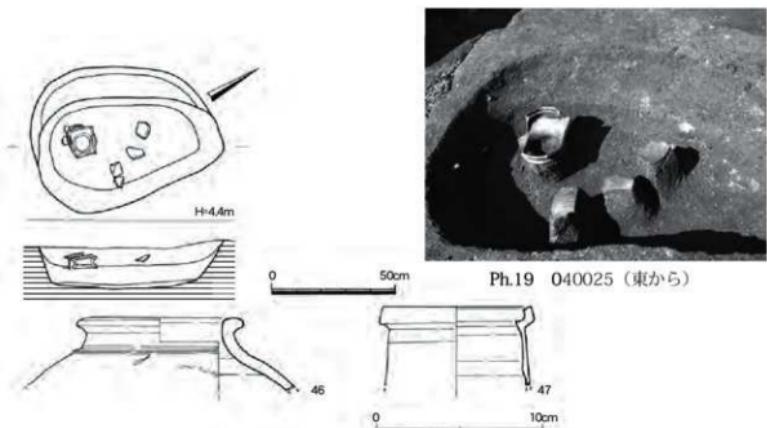


Fig.13 040025 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

甕が完形で出土している。

出土遺物 (Fig.20) 83は小型の甕。手づくねによる整形。口径 9.4cm、器高 11.9cm。口縁部屈曲部にタキギが見られ、外面は縦方向のハケメが施され、内面は口縁部に横方向のハケメ、胴部はハケメが一部残るが、ヘラケズリと指押さえて調整される。灰黄褐色を呈するが、下半部は黒班が入る。在地系の特徴を有する。

SK040128 (Fig.21) 調査区西壁中央付近第3面下で検出した。SK04103に切られている。長軸 65cmの平面梢円形になる土坑状遺構。甕、高坏が出土している。

出土遺物 (Fig.21) 84は甕。胎土は灰白色を呈し、復元口径 15.6cm。外面にはハケメ、内面はヘラケズリ調整がなされる。器壁は薄く胴部が張る。85は高坏。内外面にハケメが施される。胎土は淡黄橙色を呈する。

SK040129 (Fig.22) SK040128の東側に近接している。長軸 80cm以上、短軸 65cmの平面長方形の土坑。礫と甕が散布していた。

出土遺物 (Fig.22) 86は甕。復元口径 16.6cm、残高 20.0cm。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整される。器壁は薄く胴部が張る。胎土は灰白色～黒褐色を呈する。

(3) 甕棺 (埋甕) (SU)

SU040151 (Fig.23) 調査区南西第4面で検出した。径 55cmで平面円形の掘方に大型甕の口縁部を打ち欠き、直立させて埋置している。甕の内部には何も確認されなかった。弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられ、いわゆる弥生時代の甕棺とは異なり、縄文時代の埋甕の様相を呈しているが、甕棺として記載した。

出土遺物 (Fig.23) 87は甕棺に利用されていた甕である。胴部最大径 34.6cm、残高 36.0cm、底径 10.1cm。口縁部と胴部の屈曲部及び胴部下半に突帯が巡る。外面はこの突帯と突帯の間はハケメ調整がなされ、突帯から下は縦のハケメのうちにヘラナデが施される。内面の胴部上半部はハケメ、下半はヘラナデが施される。

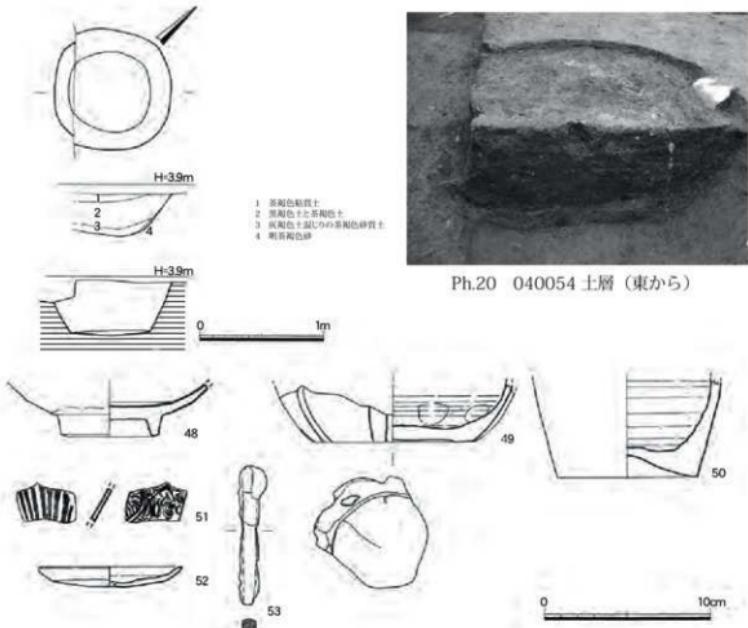


Fig.14 040054 遺構図・出土遺物実測図 (1/40・1/3)

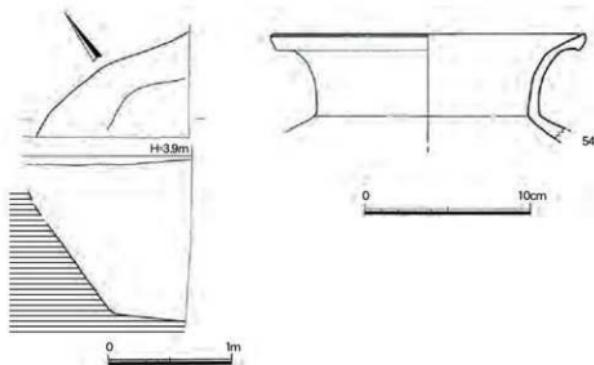


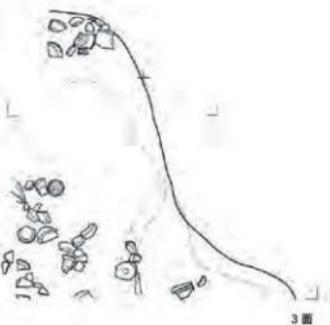
Fig.15 040069 遺構図・出土遺物実測図 (1/40・1/3)



1面



2面



3面

H=4.1m



0

50cm



Ph.21 040103 1面(南から)



Ph.22 040103 2面(南から)



Ph.23 040103 3面(東から)

Fig.16 040103 遺構図 (1/20)

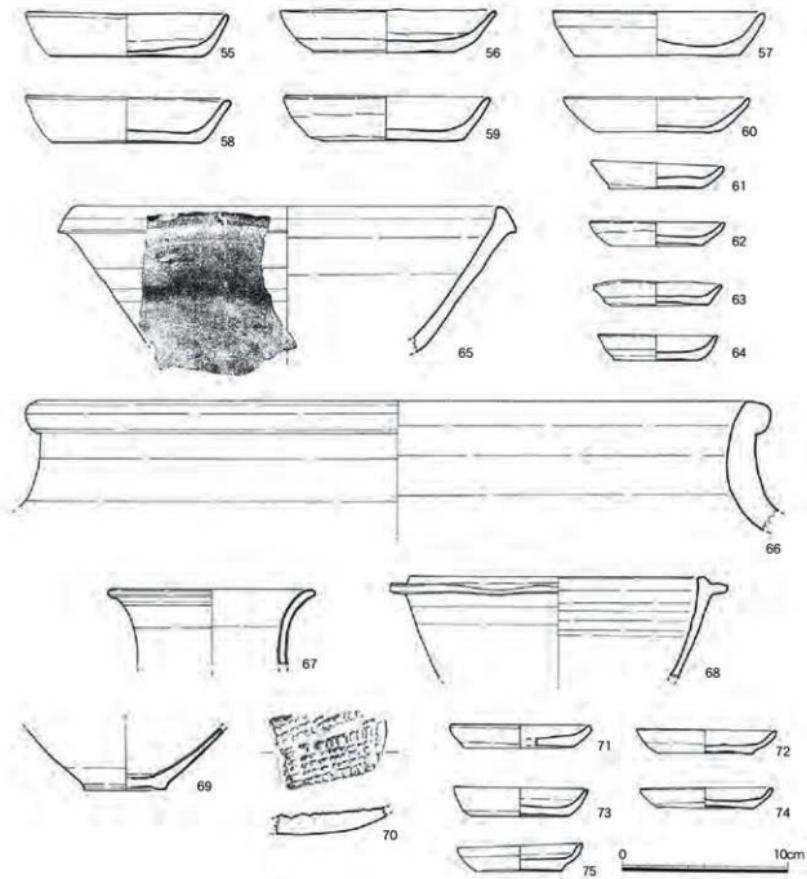


Fig.17 040103 出土遺物実測図 (1/3)

(4) 土器群集積

SK040059 (Fig.24) 第3面から第4面に掘り下げる途中で検出した甕である。復元口径15.2cm。残高16.0cm。外面胴部は縦方向のハケメのち横方向のハケメが施される。内面はケズリ調整。器壁は薄く肩部は張る。黒褐色～灰白色を呈する。

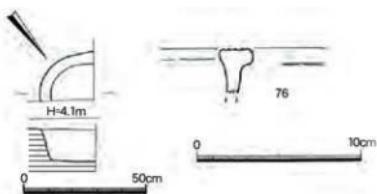


Fig.18 040105 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

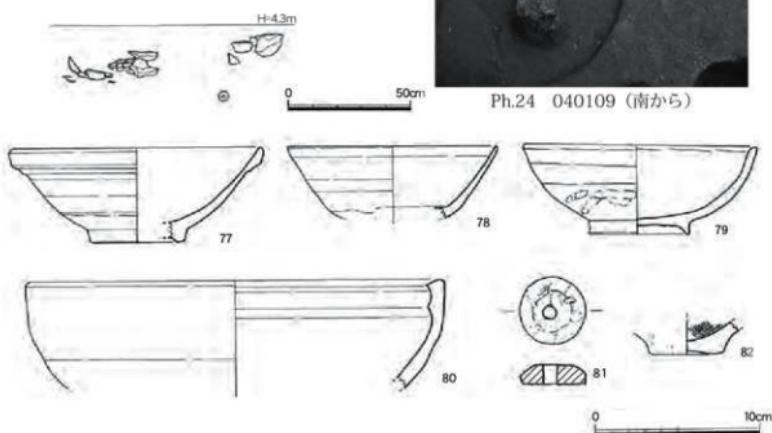


Fig.19 040109 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

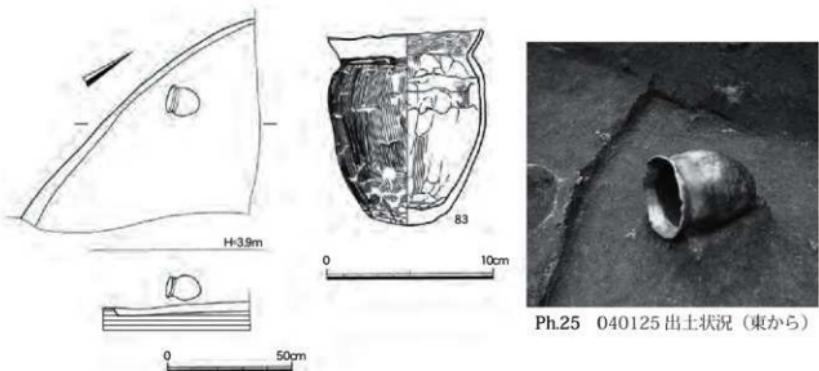


Fig.20 040125 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

SK040060 (Fig.25) SK040059 に近接して確認された。第 3 面から第 4 面へ掘り下げている途中で検出した。長さ 24cm、幅 10cm、厚さ 5cm の平石の上に広口壺が載せられた状態で確認された。祭祀遺構か。

出土遺物 (Fig.25) 89 は広口壺。口縁部に打ち欠きが見られる。口径 12.6cm、器高 11.7cm。胴部外面はヘラケズリのうちハケメが施され、ナデ消される。内面はヘラケズリ調整がなされる。胎土は橙色を呈する。非常に丁寧な作りでミガキ様の調整も見られる。

土器群散布 (Fig.26) 調査区の第 3 面～第 4 面の包含層を掘削中、弥生時代終末～古墳時代初期の土器が散布した状態で検出された。この土器群は調査区のほぼ全面に広がっている。当該時期の一括土器群と考えてよいだろう。

出土遺物 (Fig.27, 28) 90 は弥生時代複合口縁壺の口縁部。復元口径 27.8cm。内外面の横方向にハケメ調整がなされ、口縁部外面の屈曲部分に刻み目が施される。にぶい橙色を呈する。91、92 は高环脚部。91 は裾部に穿孔が見られ、内外面にハケメ調整が施される。底径 12.5cm、赤褐色を呈する。92 は外面に指押さえの跡が見られる。底径 8.2cm。灰白色を呈する。93 は鉢。口径 12.5 cm、器高 5.8cm。内外面にハケメ調整がなされる。灰白色を呈する。94 は甕。器壁は薄く胴部は張る。復元口径 18.5cm、外面にハケメ、内面はヘラケズリが施される。灰白色を呈する。95、96 は大型甕の頸部。95 は縫目痕の残る突帯が巡る。突帯下は縦方向のハケメ調整がなされる。灰褐色を呈する。96 は復元口径 38.4cm。頸部の屈曲部には×字状の刻み目が入った断面三角形の突帯が巡る。この刻み目は口縁端部にも施される。外面は、突帯以外はハケメ調整がなされる。97、99 は甕の頸部。灰赤色を呈する。97 は頸部と胴部の屈曲部にハ字状の刻み目が入った突帯が巡る。外面と頸部内面はハケメ調整、胴部内面はヘラケズリ調整がなされる。橙色を呈する。99 は大型甕の頸部。頸部屈曲部には×字状の刻み目が入った突帯が巡る。内外面ともハケメ調整がなされ、橙色を呈する。98 は高環。内外面はヘラケズリ、脚部の外面上にはミガキが見られる。内外面ともにハケメが施される。

100 は甕。器壁は薄く胴部は張る。復元口径 17.5cm。胴部外面は横方向のタタキ、内面はヘラケズリ調整が見られる。灰褐色を呈する。101 は甕口縁部。口径 13.6cm。灰白色を呈する。102 は脚

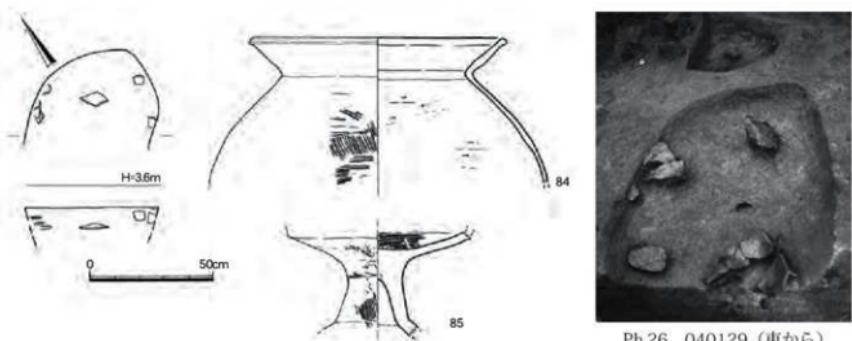


Fig.21 040128 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

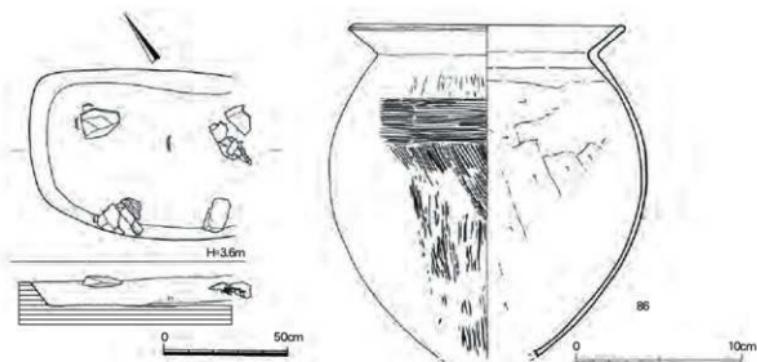


Fig.22 040129 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

付鉢。底径 11.7cm。外面はほぼ全面にハケメ、鉢の内面はヘラケズリ、脚部の内面はハケメが施される。灰白色を呈する。103 は壺。口径 16.6cm。残高 25cm。胴部外面は全面にハケメ調整、胴部内面には指押さえ、ヘラケズリの跡が残る。口縁部はナデ仕上げ、口縁端部には一条の沈線が巡る。灰色を呈する。104 は甕。復元口径 17.0cm。胴部外面はハケメ、胴部内面はヘラケズリ調整がなされる。褐灰色を呈する。口縁部はナデ仕上げ。器壁は薄く胴部は張る。105 は壺か、胴部最大径 21.4cm。胴部外面にはハケメ、内面にはヘラケズリ痕が残るが、摩耗が激しい。明褐色を呈する。106 は甕もしくは壺の胴部片。斜めに刻み目が入る突帯が巡る。ハケメ調整がなされる。暗赤褐色を呈する。107 は高環脚部。復元底径 21.0cm。内外面にハケメが施される。灰白色を呈する。

(5) その他の出土遺物 (Fig.29 ~ 33)

包含層、表土などから出土した遺物について述べる。

Fig.29 は表土剥ぎ中に出土した。108 は白磁碗。底径 6.0cm。灰白色の胎土の内面及び外面の底部まで淡灰白色の釉がかかるが、底部は露胎となる。見込みは櫛描文が施される。109 は青磁皿。口径 10.4cm、器高 2.7cm、底径 3.0cm。底部外面のみ露胎となる。見込みには片切り彫りの花文が施される。

Fig.30・110～123 は第 1 層出土。110 は天目碗。復元口径 14.6cm。橙色の胎土で、黒褐色釉が

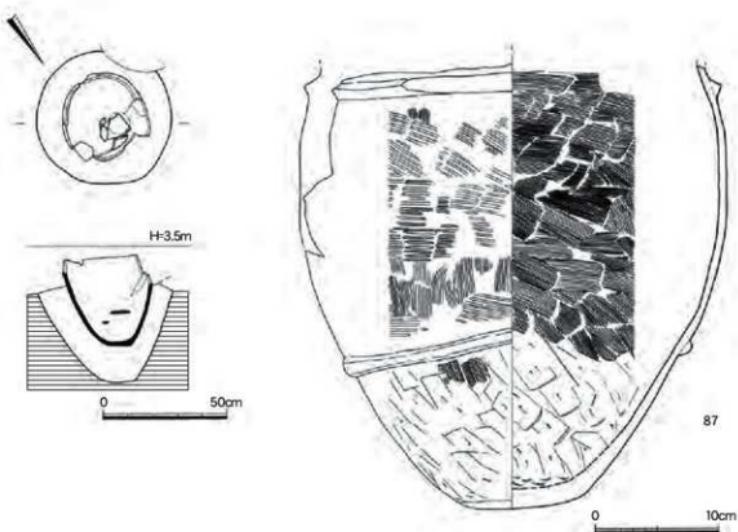


Fig.23 040151 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/4)



Ph.27 040151 (北から)



Ph.28 040151 (東から)

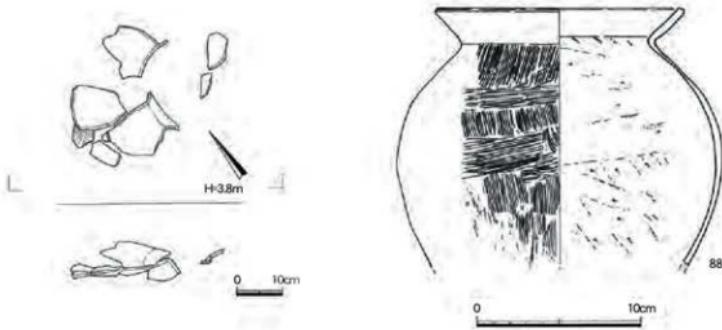
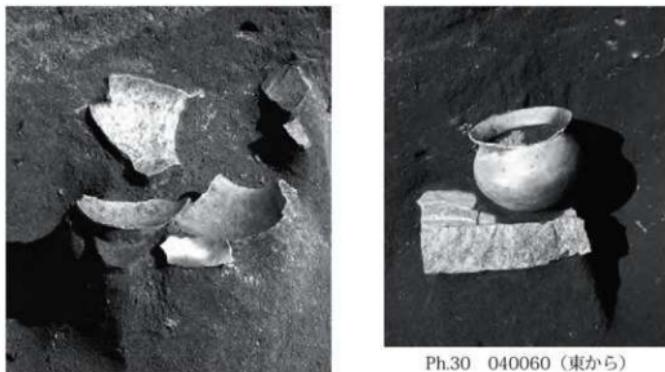


Fig.24 040059 遺構図・出土遺物実測図 (1/10・1/3)



Ph.29 040059 (東から)

Ph.30 040060 (東から)

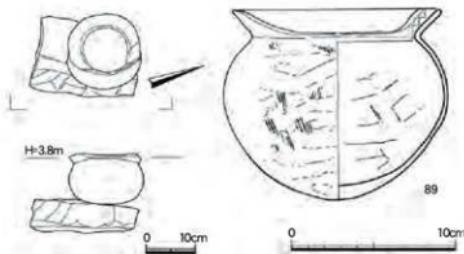


Fig.25 040060 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)



Ph.31 土器群散布（北から）



Ph.32 土器群散布（東から）



Fig.26 土器群散布平面図・断面図（1/30）

内外面にかかるが、高台は露胎となる。111は陶器の四耳壺。復元口径は10.4cm。灰褐色胎土で外面に灰オーリープ色釉がかかる。112は陶器の水注。復元口径7.4cm。灰褐色胎土で外面に黒褐色釉がかかる。113は陶器甕。復元口径38.0cm。胴部外面には横方向のタタキ様の調整が入る。灰白色を呈する。114は高台付の土師器の塊。底径6.6cm。灰白色の胎土で高台内面に墨書が残る。115は土師器环。復元口径12.6cm、器高2.8cm、底径9.0cm。糸切り底。116、117は土師器皿。復元口径9.4、8.0cm、器高1.2、1.7cm、底径7.0、6.0cm。いずれも糸切り底。118は土製品の型か。内面に刻みが見られる。119は青銅製品。飾り金具か。長さ8.3cm、幅2.7cm、厚さは0.5～1.0mmである。穿孔があり、吊り下げて使われたのかもしれない。120、121は土鉢。120は長さ3.4cm、121は長さ7.4cm、122は丸瓦。外面は格子タタキ、内面は布目痕が見られる。

123～132は第2層出土。123は白磁碗。底径6.2cm。全面に施釉が見られる。灰白色を呈する。124は甕の口縁部。復元口径34.6cm。頸部屈曲部に太い刻み目を入れた突帯を巡らせる。内外面ともにハケメ調整がなされるが、内面はナデ消される。胎土はにぶい橙色。125～127は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。125は穿孔のある高環脚部。内外面ともにハケメ調整が見られる。126は支脚。上部径5.2cm。灰褐色を呈する。127は甕の口縁部。復元口径19.2cm。128は円筒埴輪か。外面はハケメ調整がなされ、内面には赤色顔料が見られる。復元径は20.8cm。橙色を呈する。129は丸瓦。外面は格子タタキ、内面は布目痕が見られる。130～132は土鉢。長さ5.3、4.1、4.7cm、最大径3.5、1.4、1.6cm。

Fig.31は第3層出土。133、134は土師器环。133は復元口径11.6cm、器高1.5cm、底径8.4cm。糸切り底。134は復元底径11.4cm。糸切り底で板压痕が残る。135は甕の口縁部。復元口径36.4cm。口縁端部に×印状の刻み目が入る。頸部屈曲に断面三角形の突帯が巡る。内外面ともにハケメ調整がなされる。灰褐色を呈する。136～151は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。136は甕。復元口径21.4cm。胴部外面はヘラケズリ、口縁部内面はハケメが施される。137は甕。復元口径17.4cm。胴部外面はタタキ、内面はハケメ調整がなされる。灰褐色を呈する。138は甕口縁部。口縁部はく字状に屈曲する。胴部外面にはハケメ、内面はヘラケズリが施される。灰白色を呈する。山陰系の甕。140は甕口縁部。復元口径13.4cm。口縁部の立ち上がりは短く、屈曲する。内外面ともにハケメ。山陰系。灰白色を呈する。139は甕口縁部。復元口径26.6cm。口縁部外面には櫛描の波状文が施される。灰褐色を呈する。141、142も甕。復元口径14.8、12.4cm。141は胴部に穿孔がある。外面はヘラミガキ、胴部内面はヘラケズリ、口縁部内面はタタキが見られる。灰白色を呈する。142は口縁部内外面ともハケメ調整がなされる。143は甕の口縁部。口縁端部には刻み目、口縁部下方に波状文が施される。にぶい橙色を呈する。144は甕の胴部。外面に刺突文が見られる。灰白色を呈する。145、146は高環。145は復元底径12.7cm。脚部の内外面はハケメ、鉢の外表面はハケメ、内面はナデ調整がなされる。灰褐色を呈する。146は脚部内面にハケメが施される。明褐色を呈する。147～149は高環脚部。147の復元底径17.8cm、149の復元底径11.1cm。148、149は穿孔がある。150は支脚。上面の復元径は7.6cm。胴部内面はハケメ調整がなされる。灰白色を呈する。

151は器台の底部。復元底径11.6cm。内面はハケメ。灰白色を呈する。152は蛸甕。復元口径8.8cm。穿孔あり。淡橙色を呈する。153は土鉢。平面形は円に近い楕円形。長軸3.9cm、短軸3.3cm。

Fig.32は第3層下、もしくは砂丘上面の出土。154～172は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。154～156は甕。復元口径14.8、13.2、13.6cm。154の胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリで褐色を呈する。155の口縁部外面はハケメ、胴部外面はタタキのちハケメ調整、内面はナデ。156は口縁部がく字状に屈曲する。にぶい橙色を呈し、復元口径13.1cm。山陰系。157～159は甕

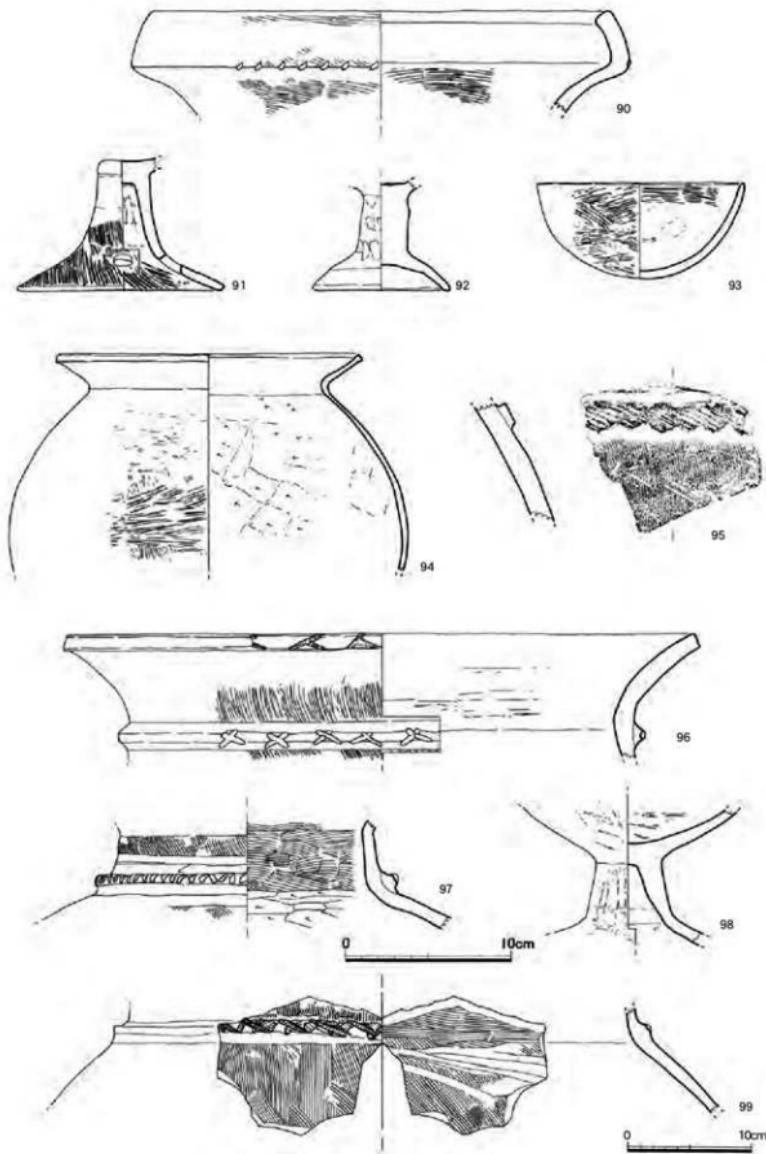


Fig.27 土器群散布出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)

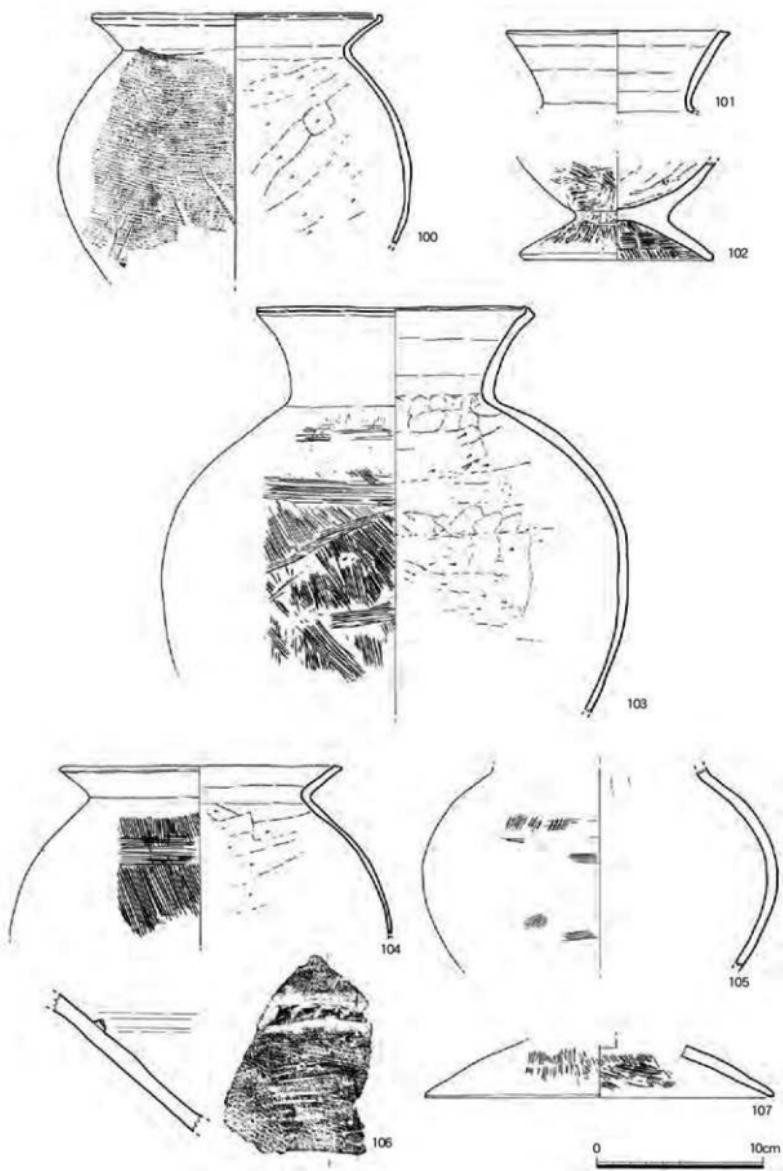


Fig.28 土器群散布出土遺物実測図 2 (1/3)

口縁部。復元口径 19.4、17.4、17.8cm。157 は口縁部下に円形浮文が付される。にぶい橙色を呈する。158 はナデ調整。灰白色を呈する。159 は内外面ともに丁寧なヘラミガキが施される。にぶい橙色を呈する。160 ~ 165 は高环。160 は高环環部。復元口径は 22.2cm。外面はヘラミガキのうち部分的にナデ消される。内面はハケメ調整がなされる。にぶい橙色を呈する。161 ~ 166 は高环脚部。161 ~ 163、166 の復元底径は 18.2、13.6、12.8、12.8cm。いずれも穿孔がある。163 は外面にヘラミガキ、164 は外面に縱方向の暗文とヘラミガキがなされる。165 は穿孔が 2 か所見られ、外面はヘラミガキ調整、内面はハケメが施される。167 は脚付鉢。復元底径は 10.3cm。灰褐色を呈する。

168、169 は甕底部。168 の内面はハケメ調整。底径は 4.8cm。やや丸底氣味でにぶい橙色を呈する。169 は甕底部。底径 3.9cm。にぶい橙色。170 は小型の鉢。復元口径 9.4cm。灰色を呈する。171 は高环脚部。外面はハケメのちヘラミガキ、环部内面は放射状のヘラミガキ。にぶい橙色を呈する。172 は小型の高环脚部。穿孔が見られる。灰白色を呈する。173 は蛸壺。復元口径 5.0cm。174 は石錘。軽石製。平面梢円形で、長軸 7.2cm、短軸 5.0cm、最大厚さ 4.0cm。

175 ~ 178 は矢板堀削部の立会調査で出土した。

175 は白磁碗。口径 16.4cm、器高 6.0cm、底径 6.7cm。灰白色の胎土に半透明の灰色釉が全面にかかる。高台に墨書が見られる。花押のような字体である。176 は壺または水注の底部。復元底径 9.3cm、残高 9.3cm。黄白色の胎土の内面と外面底部付近まで半透明の黄色釉がかかる。底部は露胎となる。高台に墨書が見られる。177 は滑石製品。石鍋の転用と思われる。方形に加工してあり、一部抉りが見られ、紐をかけたと思われる。長さ 7.4cm、幅 7.6cm、厚さ 2.0cm。178 は平瓦。表は布目、裏は格子目文。179 は SKO40038 から出土した土製品。瓦質で、外面には雲文が線刻され、黒色の漆が塗布された上に赤色の漆が重ねられている。ごく一部の小片であるため、図示したが、傾き等はこれで正しいか不明であるが、掲載する。

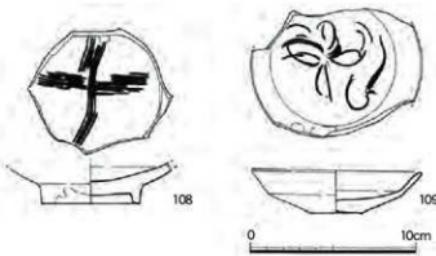


Fig.29 包含層その他出土遺物実測図 1 (1/3)

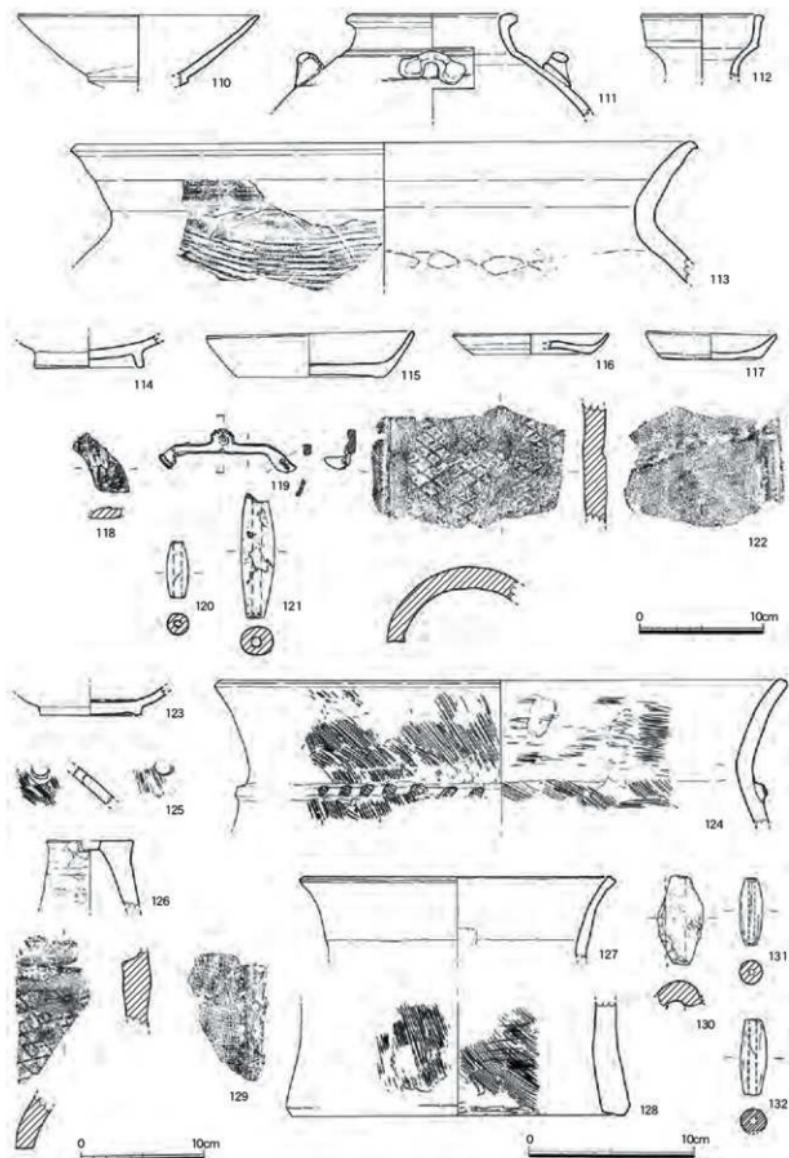


Fig.30 包含層その他出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)

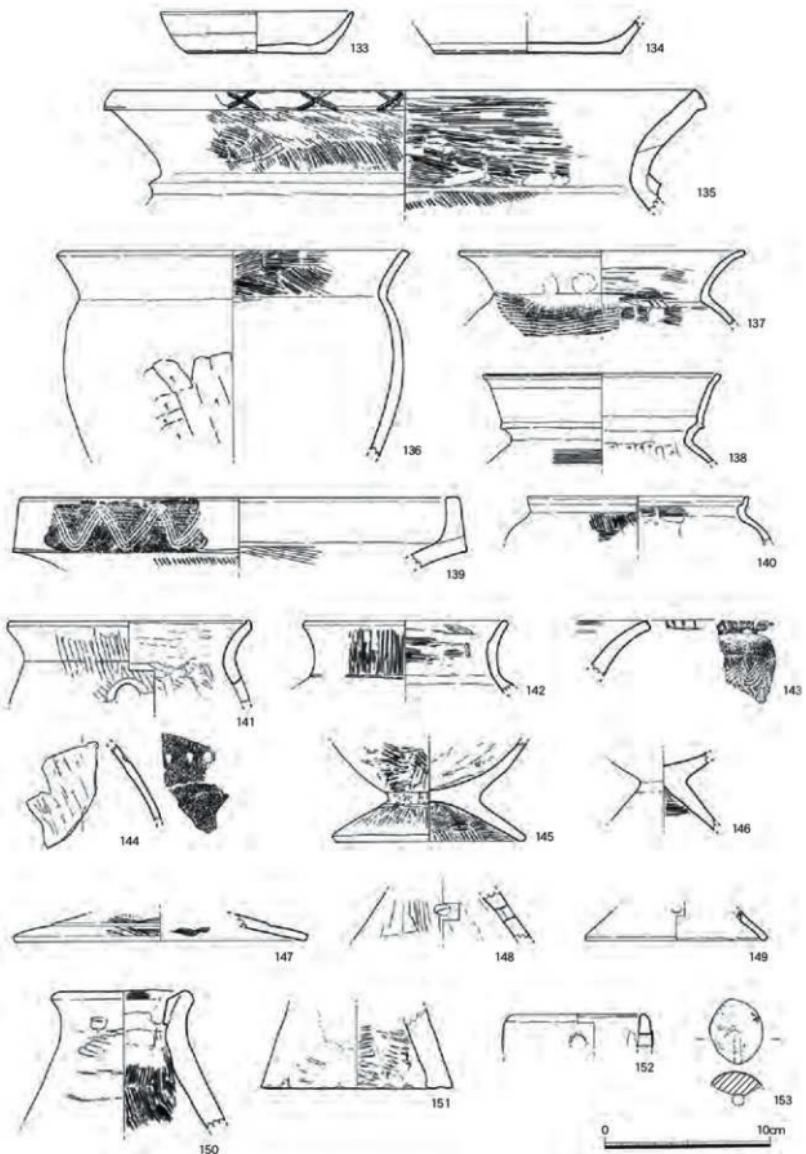


Fig.31 包含層その他出土遺物実測図 3 (1/3)

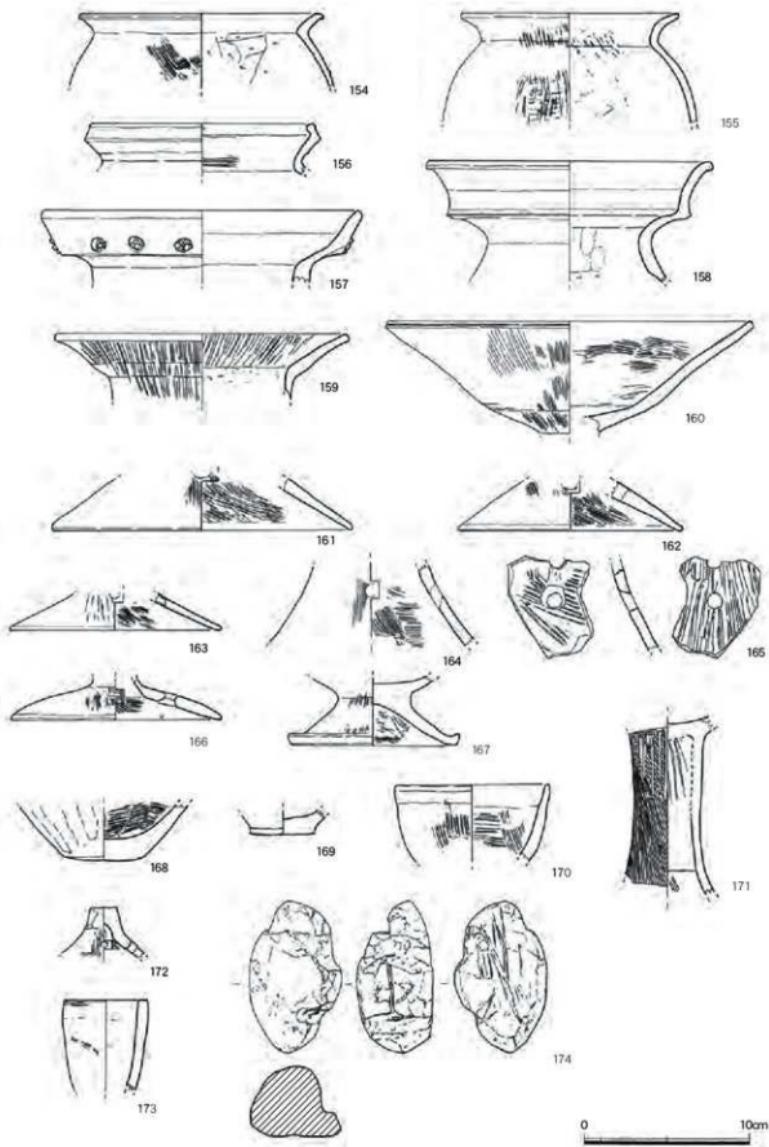


Fig.32 包含層その他出土遺物実測図 4 (1/3)

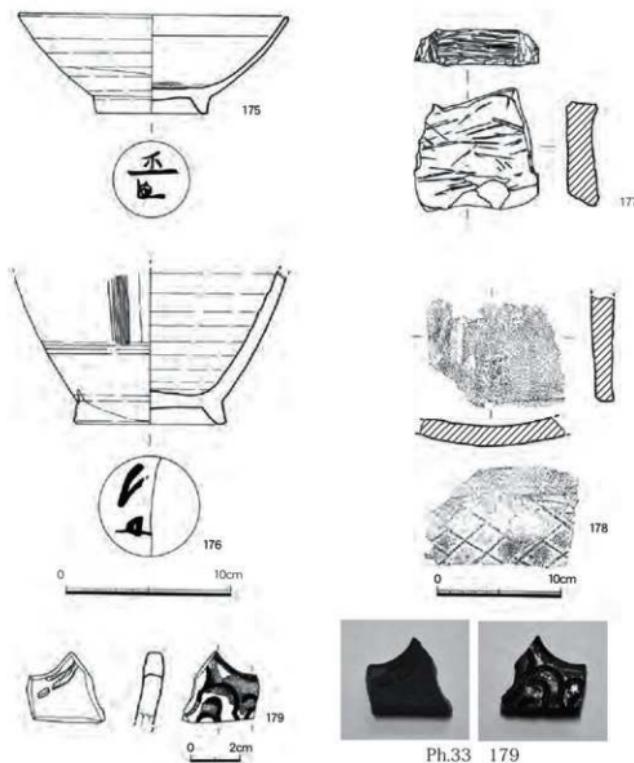


Fig.33 包含層その他出土遺物実測図 5 (1/2、1/3)

3) 小結

出土遺物としては、埴輪、甕棺など弥生時代のものが散見されるが、遺構として初見されるのは、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期であるSC040080、SC040132の住居跡、SU040151の甕棺(埋甕)、040125、040128、040129、040059、040060が挙げられる。040060は割石の上に広口壺が据えられた状態で検出された祭祀遺構である。また、3面から4面の間で検出された土器の散布も弥生時代終末から古墳時代初頭におさまる。次に、陶磁器やガラス製品、ガラス製造関係遺物が出土している040008、白磁碗、滑石製の紡錘車が出土している040109、その他040003、040011、040025、040054は12世紀代。土師器の集積遺構である040103は14世紀代。当該地区では古代の遺構は確認されなかった。

6. 5区の報告

1) 各遺構・出土品の概要・基本層序

5区は遺構面を3面設定した。調査区の南西角を土置場とし、反転して調査を行った。また、調査区への出入口が一部残ったため、これも最終的に掘り下げを行った。

第1面は標高約4.0mの褐色土層面上である(Fig.2)。井戸上面の陶磁器類の散布や、土坑が検出された。第2面は第1面から20cm掘り下げた標高3.8mの茶褐色土層面上である(Fig.3)。1面からの掘り残しや土坑、井戸の掘り方上面が検出された。第3面は基盤である黄褐色砂質土層上面である(Fig.4)。標高3.4m、調査区の約1/2を占める北西角は井戸の掘方内となり、底部から井筒の痕跡が確認されている。全体的に5区は大半が井戸の掘方内で占められており、上面の遺構は不明瞭なもののが多かった。



Ph.1 調査区北壁土層

Ph.2 調査区東壁土層

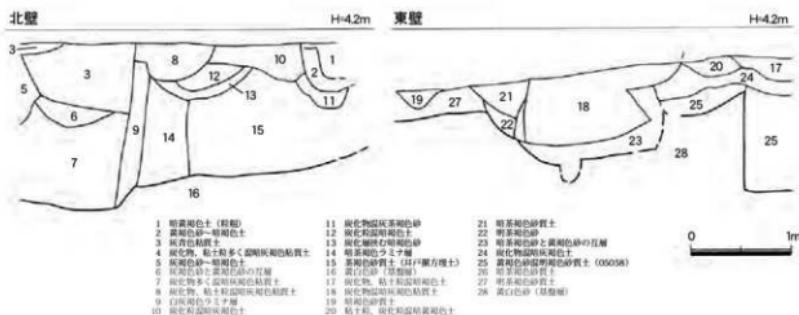


Fig.1 調査区土層図 (1/50)

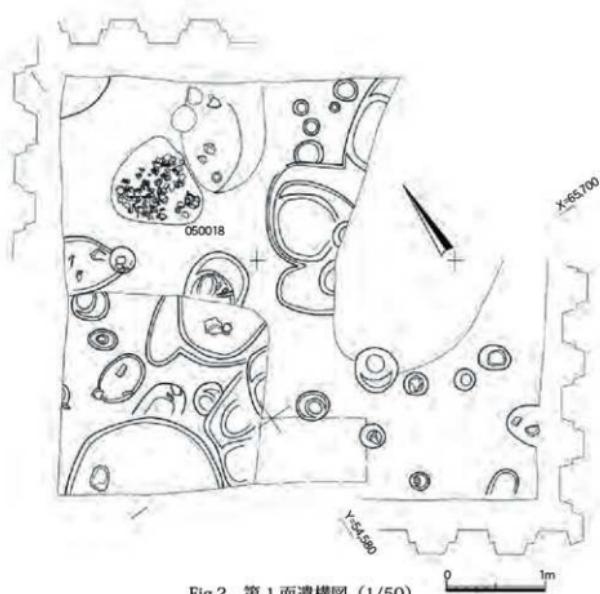


Fig.2 第1面遺構図 (1/50)

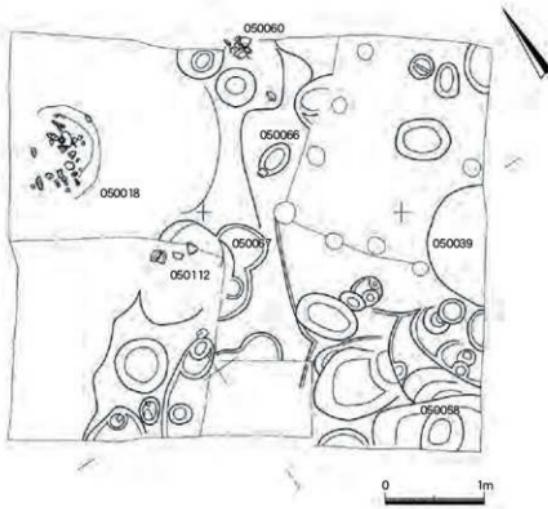


Fig.3 第2面遺構図 (1/50)

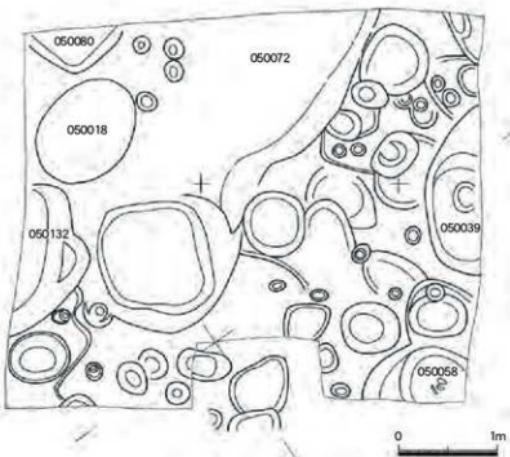


Fig.4 第3面遺構図 (1/50)



Ph.3 調査区第1面西側（西から）



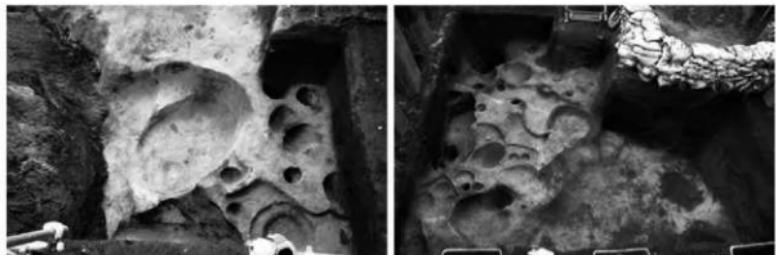
Ph.4 調査区第1面東側（北から）



Ph.5 調査区第2面西側（西から）



Ph.6 調査区第2面東側（北から）



Ph.7 調査区第3面西側（西から）

Ph.8 調査区第3面東側（北から）



Ph.9 調査区入口下

2) 遺構と遺物

(1) 井戸 (SE)

SE050018 (Fig.5) 調査区北西角、第1面上で陶磁器類の散布を確認した。これは第3面まで掘り下げを行ったところ、調査区の約半分を占める井戸の掘方内であり、井筒であると考えられた。井戸掘方は、数基の井戸の切り合いと考えられる。陶磁器類が多量に投棄されていた。途中で井戸枠と思われる木痕が見られたが下部には井筒は残存していない。井筒は長軸 1.0 m、短軸 0.8m の平面椭円形を呈する。

出土遺物 (Fig.7 ~ 9) Fig.7 は井戸の第1面出土。1 ~ 3は白磁碗。1は口径 16.9cm、器高 6.2cm、底径 6.6cm。灰白色胎土の内面から外面下部まで明オリーブ灰色の釉がかかるが、高台は露胎となる。無文。口縁端部は玉縁を呈する。2は底径 6.7cm。灰白色胎土で、内面から外面下部まで灰白色的釉がかかるが、高台は露胎となる。外面に斜めの刻線が入る。3は復元口径 19.0cm、器高 5.5cm、底径 6.8cm。灰白色胎土で、内面から高台内側まで灰白色釉がかかるが高台内部は露胎となる。高台内部は墨書きが見られるが字体は不明。見込み内面には片切り彫りや櫛描文による文様が施される。口縁部は外反する。4は白磁皿。口径 12.7cm、器高 3.5cm、底径 4.4cm。灰白色胎土で、内面から外面下部まで淡緑色の釉がかかる。底部は露胎となる。口縁部はやや外反する。5は白磁皿。復元口径 29.8cm。内外面に釉がかかる。口縁部は外反する。6 ~ 8は青磁。6は青磁の水注の口縁部。復元口径 10.6cm。灰白色の胎土に明緑灰色の釉が内外面ともにかかる。7、8は青磁皿。復元口径 10.6、9.0cm、器高 3.5、2.2cm、底径 4.2、3.2cm。いずれも内面から外面下部まで釉がかかり、底部外面は露胎となる。底部はやや上

げ底を呈する。7は見込み内面には櫛描文、片切り彫りによる文様が施文される。胎土は明青灰色で明青灰色の釉がかかる。8は見込みに片切り彫りによる花文が施される。胎土は灰色で、オリーブ灰色の釉がかかる。9は陶器の水注もしくは壺の口縁部。復元口径9.4cm。赤褐色の胎土に黒褐色の釉がかかる。10は土師器皿。口径9.4cm、器高1.2cm、底径7.3cm。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。11は陶器の蓋。復元口径24.8cm。灰褐色胎土に灰オリーブ色の釉が外面下部までかかり、口縁部から内面は露胎となる。12は鉄釘。長さ10.5cm、断面は方形となる。13は丸瓦。外面は格子タタキ、内面は布压痕が残る。

Fig.8は井戸の第2面出土の遺物。14～17は白磁碗。14は復元口径15.8cm。灰白色の胎土で外面に灰白色釉がかかる。外面の下半は露胎となる。玉縁口縁を呈する。15は外面に櫛描文が施される。灰白色胎土で外面に灰白色釉がかかる。復元口径16.4cm。口縁部は外反する。16は碗底部。灰白色胎土に灰白色釉がかかる。高台は露胎となる。見込みに櫛描文、花文が施される。復元底径は6.4cm。17も碗底部。内面に曲線文が施され、灰白色胎土で外面に灰白色釉が施される。高台は露胎となる。復元底径は5.4cm。18は白磁壺口縁部。復元口径10.6cm。灰白色胎土で、灰白色の釉がかかっており、内面の下半は露胎となる。19は越州窯系青磁の小碗。口径10.2cm、器高4.5cm、底径2.8cm。器壁は薄く、灰白色的胎土で全面にオリーブ灰色の釉がかけられる。高台疊付には胎土目が残る。20は陶器の四耳壺。灰色胎土で、外面及び内面上部まで明オリーブ色釉がかかる。21は陶器の壺底部。復元底径は12.2cm。22は須恵器の甕口縁部である。復元口径26.6cm。23～25は土師器壺。23は復元底径9.0cm。24は7.8cm、25は7.2cm。26、27は土師器壺、28は土師器皿。26は復元口径15.6cm、底部に板圧痕が残る。27は復元口径14.6cm。外面底部付近に指おさえの調整がある。28は復元口径8.8cm、器高1.3cm、底径7.0cm。底部に板圧痕が残る。29は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器の甕底部。外面にハケメ調整がある。30は用途不明の鉄製品。長軸12.2cm、短軸8.1cm、厚さ約3.0cm。31は鉄釘。長さ5.8cm、断面は方形で0.8×0.8cm。32は平瓦。裏面に格子目タタキがある。

Fig.9は第4面出土。33～36、39は白磁碗。33は復元口径15.0cm。底部付近の外面は露胎となるが、内外面は灰白色的胎土に灰白色釉がかかる。胴部外面に櫛描文が施される。口縁端部は折れる。34は口径15.9cm、器高7.7cm、底径6.4cm。灰白色胎土で内面から外面下部まで灰白色的釉がかかることで高台は露胎となる。無文。35は復元口径15.2cm、器高6.5cm、底径5.0cm。灰白色胎土で内面から外面下部まで淡灰白色的釉がかかることで高台は露胎となる。36は白磁碗。底径7.0cm。灰白色胎土で内面から外面下部まで灰白色釉がかかることで高台は露胎となる。39は白磁碗。底径5.5cm。胴部外面には櫛描文が施され、明褐色の胎土で内面から外面下部まで灰白色的釉がかかることで底部は露胎となる。高台内部に墨書きが見られるが、字体は不明。37、38は白磁皿。37は口径13.6cm、器高3.8cm、底径3.8cm。灰白色胎土で内面から外面下部まで灰白色釉がかかることで底部は露胎となる。口縁部は外反する。38は底径4.0cm。灰白色胎土で灰白色釉がかかることで底部は露胎となる。40、41は土師器皿。復元口径9.0cm、器高1.1cm、底径7.0、6.5cm。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。42は滑石製の石鍤。石鍋の転用品。平面橢円形で長軸5.6cm、短軸3.3cm、厚さ最大2.5cm。43は鉄製の紡錘車か。径5.0cm。

SE050080 (Fig.6) 調査区北西角に位置する。第3面の砂丘面で検出した。井筒掘方は平面方形を呈する。井戸の掘方は、SE050018と共有される。

出土遺物(Fig.10) 44は白磁皿。復元口径10.6cm。灰白色胎土で外面に灰白色釉がかかることで外面の下半は露胎となる。45は土師器壺。口径15.0cm、器高3.3cm。ヘラ切りの底部。46は土師器皿。口径9.9cm、器高1.5cm、8.0cm。底部はヘラ切りで板圧痕が残る。47は土製円盤。径は4.2～4.7cm、厚さ1.0cm。

SE050131 (Fig.6) 調査区南西角に位置する。掘方は調査区の第3面で検出された。

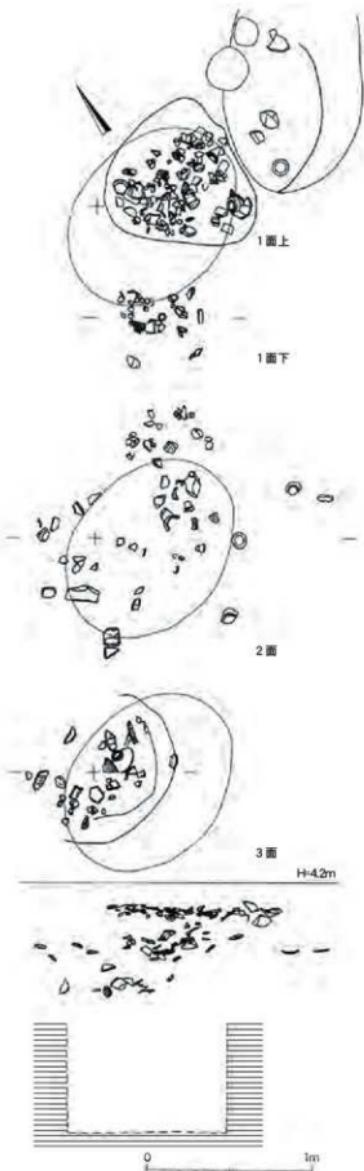


Fig.5 050018 遺構図 (1/30)



Ph.10 050018 1面 (西から)



Ph.11 050017、050014 1面 (西から)



Ph.12 050018 2面 (北から)



Ph.13 050018 2面 (北から)

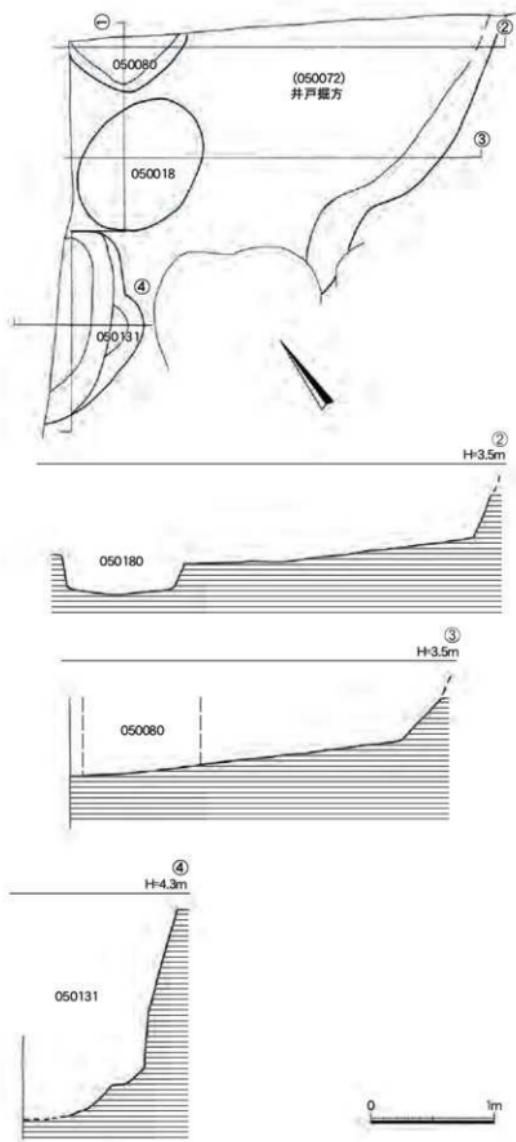
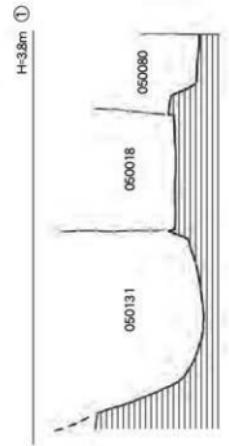


Fig.6 井戸 050018・050080・050131 遺構図 (1/40)



Ph.14 050018 底面（西から）



Ph.15 050080 (南から)

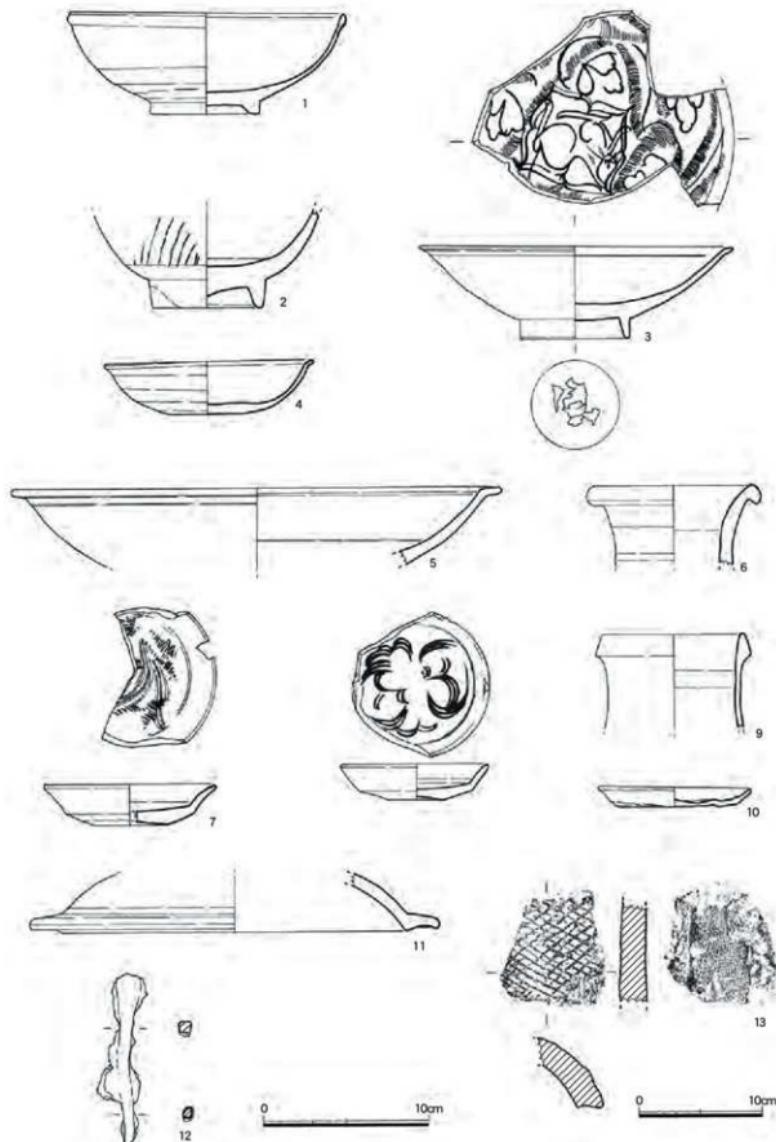


Fig.7 井戸遺出土物実測図 1 (1/3・1/4)

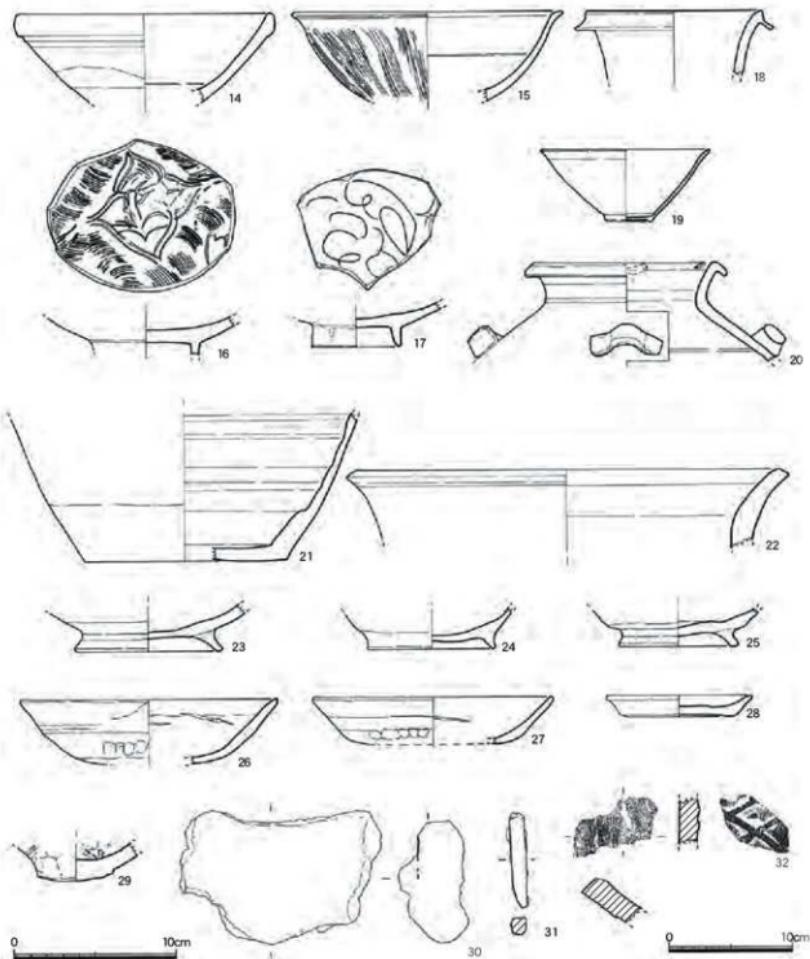


Fig.8 井戸遺物実測図 2 (1/3・1/4)

出土遺物 (Fig.11) 48は白磁碗。復元口径 15.4cm、器高 6.0cm、底径 6.3cm。灰白色胎土で内外面に灰白色釉がかかるが、外面の高台付近は露胎となる。玉縁口縁を呈する。49は白磁碗底部。高台径は 6.6cm。灰白色胎土で内外面に灰白色釉がかかるが、外面高台付近は露胎となる。50は土師器皿。口径 9.2cm、器高 1.2cm、底径 7.0cm。底部に板压痕が残る。51～54は鉄製品。いずれも釘。53は釘の頭の部分で T 字形を呈する。

SE050072 (Fig. 6) 調査区の約半分を占める。050018、050080、050131の掘方である。

出土遺物 (Fig.12) 55、56は陶器底底部。復元底径はそれぞれ 20.2、21.0cm。いずれも灰白色胎土に灰オリーブ色釉がかかる。57は甕口縁部。復元口径 14.0cm、外面にはヘラケズリ調整がなされ、内面にはハケメが施される。にぶい橙色を呈する。58は瓦器碗。内面は黒色を呈する。復元

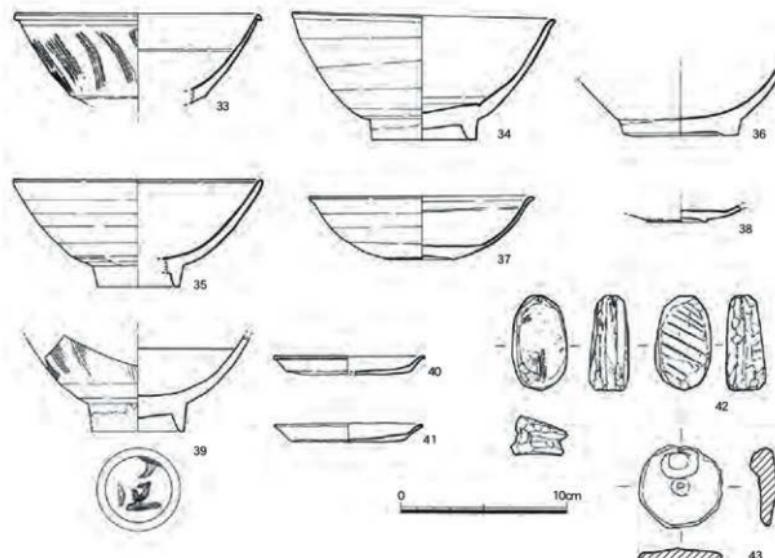


Fig.9 井戸遺出土遺物実測図 3 (1/3)

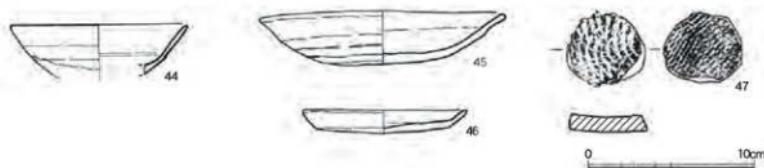


Fig.10 井戸遺出土遺物実測図 4 (1/3)

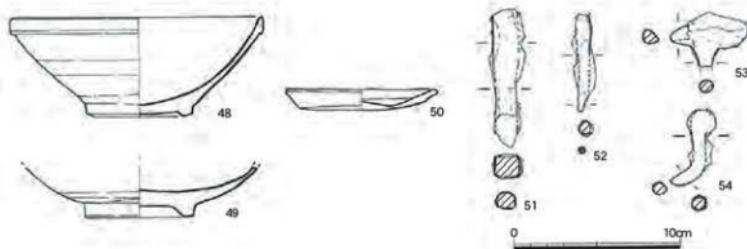


Fig.11 井戸遺出土遺物実測図 5 (1/3)

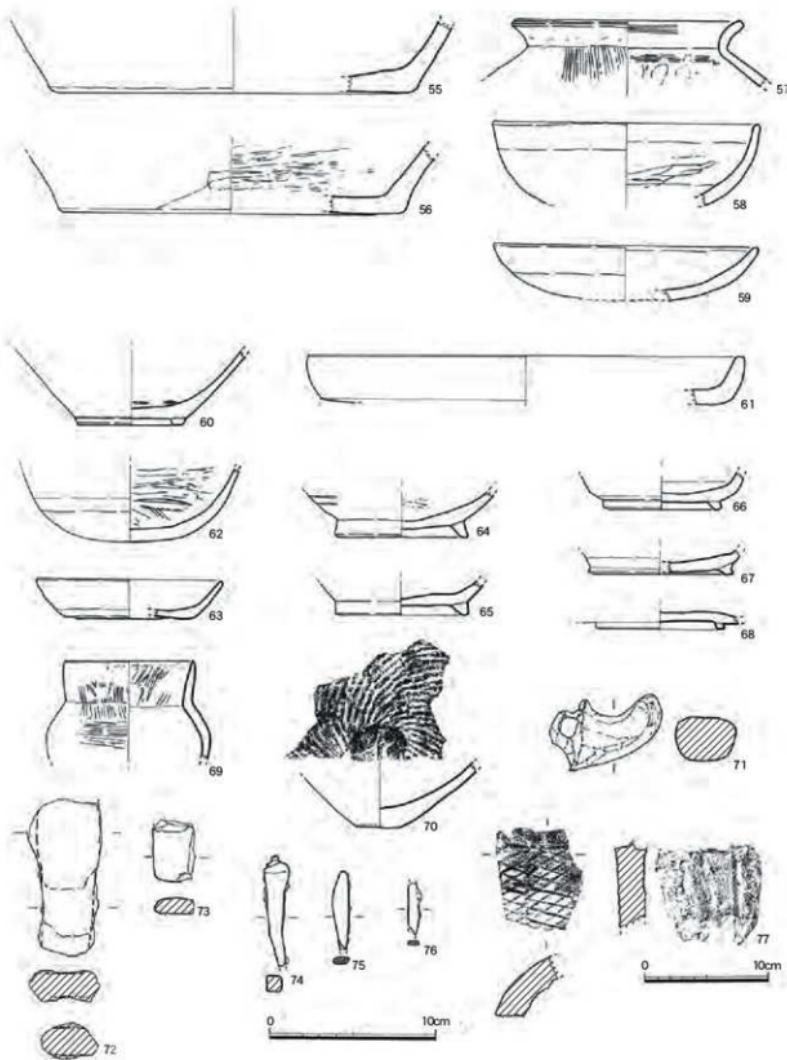


Fig.12 井戸遺出土遺物実測図6 (1/3・1/4)

口径は 16.2cm。内面はヘラミガキが施される。59 は土師器壺。復元口径 16.0cm、器高 3.3cm。60 は越州窯系青磁碗。灰白色胎土で内外面に灰白色釉がかかる。見込み内面に胎土目跡が残る。61 は瓦質土器の盤か。復元口径は 26.4cm。62 は黒色土器の碗。内面はヘラミガキが施され、黒色を呈する。63 は土師器皿。復元口径 11.2cm、器高 2.5cm。64 は黒色土器の壺底部。底径 8.0cm。内面はヘラミガキ調整で黒色を呈する。65 は土師器壺底部。復元底径 8.0cm。66 ~ 68 は須恵器壺底部。高台がつく底部で、復元底径はそれぞれ 7.2、8.8、7.8cm。69、70 は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。

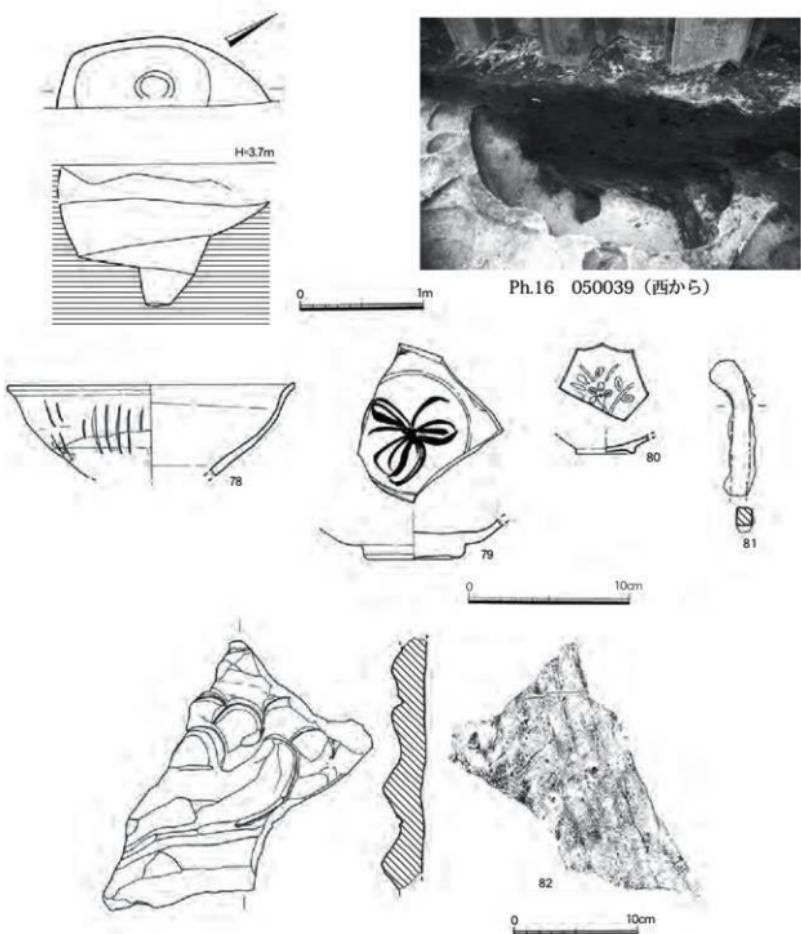


Fig.13 050039 遺構図・出土遺物実測図 (1/40・1/3)

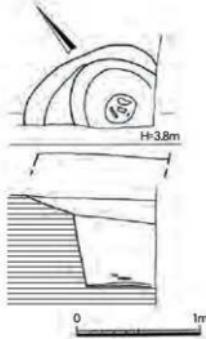
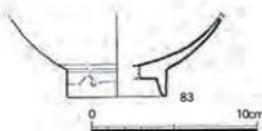


Fig.14 050058 遺構図・出土遺物実測図 (1/40・1/3)



Ph.17 050058 (西から)



Fig.15 050060 遺構図 (1/20)



Ph.18 050060 (東から)



Ph.19 050060 出土陶器 (84)

69は小型丸底壺。復元口径 8.0cm。口縁部内外面にハケメ調整、胴部にヘラミガキ調整がなされる。70は甕もしくは壺の底部。タタキ調整がなされる。71は甕の把手。72、73は鉄製の刀子片か。74～76は鉄製の釘。77は丸瓦。外面は格子タタキ、内面は布目痕が残る。

(2) 土坑 (SK)

SK050039 (Fig.13) 第2面で検出した調査区東側壁に切られている土坑。平面長軸 1.7m、深さ 1.2m を測る。

出土遺物 (Fig.13) 78は白磁碗。復元口径は 17.4cm。灰白色の胎土に内外面に灰白色釉がかかるが、外面下半は露胎となる。外面器壁に櫛描文が施される。79は青磁碗底部。底径 6.0cm。灰白色の胎土で内外面にオリーブ灰色釉がかかるが疊付から高台内部まで露胎となる。見込み内面には片切彫りで花文が施される。80は青白磁皿。底径 3.6cm。灰白色の胎土に明青灰色の釉がかかる。見込み内面に浮き彫りで花文が施される。81は鉄釘。残長 8.2cm、断面は方形を呈する。82は近世の瓦。鬼瓦の一部と思われる。

SK050058 (Fig.14) 第2面調査区南東角で検出した。残存部分の長軸 1.1 m、短軸 0.65 m の平面橢円形、深さ 1.1 m を測る土坑。底部付近から獸骨が出土している。

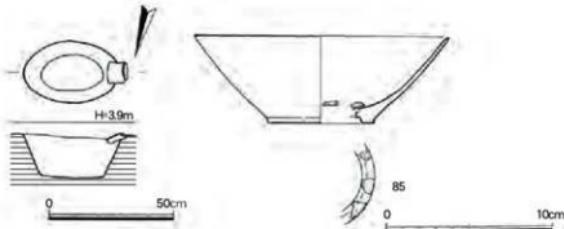


Fig.16 050066 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

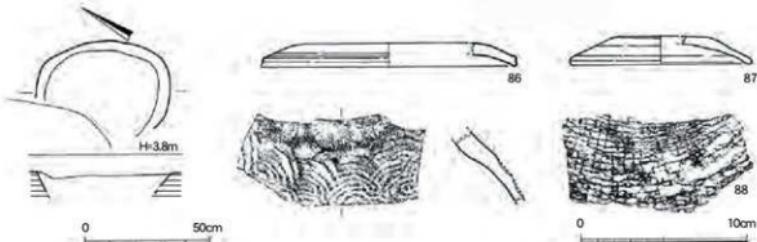


Fig.17 050067 遺構図・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

出土遺物 (Fig.14) 83は白磁碗底部。灰白色の胎土で内外面に淡明青灰色釉がかかるが、高台は露胎となる。復元口径 6.0cm。

SK050060 (Fig.15) 陶器の甕と礫の集積遺構である。第2面の北壁中央付近で検出した。

出土遺物 (Ph.19) 84は陶器の甕または甕の胴部片。暗赤褐色の胎土で内外面に白灰色の釉がかかる。内面はハケで削られる。

SK050066(Fig16) 調査区中央やや北寄りに位置する。第2面で検出した。長軸 40cm、短軸 25cm、深さ 20cmの平面楕円形を呈する土坑。遺構の縁に青磁碗の破片が乗っていた。

出土遺物 (Fig.16) 85は越州窯系青磁碗。遺構の縁で検出した。復元口径 15.4cm、器高 5.3cm、復元底径 6.4cm。灰白色胎土で灰オリーブ色釉がかかるが、疊付は露胎となる。疊付及び見込み内面にも胎土跡が残る。

SK050067(Fig.17) 調査区中央付近に位置する。第2面で検出した。他の遺構に切られており、残存部分は長軸 0.55m、短軸 0.45m の平面楕円形の土坑。

出土遺物 (Fig.17) 86、87は須恵器蓋。それぞれ復元口径 15.4、11.0cm。88は須恵器甕胴部片。外側は格子タタキ、内面は同心円状の当具痕が残る。

SK050112 (Fig.18) 調査区中央に位置する。上端は第1面で検出されたが、明確でなく、第3面の砂丘面で遺構底面付近の掘方が確認された。平面は楕円形で 1.2 ~ 1.4 m、深さ 1.2 m を測る。土坑。

出土遺物 (Fig.18、19) 89 ~ 91は上面出土。89は陶器の甕底部。底径は 17.5cm。内面は底部付近まで施釉され、外側も釉が垂れかかる。灰黄褐色を呈する。90は丸瓦。外側は格子タタキ、内面は布目痕が残る。91は瓦器碗。底径 6.0cm。外側は黒色を呈する。92 ~ 103は中層出土。92 ~ 97は白磁碗。92は復元口径 15.8cm、器高 6.7cm、底径 7.2cm。灰白色の胎土で内面及び外面上半まで灰白色釉がかかり、胴部外面上半から高台まで露胎となる。93は口径 15.8cm、器高 6.3cm、底径 6.0cm。

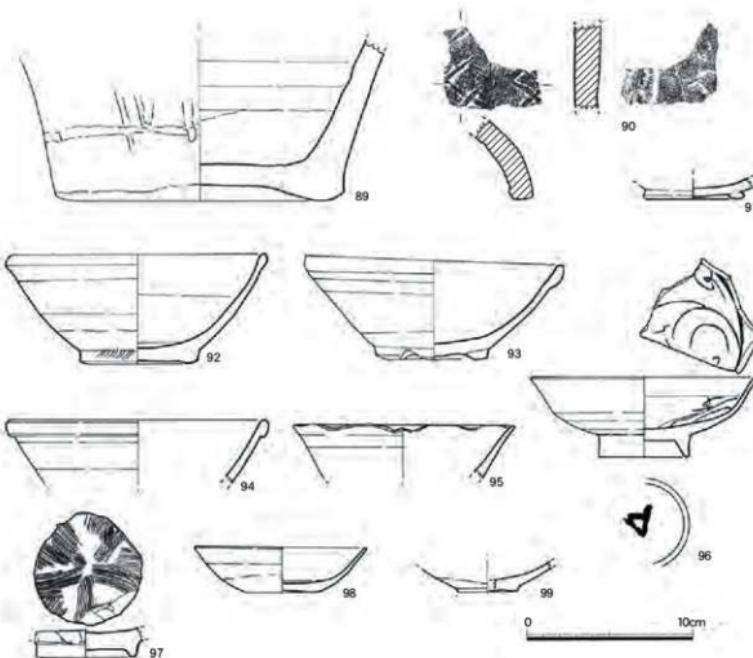
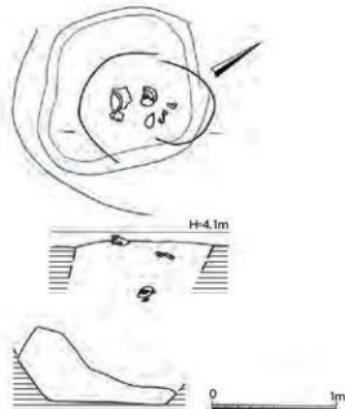


Fig.18 050112 遺構図・出土遺物実測図（1/40・1/3）

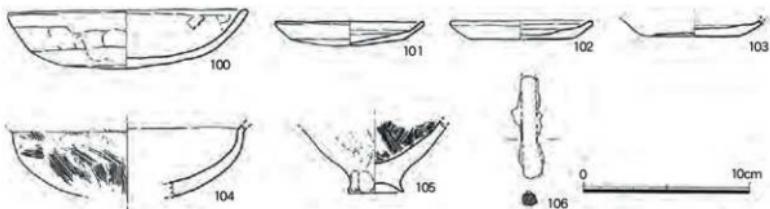


Fig.19 050112出土遺物実測図 (1/3)



Fig.20 入口下出土遺物実測図 (1/3)

灰白色胎土で内外面及び高台疊付まで灰白色釉がかかる。高台内面は露胎となる。高台は波形に切り込みが入る。玉縁口線を呈する。94は復元口径16.0cm。口縁部付近のみ。灰白色の胎土で灰白色釉がかかる。玉縁口線を呈する。95は復元口径13.4cm。口縁端部は波形に仕上げられる。灰白色の胎土に明緑灰色の釉がかかる。96は復元口径13.6cm、器高4.8cm、底径5.4cm。内面に花文が刻まれ、灰白色胎土で内面及び外面下半まで灰白色釉がかかる。高台内面に墨書きが見られるが、文字は不明。97は白磁碗底部を加工した瓦玉。見込み内面に櫛描文が入る。灰白色胎土で灰白色釉がかかるが、疊付から高台内面は露胎となる。98、99は白磁皿。98は口径15.4cm、器高2.8cm、底径4.4cm。やや上げ底を呈する。灰白色胎土に灰白色釉がかかるが、底部外面は露胎となる。99は復元底径3.8cm。低い高台がつく。灰白色的胎土にオリーブ灰色の釉がかかるが、底部外面は露胎となる。

100は土師器壺。口径14.5cm、器高3.5cm。外面には指壓さえ痕があり、底部はヘラ切り。101～103は土師器皿。101は口径9.0cm、器高1.5cm。底部はヘラ切り。102は復元口径8.6cm、器高1.1cm、底径6.0cm。底部は糸切りで板压痕が残る。103は底径5.9cm。糸切り底で板压痕が残る。104～106は底部付近出土。104、105は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器。104は鉢。外面はハケメ調整がなされる。105は脚付き鉢か。外面はケズリ、内面はハケメでの調整。底部外面は指壓さえで成形される。106は鉄釘。歿長は6.0cm。

(3) 調査区南壁出入口

調査区の昇降口を設置していた箇所について、最後に調査を行った。ここで出土した土器を示す。

出土遺物 (Fig.20) 107、108は須恵器蓋。復元口径はそれぞれ13.2、11.0cm。いずれもかえりがつく。109は碁石か。1.7cm×2.0cmで白色を呈する。

(4) 包含層その他出土遺物 (Fig.21～24)

Fig.21は第1層出土の遺物。110～112は白磁碗。110は復元口径11.6cm、器高4.4cm、底径3.8cm。灰白色的胎土で内面から外面下半まで明緑灰色の釉がかかり、底部付近は露胎となる。111は復元口径15.4cm。口縁端部は輪花を呈し、内面にはヘラで暗文が施される。灰白色的胎土に灰オリーブ色の

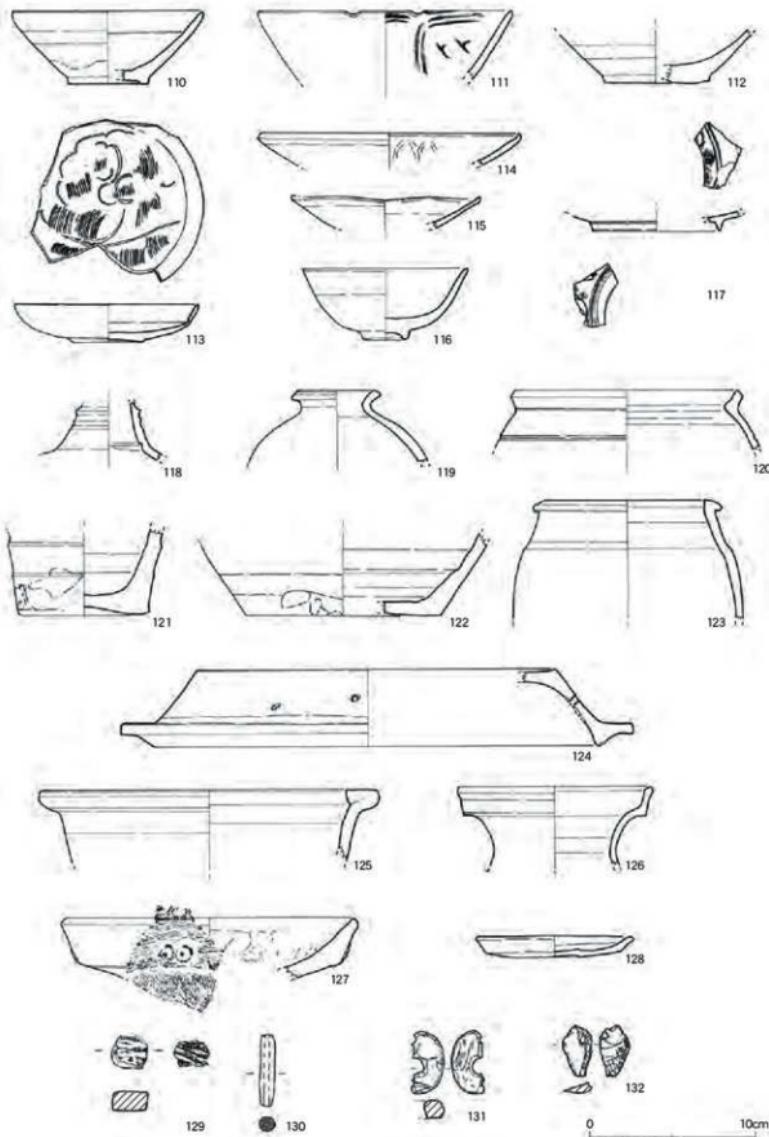


Fig.21 包含層その他出土遺物実測図 1 (1/3)

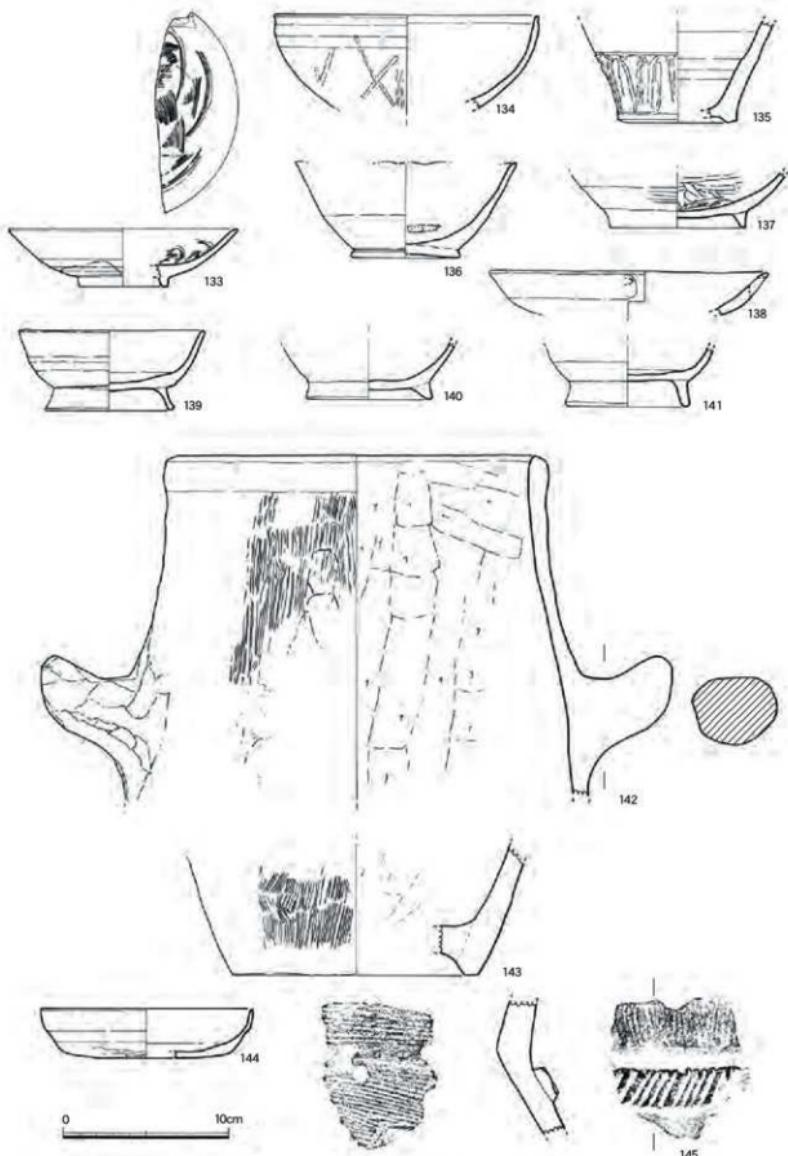


Fig.22 包含層その他出土遺物実測図 2 (1/3)

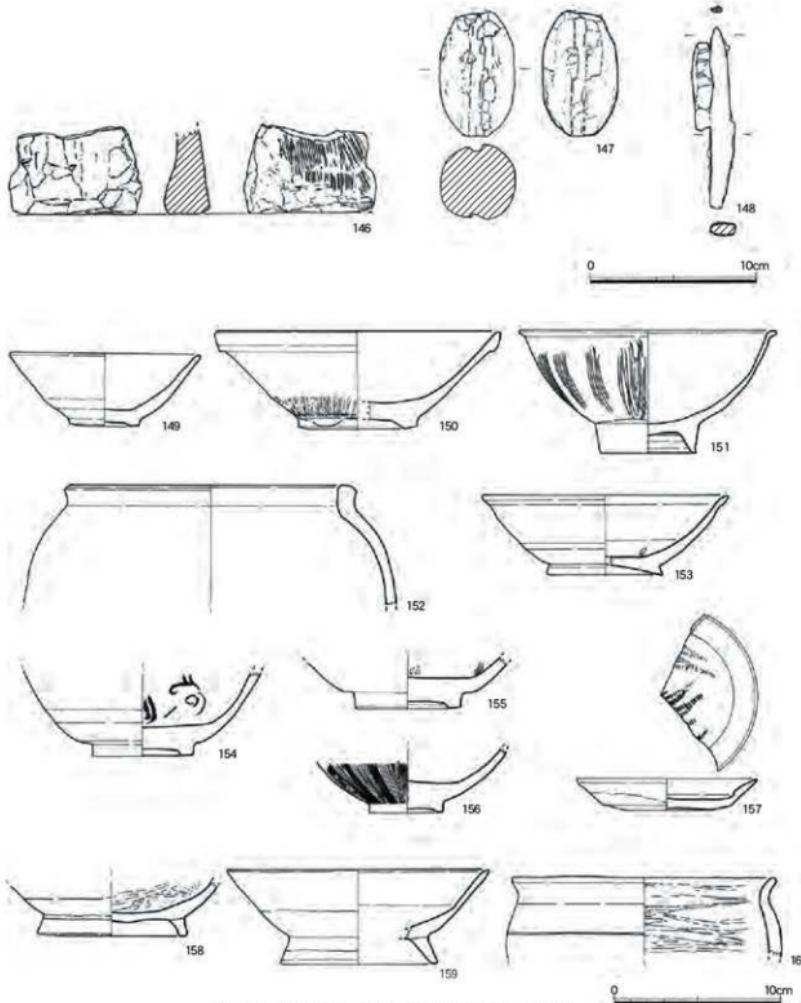


Fig.23 包含層その他出土遺物実測図 3 (1/3)

軸がかかる。112は復元底径6.6cm。灰白色の胎土で灰白色の軸が内面には施釉されるが、外面は露胎。外底に墨書が見られるが、文字は不明。113は白磁皿。復元口径11.1cm、器高2.3cm、復元底径4.0cm。灰白色胎土に灰白色軸がかかるが、底部は露胎。内面に花文状の櫛描が施される。114、115は青磁皿か。114は復元口径15.6cm、内面にへら切りの連弁文が施される。115は復元口径11.4cm。口縁端部はゆるい波状を呈する。116は青磁碗。復元口径10.0cm、器高4.3cm、復元底径2.8cm。豊付から高台内部は露胎であるが、それ以外には透明のオリーブ色釉がかかる。117は明時代の青花皿。復元底径8.0cm。外面と内面に唐草文もしくは草花文が施される。118は白磁で花器の一部か。灰白色胎土で灰白色軸

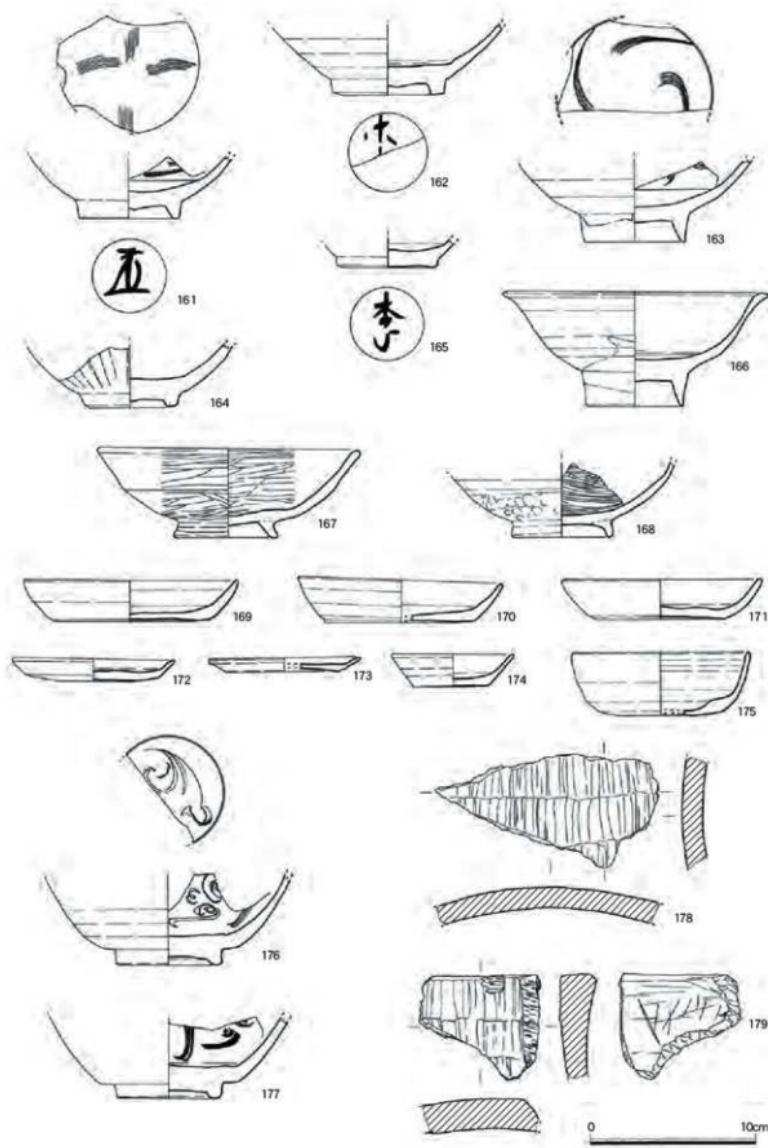


Fig.24 包含層その他出土遺物実測図 4 (1/3)

が外面にかかる。119は陶器の壺。口径は5.4cm。内外面に施釉され、灰白色胎土に灰白色釉がかかる。120は陶器甕。灰色胎土に灰オリーブ色釉が外面に施釉される。復元口径11.4cm。121は陶器壺の底部。復元底径10.0cm。赤褐色の胎土に灰白色釉がかかり、底部外面のみが露胎となる。122は陶器の壺または甕の底部。復元底径11.8cm。底部外面は露胎となり、灰オリーブ色を呈する。123は陶器壺。復元口径14.0cm。内外面に施釉され、灰オリーブ色を呈する。124は陶器の蓋か。復元口径31.0cm。皿をひっくり返したような形状で、残存部分の胴部には2か所孔が穿たれている。外面上部に灰色の釉がかかる。125は近世の土製の鉢。復元口径は20.6cm。126は須恵器壺の口縁部。復元口径は11.8cm。127は弥生時代終末から古墳時代初頭の壺口縁部。口縁部外面には波状の沈線が巡り、ボタン様の粘土粒が貼り付けられる。にぶい橙色を呈する。口縁部内面にハケメ痕が残る。128は土師器皿。口径9.6cm、器高1.3cm、底径8.0cm。底部には板目压痕が残る。129は土器の転用品で土製円盤。2.0×2.2×1.0cm。130は土錘。長さ4.4cm、断面径9.5cm。131は滑石製の紡錘車。石鍋の転用品。残長3.8cm、孔径1.0cm、厚さ1.0cm。132は黒曜石の剥片。長さ3.2cm。

Fig.22、23の146～148は第2層出土遺物。133、134は白磁碗。復元口径13.8cm、器高3.5cm、復元底径5.2cm。内面には櫛描文が施され、灰白色的胎土で内外面に灰白色釉がかかるが、外面底部付近は露胎となる。134は復元口径16.0cm。外面にヘラ描きの繩文が施され、内外面に釉がかかる。口縁部外面に太めの凹線が巡る。135は白磁壺の底部。復元底径7.2cm。底部外面にヘラ描きで曲線が描かれる。内外面に釉がかかるが、底部外面は露胎となる。136は越州窯系青磁碗。口縁部は輪花を呈し、復元口径13.4cm、器高5.8cm、復元底径6.6cm。内面から外面上半まで釉がかかり、外面下半は露胎。見込み内面に胎土目跡が残る。底部はやや上底。灰オリーブ色を呈する。137は黒色土器碗の底部。高台がつく。内外面はミガキ調整で内面が黒色を呈する。138～141は土師器壺。138は復元口径16.8cm。口縁部付近に穿孔がある。139～141は高台がつく。139は復元口径11.2cm、器高4.8cm、高台径7.6cm。140、141の高台径は7.6cm、7.4cm。142、143は土師器の櫃。142は復元口径23.0cm。把手がつき、外面はハケメ、内面はヘラケズリの調整がなされる。143は櫃の底部。復元底径は14.8cm。外面はハケメ、内面はヘラケズリの調整がなされる。144は須恵器壺。復元口径12.8cm、器高3.0cm。外底は回転ヘラケズリ。145は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器の甕の頸部。内外面ともにハケメ調整がなされ、頸部には刻目が入った突帯が巡る。146は竈の底部付近。外面にハケメ調整がなされる。147は土錘。長さ11.0cm、幅4.5cm、重さ39g。縱方向に紐掛けの溝が巡る。148は鉄釘。土器片が付着する。

149～160は調査区の壁から出土した遺物。149～151は白磁碗。149は復元口径11.4cm、器高4.4cm、底径4.2cm。内面及び外面上半に透明釉がかかるが、胴部下半から底部は露胎となる。灰白色を呈する。轂筒底を呈する。150は復元口径17.2cm、器高5.9cm、底径7.2cm。内面及び外面上半は透明釉がかかり、胴部下半から底部にかけては露胎となる。口縁部は玉縁。151は復元口径15.6cm、器高7.4cm、底径5.8cm。外面には縱櫛目文が巡る。口縁部は外反する。152は白磁壺の口縁部。復元口径17.8cm。内外面ともに施釉される。153は越州窯系青磁碗。灰白色的胎土に灰オリーブ色の透明釉がかかるが、底部付近は露胎となる。高台と見込み内面に胎土目が残る、154～156は青磁碗。154は復元底径6.0cm。灰白色的胎土で、疊付まで灰オリーブ色の透明釉がかかる。見込みに崩れた花文が線描きされる。155は復元底径6.5cm。灰白色的胎土で灰オリーブ色の透明釉がかかるが、外底は露胎となる。内面にヘラで施文がされる。156は越州窯系青磁碗。復元底径4.4cm。灰白色的胎土にオリーブ色透明釉が胴部までかかるが、疊付と外底は露胎となる。157は同安窯系青磁皿。復元口径10.9cm、器高2.0cm、底径5.0cm。灰白色的胎土で胴部上半まで緑灰色釉がかかるが、胴部下半から外底は露胎となる。見込みには櫛

描文が施される。158は黒色土器の碗底部。復元口径9.1cm。内面はヘラミガキが施され、内面は暗褐色、外面は明褐色を呈する。159は土師器碗。復元口径15.8cm、器高5.8cm、底径9.4cm。にぶい橙色を呈する。160は土師器の甕。復元口径16.0cm。内面にはハケメ調整がなされる。黒色を呈する。

Fig.24は矢板掘削部の立会調査で出土した遺物である。161～163、165、166は白磁碗。161は高台径6.0cm。見込みに櫛描文が施され、外底には墨書が見られるが、文字は不明。花押か。灰白色胎土にやや灰色の釉がかかるが外底は露胎となる。162は底径6.8cm。黄白色胎土に灰色の透明釉がかかる。見込みは釉を輪状に搔き取り砂目跡がつく。外底に墨書がある。「木□」。163は底径6.0cm。白色胎土に灰色の釉がかかる。外底は露胎。見込みに櫛描文が施される。165は底径6.1cm。淡灰色の胎土に灰色の釉がかかる。外底は露胎。低い高台。「李」の墨書がある。166は底径6.0cm。白色胎土に灰色の釉がかかる。外底は露胎。見込みに沈線が巡る。口縁部は外反する。164は龍泉窯系青磁碗。灰色胎土に暗緑色の釉がかかる。外底は露胎。器壁には鏡蓮弁文が施文される。

167は黒色土器の壺。高台がつく。復元口径15.9cm、器高5.5cm、底径6.3cm。器壁内外面ともにミガキ調整がなされ黒色を呈する。168は瓦器碗。底径6.2cm。器壁内面はミガキ調整がなされ、黒色～橙色を呈する。

169～171は土師器壺。口径13.0、12.4、12.2cm、器高2.5、2.6、2.5cm、底径9.6、9.0、9.8cm。169、170は底面に板压痕が見られる。172～174は土師器皿。口径9.8、9.2、7.4cm、器高1.4、0.9、2.0cm、底径8.5、6.6、4.6cm。172、173は板压痕が残る。175は須恵器壺。復元口径10.8cm、器高3.9cm、復元底径7.6cm。内面に赤色顔料が薄く付着している。

176～179は表土剥ぎ中から出土した。176、177は龍泉窯系の青磁碗。176は復元口径6.4cm。見込みに唐草文様のヘラ切りの文様、櫛描文が施される。灰茶褐色の胎土に茶を帯びた緑色釉がかかる。外底は露胎となる。177は底径6.4cm。灰色の胎土に灰緑色釉がかかり、外底は露胎となる。見込みに唐草文様のヘラ切り文、櫛描文が施される。178、179は滑石製の石鍋の転用品。いずれも石鍤として用いられたと思われる。

3) 小結

5区は調査区の大半が井戸の掘方で占められた。掘方底面で井筒が数基確認されたが、切り合は明確に確認されなかった。

もっとも古い時期は弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が出土しているが、遺構は確認されていない。越州窯系の青磁碗、9世紀代前後の須恵器が出土している土坑(050066、050067)が遺構としては最も古いと思われる。土坑050112は11世紀後半～12世紀前半。井戸050018は上層に遺物が廃棄された状態で検出されたが、大半は11世紀後半～12世紀前半の遺物である。12世紀中ごろの遺物も含まれているため、井戸の存続はその時期まで下ると思われる。また、鬼瓦片が出土した土坑050039は近世まで下る可能性がある。遺物としては近世の所産のものも見られる。

以上、当該調査区は主な時期は9世紀代から12世紀まで、下って近世の生活遺構が確認された。

7. 6 区の調査



Ph.1 6区調査前周辺状況（西から）



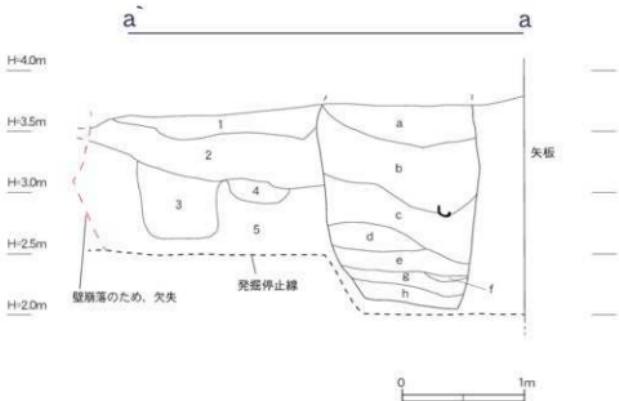
Ph.2 6区調査前状況（東から）

1) 調査の経過

6区は5区より約8m東、10区とは1m程度の間隔を隔てて南に位置する。調査は2014年12月12日～2015年1月31日の間行われた。

Fig2、22、26のように、調査区は1面で現代の搅乱、2面3面では後述するSE060060を挟んで東西に分断されているため、以後これらを境界としてそれぞれ東側、西側と記す。東側は矢板同士が狭まる形状で、整地面は平面上わずかに残るのみである。6区調査着手当初掘削に廃土置き場となる場所の確保が困難だったこともあり、12月12日～12月25日までは調査区東側の遺構検出、写真、図化、掘り下げを行った。調査区東側では遺構は不定形土坑、ピット計30基を検出したほか、遺物については部位不明の陶磁器、土師器小片が出土したが、以降の残存状態が悪く時期の特定は不可能であった。

調査区東側完掘後年が明けて翌1月8日に搅乱を挟んで調査区西側の調査着手以降は、調査済みの東側を排土置きとした。西側は東側と比較すると遺構・遺物の残存状況は良好で井戸、土坑、ピット計59基を検出した。1月29日西側3面目の整地面完掘後、整地層である砂丘を約1m掘り下げたが、遺構・遺物は全く検出されなかったため、3面以下は地山であると判断した。よって3面の調査を以て6区は調査を終了した。調査面積は延べ36m²を測る。



1. 赤褐色粘質土

しまり、粘性ともに強い。
第1面積地層。

2. 暗赤褐色砂質土

1と比べてしまり、粘性ともに弱い砂質。
不連続の範囲に褐色土が埋蔵する。
第2面積地層。

3. 暗褐色砂質土

しまり、粘性ともに弱い。
SK060076理上。

4. 黄灰色混じり 暗褐色砂質土

しまり、粘性ともに弱い。
SK060078理上。

5. 黄灰色砂質土

地山。しまり、粘性ともに無し。
遺物を含まない。

a. 暗褐色粘質土

しまりは強く、粘性ともに強い。
SK060040理土1層。

b. 黑褐色粘質土

aに比べてしまり、粘性ともに
やや劣る。SK060040理土2層。

c. 黒色混じり

暗黒褐色粘質土

しまりはややあるが、粘性は弱い。
白磁片を含む。SK060040理土3層。

d. 暗褐色粘質土

しまりは弱いが、粘性は強い。
SK060040理土4層。

e. 黄灰色砂混じり暗褐色粘質土。

地山とSK060040理土の混じり。
しまり、粘性は強め。SK060040理土5層。

f. 黑色粘質土

炭化物が土と同化したものの、
しまりは弱く粘性強い。SK060040理土6層。

g. 褐色砂質土

しまりはややあるが、粘性はきわめて弱い。
シカ・クソ等の動物骨片を多く含む。
SK060040理土7層。

h. 黑色混じり黄灰色砂質土

地山と同じくしまり、粘性は無い。
黒色の焼成ブロック約2~3cm厚で点在し、
ブロック内から土脱離、白磁片が出土した。
SK060040理土8層。

Fig.1 6区南壁西側SK060040付近土層断面図 (S = 1/40)

2) 基本層序 (Fig.1)

地表面の標高は西壁付近で 4.68m、東側で 4.48m であり、概ね標高 4.0m (GL-70cm) までは路盤のアスファルト及び真砂、3.7m (GL-100cm) までは近代～近世の瓦や陶器を多く含む暗茶褐色粘質土～暗褐色粘質土である。概ね以上の土層を調査前に重機ですき取った。その後おおよそ標高 3.7m ~ 3.4m 前後 (GL-100 ~ 130cm) において中世遺物を含む赤褐色粘質土の整地層を検出し、これを 1 面とした。統いて標高 3.4m ~ 2.9m 前後 (GL-130 ~ 180cm) において暗茶褐色粘質土の整地層を検出し、これを 2 面、標高 2.9m 前後 (GL-180cm) において黄灰色砂質土の整地層を検出し、これを 3 面とした。

先述の通り上部の削平が著しかったこともあり、本調査の周辺区画では整地面を5面検出しているところが多いが、6区において確認できたのは3面である。製地面の基本層序については、特に中央～東側の整地面の残存状況が不良であったことと、北壁および西壁側で遺構が集中していたため、整地層を反映できる地点が限られていた。Fig.1は南壁側の西側において整地層が残存していた部分を図化したものである。

3) 1面の調査 (Fig.2～21 Ph.3～16)

1面目は赤褐色粘質土を基盤とし、ピット11基、土坑23基を検出した (Ph.3 Ph.4)。第1面で出土する遺構は上端からの深さが1mを超すと予想される遺構が複数存在した。これらについては一気に最下部まで掘り下げると転落や土砂崩落の危険が高いため、周囲の記録と整地面掘下げを並行しながら段階的に掘り下げ、周囲との高低差を抑えながら掘削した。



Ph.3 6区1面西側全景（南から）



Ph.4 6区1面東側全景（南から）

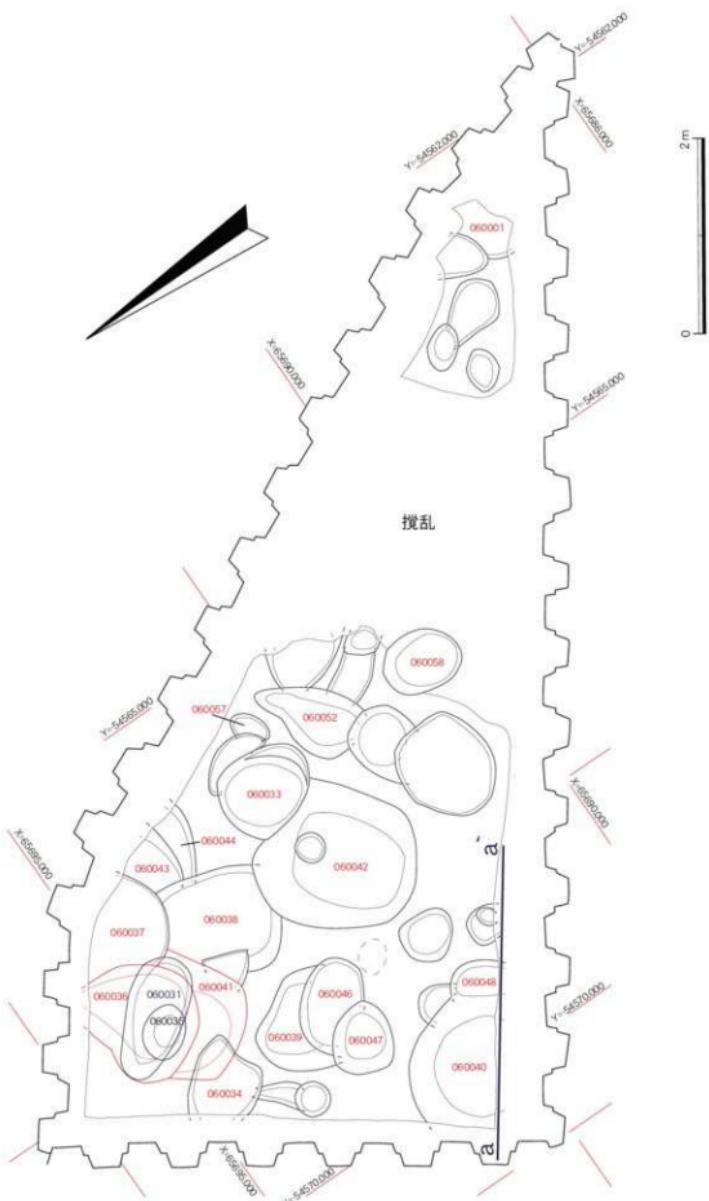


Fig. 2 6区1面平面遺構配置図 (S=1/50)

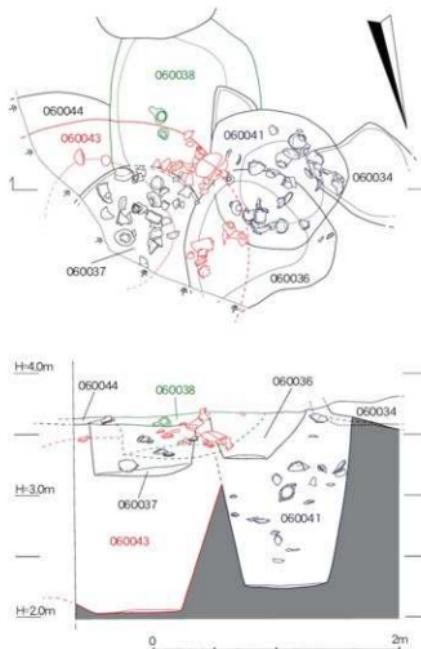


Fig. 3 SK060036、SK060037、SK060038、SK060041、SK060043、SK060044実測図 (S = 1/40)

(1) 1面検出遺構

土坑

SK060036、SK060037、SK060038、
SK060041、SK060043、SK060044 (Fig.3)

Ph.5) 6区北西隅付近1面から検出した土坑群であり、きわめて複雑に切りあっている。特に遺構の上部では何度も切り合いを受けたためか遺構の境界が極めて不明瞭であり、残存状態は良好でない。切り合いについて、現場では SK060044 → SK060043 → SK060038 → SK060041 → SK060037 → SK060036 という順序で掘削されたものとして考えていたが、遺物を精査する同一の個体が複数遺構から散乱状態で出土する例もあり、埋没後埋土が混じり合った結果、これら遺構の境界が不明瞭になったとみている。後述の遺物から、時期はいずれの遺構も 11世紀後半～12世紀前半にかけてとみられる。

また、Fig.2にあるSK060031、SK060034、SK060035は先述の土坑群より10cm程度上面で検出した深さ30cm程度の小土坑であり、先述の土坑群がすべて埋没した後に掘削してきたものである。



Ph.5 SK060036、SK060037、SK060038、SK060041、SK060043、SK060044 遺物出土状況
(北西から)

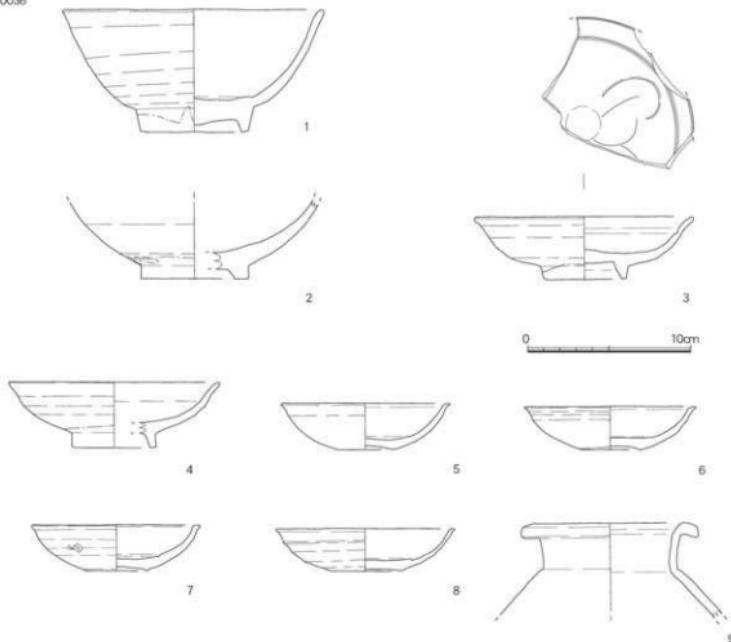


Fig. 4 SK060036出土遺物実測図① (S=1/3)

出土遺物 出土遺構ごとに記述していく。遺構の切り合いについては、先述したように遺構の境界が不明瞭なものや、同一の個体が複数遺構から出土したものなどが多いため、順序を入れ替わる可能性もあることを最初に断っておく。

SK060036出土遺物(Fig.4~5 Ph.6) Fig.4-1 ~ 4は白磁碗。1は底部付近で破片が出土したが、6区矢板敷設に伴う立会(以降矢板立会と記述する。詳細は後述の(7)6区矢板敷設に伴う立会報告を参照)に検出した土坑⑥-2、⑥-3において同一個体片が出土し、接合している。接合後口縁部の一部欠失を除きほぼ完形。体部はやや内済気味だがまっすぐ立ち上がり、口縁端部がごくわずかに外反する。V-1a類か。11世紀後半~12世紀前半頃。

2は体部下半~高台にかけての破片を回転復元したもの。II類か。11世紀後半~12世紀前半。高台部外面は垂直に、内面は内傾に削り出している。

3(Ph.6)、4は浅形の碗でVI類か。3はヘラ描きの草花文様を施す。内面体部に3は段1つ、4は沈線一つ、高台は外面直立て内面を斜めに削っている。3は高台の削り出しが深い。4は口縁~高台上にかけて1/3程度残存の破片。時期はともに11世紀後半~12世紀前半頃か。

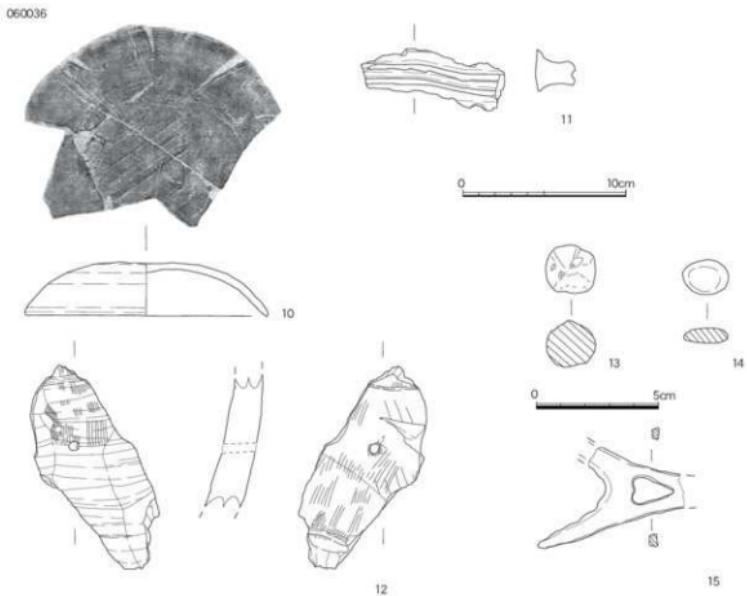


Fig. 5 SK060036出土遺物実測図② (10~12はS=1/3、13~15はS=1/2)

Fig.4.5～8はいずれも白磁皿V類。11世紀後半～12世紀前半頃。うち5、8は底部付近の出土。5は口縁～体部1/5、底部3/5程度の残存。内面見込み部に段1つ巡る。外面内面共に一部磨滅し、黒色～褐色の砂粒子が付着する。

6は口縁～体部1/3程度、底部は完形で残存。底部は時計回りの回転ヘラケズリを施しており、その際底部の施釉を搔き落としたとみられる。体部下半部において施釉が及ばないところがある。内面見込み部に段1つ巡る。

7は口縁～体部1/3程度、底部1/2程度残存。体部外面に施釉後焼成時に付着したとみられる砂粒が一部確認できる。底部施釉後搔き取り。底部付近外面をごくわずかに削り、底部を突き出す。

8は接合後口縁～体部2/3程度残存、底部は完形で接合した。底部施釉後搔き取り。

9は壺か。口縁部～頸部付近の体部上半まで1/4程度の破片であり、器種形式は不明。頸部のくびれから直口に立ち上がり、口縁部は逆L字状に外反する。やや縁がかった茶褐色の釉を施し、そのうち口縁上端部は釉をふき取っている。外面頸部屈曲部においては釉が沈殿し、暗緑褐色を呈しこれが巡っている。内面をみると外面と同じ色の施釉が施されるが、体部以下をみると二重に塗られていることが分かる。

Fig.5-10は土師質の蓋。外面は回転ナデのち天井部に板状のあて具痕あり。

11は不明土製品(Ph.6)。円筒埴輪の貼付け突帯に形状が似ているが、円周状に巡っていたにしては突帯が直線的に伸びており疑わしいため、不明としておく。

12は滑石製石鍋片の一部である(Ph.6)。中央付近に径0.5cm程度の精巧な穿孔が施されている。転用途上品か。

13は用途不明の土玉。手づくねで成形されており、穿孔の跡はない。この実測図作成後、整理中の不手際で報告書刊行現在所在不明になっており捜索中である。ご容赦いただきたい。

14は轡石(Ph.6)。にぶい茶褐色を呈する。楕円の形状は使用時の磨滅か。

15は埋土下部から出土した古墳時代の雁股式鉄鎌片(Ph.6)。他のSK060036出土遺物と比べ時代が古いが、後世の土地改変の際に掘り起こされ、埋土中に混在したものとみられる。

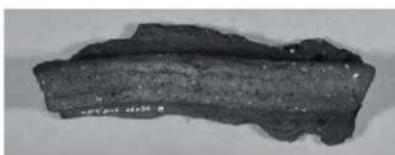
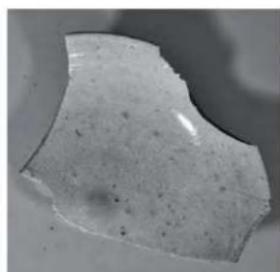


Fig.5-11

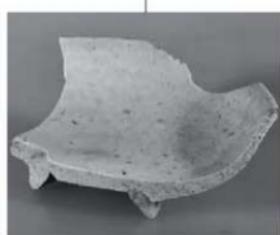


Fig.5-14

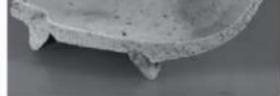


Fig.5-3



Fig.5-15

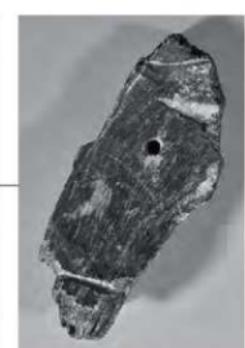
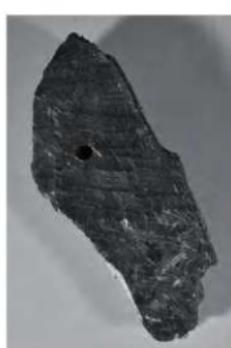


Fig.5-12

Ph.6 SK060036 出土遺物

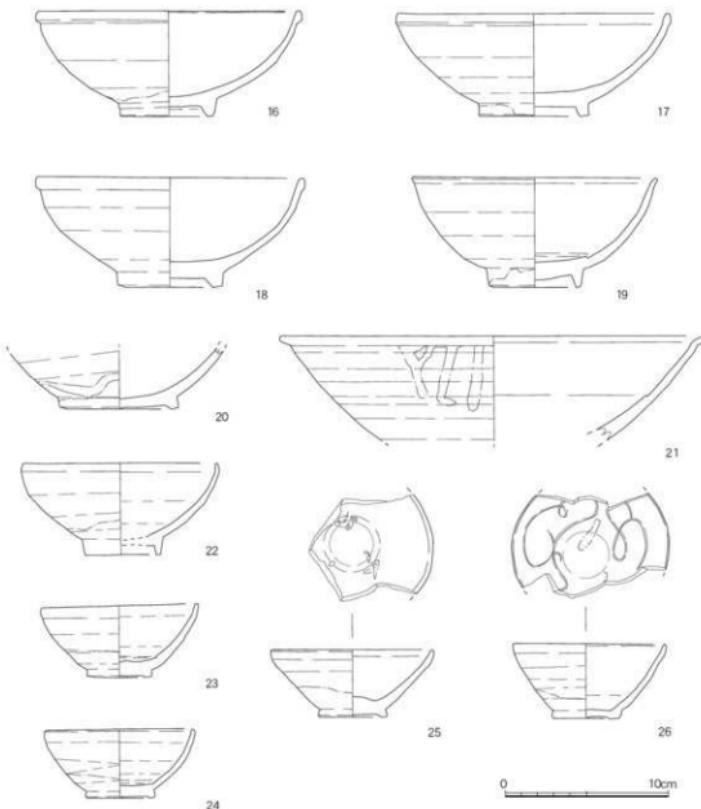


Fig. 6 SK060037出土遺物実測図① (S=1/3)

SK060037 出土遺物 (Fig.6 ~ 7 Ph.7) Fig.6-16 ~ 22 は白磁碗。このうち 19、22 は矢板掘削時の廃土から発見した破片と接合している。

23 は SK060038 との破片の接合。24、26 は矢板掘削時に検出した土坑⑥-3 出土の同一個体片と接合した。

16 ~ 18 はⅡ類か。11世紀後半~12世紀前半。高台は外面を垂直に、内面を斜めに削る。体部は内湾し、垂直方向に立ち上がる。いずれも口縁部は小さめの玉縁。

16、17 は体部下から高台にかけては施釉していない。16 は接合後口縁部 1/3、体部 1/2 程度、高台部は完形で残存。17 は口縁部~高台部にかけて 1/2 程度の残存。

060037

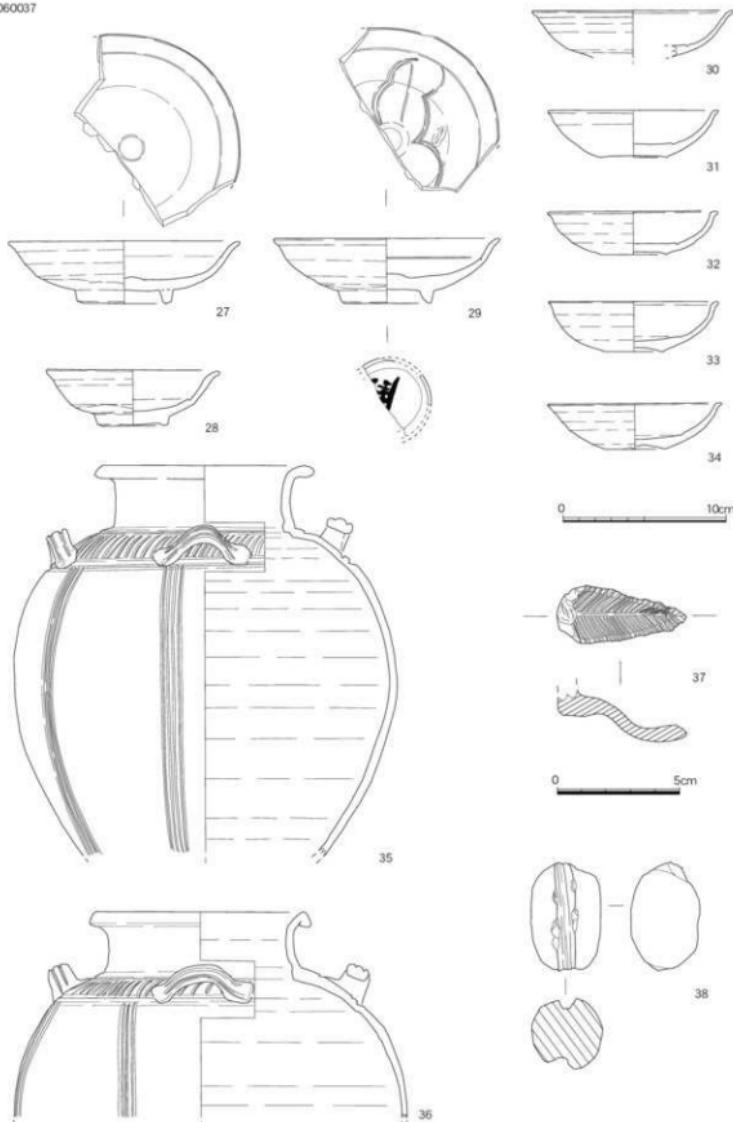


Fig. 7 SK060037出土遺物実測図② (27~36、38はS=1/3、37はS=1/2)

Fig.6-18は口縁部～体部1/3、高台部は完形で残存。内面に施釉時に付着したとみられる0.5～2mm大の粒子がまばらに見える。

19はV-2a類。接合後口縁部～体部1/6、高台部2/3程度の残存。高台は細く直立し、口縁部はわずかに外反する。見込みに段一つ巡る。11世紀後半～12世紀前半。

20は口縁部～体部上半は欠失、高台は完形で残存。高台は低い輪状で内側は斜めに削り出している。体部に施釉されるが、釉の塗重ねが及んでいない部分もある。体部下～高台にかけては施釉なし。

21はV類か。口縁～体部1/6以下の破片、口縁径は回転して約26cmと推測される。口縁部は内外ともに鋭い稜を境に屈折している。口縁から体部にかけて一部釉がただれる。

22は接合後口縁～体部1/2、高台3/4程度の破片で底部一部欠損。高台は直立しており、高台裏の削り出しが外面と比べて浅い。底部は底部中心にかけて器厚が薄くなる。体部は下半が直線的だが、上半で稜線を境に内傾して立ち上がり、口縁が内湾する。

23～26は白磁の小碗。高台は極めて浅く削り出す。体部上面において内湾しながら垂直に立ち上がる。口縁部から体部上半にかけて施釉し、体部下半以下は釉を搔きとどており、無釉である。

23～25はV-1a類。23は接合後ほぼ完形。高台裏に付着時不明の砂粒がこびりつく。見込みに沈線が1つ巡る。24は接合後口縁部の一部欠失を除き、ほぼ完形。25は口縁部～体部1/4、底部は完形で残存。内面中心が盛り上がっており、器厚が厚い。見込み周縁部に金属錯のような褐色粒子がこびりついている。

26は接合後口縁部～体部1/4、高台部完形で残存。内面にヘラ書き文を施しており、V-1c類か。

Fig.7-27～29は白磁碗VI類と考えられる。11世紀後半～12世紀前半。27、29は体部内面に沈線を巡らし、内面中心は円形の隆起を施す。高台は外面、内面、底面とともにやや斜めに削りだしている。見込みは27が無文、29はヘラ書きで草花文を施す。また29は高台裏に漢字と思しき墨書がある(Ph.7)が、破片のため判読ができない。28は見込みの周りに段を1つ施す。高台は外面、底面をやや斜めに削りだしており、高台裏の削りだしは浅いため、厚底である。施釉は27、28、29ともに口縁部～体部上半にかけて施し、体部下部及び高台は釉なし。

30～34は白磁皿で11世紀後半～12世紀前半。いずれも見込みに段が巡る。32はSK060043出土の破片が接合している。30はV-1a類。口縁部～底部付近にかけての破片で底部は欠失している。口縁部は外反する。31、32、33、34はV-2a類。30に比べ立ち上がりの内湾が強く、口縁部は横に嘴状に屈折する。底部は外面が上げ底である。

35、36は白磁四耳壺II類(Ph.7)。11世紀後半～12世紀前半。35はSK060035、SK060036、SK060037、SK060041の境界部に破片が散在しており、SK060042、SK060070からも同一個体片が出土した。接合後口縁部～頸部は完形、体部上半2/3～3/4程度、体部下半は1/3程度の残存、底部は欠失している。外面内面ともに施釉されるが、内面は体部上半において一部釉が薄い。36はSK060036、SK060037、SK060041にかけて破片が散在し、さらにSE060060埋土中からも同一個体片が見つかった。接合後口縁部～頸部は2/3以上、体部上位1/6～1/4程度の残存で体部下半～底部は欠失している。施釉は外面及び内面の口縁部～頸部にかけてのみで内面体部は施釉なし。

37は不明白磁製品(Ph.7)。羽状に放射する文様が刻まれており、根本とみられる幅広の部分には破断面が確認できる。装飾部位片などが考えられる。

38は土鍾。U字状に抉った緊縛溝が梢円長径方向に一周する。



Fig. 7-35

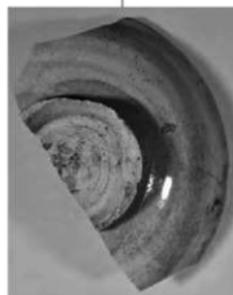
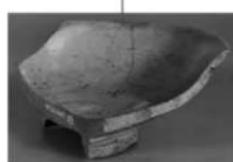
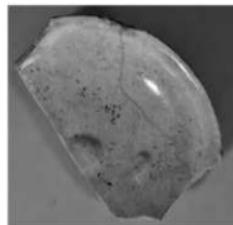


Fig. 7-29



Fig. 7-36

060038

Ph.7 060037 出土遺物

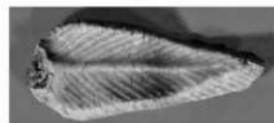


Fig. 7-37

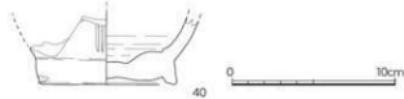
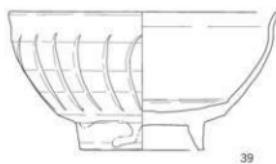


Fig. 8 SK060038出土遺物実測図 (S=1/3)

SK060038 出土遺物 (Fig.8) Fig.8-39 は白磁碗XII類。11世紀後半～12世紀前半。口縁部は鈍角に外反する。体部外面に縱方向のヘラ描き文様がほぼ均等にめぐる。内面見込み外縁に沈線状の太い段あり。高台は高く直立状だが、内面は高台裏付近を除いて斜めに削られており、その境界は明瞭な稜をもつ。

40 は器種不明磁器。底部から高台部のみ残存。高台の削りは浅く、高台外部の削りだしは斜めに非対称の形状で削られている。残存する体部は高台付近でやや丸みをもつが上方への立ち上がりが著しい。外面にヘラ描きで縱方向に2本の沈線がはしる。器種は不明だが、先述の器形から壺などの可能性がある。

SK060041 出土遺物 (Fig.9～11 Ph.8) Fig.9-41～53 はいずれも白磁碗である。

41 は口縁～体部にかけての破片を回転復元。口縁～体部上半にかけての破片。口縁がやや小さめの玉縁であり、体部外面下部は軸を搔き落としている。IV類か。11世紀後半～12世紀前半。

42 は口縁1/3、体部1/2程度の残存で高台は完形。小さな玉縁状の口縁を持つ。体部内面の一部が磨滅し、黒茶褐色の粒子が付着している。高さ0.8cm程度の高台が外面は垂直に削り出され、内面は斜めに削り出している。II-1類で11世紀後半～12世紀前半頃か。

43 は口縁～体部上半にかけての小片を回転復元したもの。口縁端部がやや小さな玉縁状。体部内面が一部磨滅し、黒茶褐色の粒子が付着している。II-1類で11世紀後半～12世紀前半頃か。

44 はSK060036 底部付近から出土した破片と接合後、口縁1/6、体部～高台1/2程度の残存。口縁端部がやや小さな玉縁状。高さ0.8cm程度の高台が外面は垂直に削り出され、内面は斜めに削り出している。II-2a類で11世紀後半～12世紀前半頃か。

45 はV-3a類か。11世紀後半～12世紀前半頃。SK060036とSK060041において出土した破片を接合したもので、口縁は1/4以下、体部は1/4～1/2、高台は完形で接合した。口縁端部が小さく外側に嘴状に尖り、上端は水平で内面側との境目に稜がつく。外面体部下半において施釉前に浅い刻目のような線が削り方向とは垂直方向に巡るが、削りの際の當て具跡か。高台は直立しているが高台裏の削り出しが浅く、底部の器厚が厚い。体部内面の一部が磨滅し、黒茶褐色の粒子が付着する。

46 は体部下半～高台にかけての破片を回転復元したもの。II類か。11世紀後半～12世紀前半。高台部外面は垂直に、内面は内傾に削り出している。

47 は体部下半～高台にかけての破片で、高台は一部欠失しており、V類と比べると低い形状である。高台内面は斜めに削られており、その境界は明瞭な稜を形成している。

48～52 はXII-1b類。端部は鈍角に外反する。内面見込み周辺に段が1つ巡る。体部外面にヘラによる文様が縱方向に均等間隔にめぐる。11世紀後半～12世紀前半。

48 はSK060037 出土の小片と接合している。

51 はSK060036、SK060037 から接合する同一個体片が出土しており、接合後口縁部～体部3/4、底部はほぼ完形で残る。口縁部が鈍角に外反する。体部外面に縱方向のヘラ描き文様が均等にめぐる。高台内面が斜めに削られる。

52 は高台裏に墨の付着らしき痕跡が見受けられたが、器面が磨滅していることもあり詳細不明。

53 は体部下半～高台にかけて1/2程度の破片。内面見込み外縁に沈線状の太い段あり。高台は高く直立状。高台内面が斜めに削られており、その境界は稜を形成している。

060041

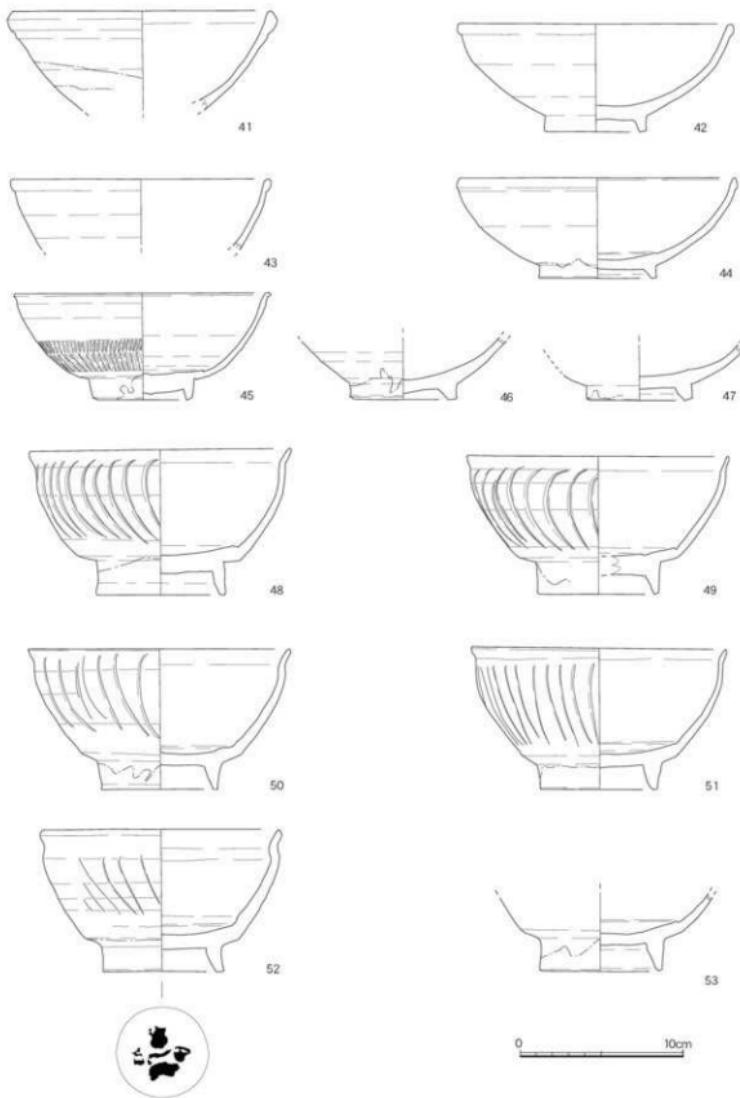


Fig. 9 SK060041出土遺物実測図① (S=1/3)

060041

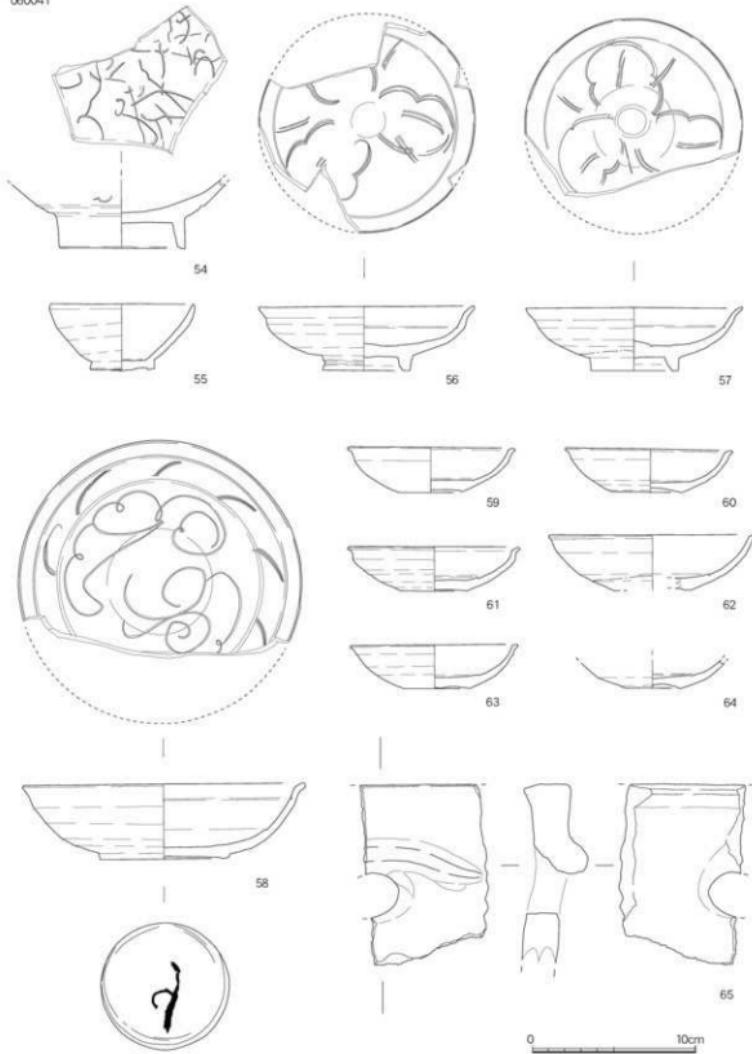


Fig. 10 SK060041出土遺物実測図② (S=1/3)

Fig.10-54～58は白磁碗。54は掘り方付近の出土。高台付近1/2程度の残存。高く直立する高台をもつV類か。不定方向に線彫りした文様を施す。11世紀後半～12世紀後半頃。

55は小碗でV-1a類に相当か。破片の一部がSK060035の掘り方付近からも出土しており、接合している。接合後一部口縁～体部が一部欠失するがその他は完形に近い。高台は極めて浅く削り出す。

56は器高が低い浅形の碗(Ph.8)でVI類か。SK060036、SK060037、SK060041から出土した破片を節合したものである。ヘラ描きの草花文様を施す。内面体部に沈線一つ、高台は外面直立て内面を斜めに削っている。11世紀後半～12世紀前半。

57は浅形碗(Ph.8)。VI類か。ヘラ描きの草花文様を施す。内面体部に沈線一つ、高台は外面直立て内面を斜めに削っている。

58は浅形碗。器形が体部下半に丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がり口縁部はわずかに外反する。蛇ノ目程明瞭ではないが、高台がわずかにある。これらの形状は白磁皿V類またはVI類の形状に似るが詳細な分類判別は不明。体部内面上半に沈線、下半に段を巡らす。高台裏には墨書の痕跡があるが、磨滅著しく判読不能。内面に一定間隔で二条の櫛描きおよび、見込み部に花文状のヘラ描き文を施す。

Fig.10-59～63は白磁皿V-2a類。11世紀後半～12世紀前半。

59は口縁～体部2/3程度、底部完形で残存。内面見込み部に段1つ巡る。底部は時計回りの回転ヘラケズリを施しており、その際底部の施釉を搔き落としたとみられる。

60は口縁～体部が接合後2/3程度、底部は当初より完形で残存。底部施釉後搔き取り。

61は内面見込み部に段が1つ巡る。接合後口縁～体部2/3程度、底部1/2程度残存。底部施釉後搔き取り。

62は口縁～体部1/4以下、底部は底面の縁付近が1/5程度の破片。内面見込み部に施釉後付着したとみられる砂粒が確認できる。体部下半部において施釉が及ばないところがある。

63は底部付近の出土。口縁～体部2/3程度、底部は完形で残存。外面体部および内面見込み中心付近に一か所ずつ施釉後焼成時付着したとみられる砂粒が確認できる。底部施釉後搔き取り。

64は白磁皿V類か。体部下半～底部のみの残存。外面底部は上げ底状。外面、内面共に施釉されるが外面底部は釉を搔き落としたとみられる。見込み部に段1つ巡る。11世紀後半～12世紀前半頃。

65は不明土製品(Ph.8)。底部付近から出土。厚みが2～3cm程と厚手であり、破片であるが上部は生きており、平坦な形状をしている。

Fig.11-66は砥石片か。石材は1/10以下の微小な空洞をまばらに含み、泥岩質と思われるが、正確には不明。黒色タール状の付着物あり。

67は滑石製石鍋片。内面に不定方向の刻み目があり、上の一邊は溝状に切り出すことで切断したと考えられる痕跡があることから、転用途上の破片である可能性あり。

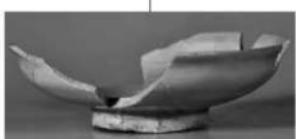
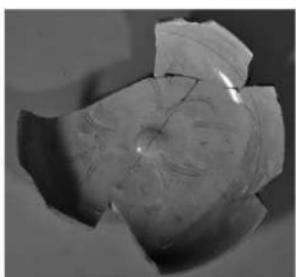


Fig.10-56

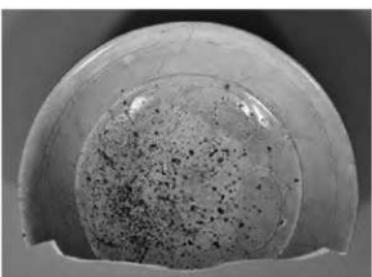


Fig.10-57

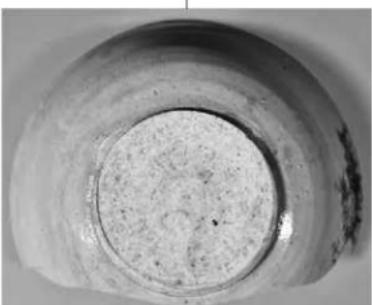


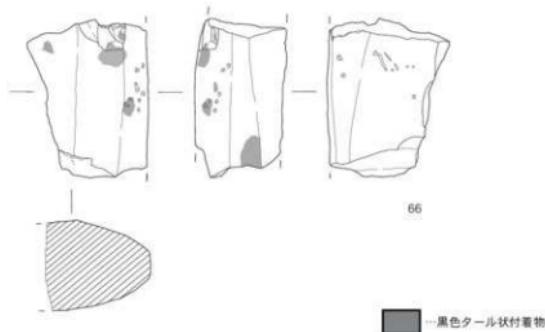
Fig.10-58



Fig.10-65

Ph.8 060041 出土遺物

060041



0 5cm

060044

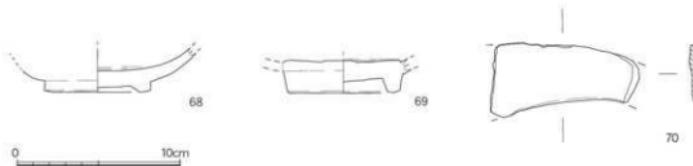


Fig.11 SK060041出土遺物実測図③、SK060044出土遺物実測図
(66、67、70はS=1/2、68、69はS=1/3)

SK060044 出土遺物 (Fig.11) Fig.11-68は体部下半～高台にかけて残存。高台は低く、高台内面が斜めに削られる。体部下半～高台にかけては施釉なし。

69は底部、高台部のみの残存。高台は外面、内面ともにやや斜めに削りだしている。内面底部は施釉なし。外面高台部は施釉なし。

70は不明板状鉄片。形状から鎌の刃部の可能性がある。

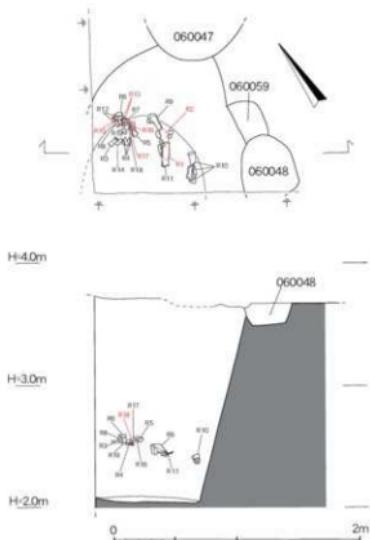


Fig. 12 SK060040実測図 (S = 1/40)



Ph.9 SK060040 獣骨出土状況 (南から)

SK060040 (Fig.1、12 Ph.9 ~ 11) 調査区南西隅付近南壁沿い1面から検出した土坑である。標高3.6~3.7m付近で検出し、底部は標高2.0m付近まで下がる。土坑は調査区では完全には検出されず、南に向かってのびていく。後述する矢板掘削立合い時に検出したFig.29の⑥-14、⑥-28、⑥-23などは、同一遺構であった可能性が高い。

また、検出面から深さ110~150cmの範囲（標高2.6~2.2m）で獣骨が集中して出土した（Ph.9~11）。残存状況が悪く、埋没した経緯状況は不明であるが、同一遺構でも平面、深さとも近い範囲で分布しており、ほぼ同時に埋められたとみてよい。なお、獣骨の種別・部位および埋没状況に関しては福岡市埋蔵文化財課屋山洋氏による鑑定・教示を受けた。詳細は出土遺物の項目を参照。

埋土からは主に11世紀後半から12世紀前半の資料が出土している。土層はFig.1を参照。

出土遺物 (Fig.13 Ph.10・11) Fig.13-71、72、73は土師皿。

71は口縁部～底部にかけての破片で接合後1/2程度の残存。復元径で外径9.6cmを測る。底部ヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。

72は口縁部～体部1/3、底部完形で残存。復元外径9.3cm程度。底部はヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。

73は口縁部～底部にかけての破片で1/3程度の残存。復元径で9.3cmを測る。底部系切りで外面、内面共に回転ナデ。底部中央付近において、焼成前成形時に施したとみられる直径9mmの穿孔が確認される。

74は土師器の壊。口縁部～体部にかけて1/3程度、底部は3/4程度の残存。底部ヘラ切りで丸底。外面、内面共に回転ケズリのちナデ。

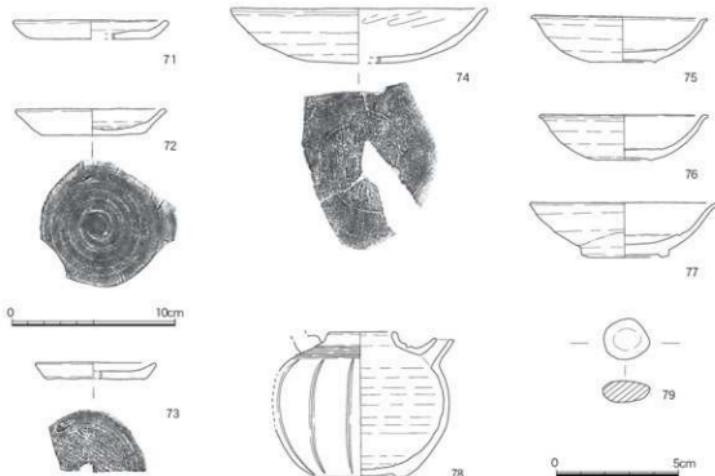


Fig. 13 SK060040出土遺物実測図 (71~78はS=1/3、79はS=1/2)

Fig.13-75は白磁皿V-2a類。口縁部～体部は2/3程度、底部は完形で残存。底部は上げ底で内湾氣味に立ち上がり、口縁部は外側に屈折する。底面は施釉後軸を搔き落とす。11世紀後半から12世紀前半。

76は白磁皿V-1a類。口縁部～体部は1/4程度、底部は1/2程度の残存。底部は上げ底。やや内湾氣味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底面は施釉後軸を搔き落とす。11世紀後半から12世紀前半。

77は白磁皿II-1a類か。SK060040の他、SE060060上部から同一個体片が出土し、接合している。接合後口縁部の一部欠損を除いてほぼ完形。高台は低く、口縁部はやや外反する。体部下半において段1つ巡る。11世紀後半から12世紀前半。

78は白磁の水注(Ph.10)。破片接合の結果、口縁部3/4程度、注口部完形、体部2/3程度、底部は完形で残存。注口部の反対側口縁部付近に把手と思しき欠損断面があるが、先の形状は不明。高台は高台内部のみ斜めに削り出し、外面は削らない。施釉については、外面は高台を除く全面に施し、内面は口縁部付近および注口付近のみ施される。

79は轆石(Ph.10)。黒褐色を呈し、使用による摩耗か平面はややいびつな円形状である。

SK060040 出土動物遺存体について（福岡市埋蔵文化財課 屋山 洋）

動物遺存体の取り上げについては篩を使った選別などは行っておらず、目視で検出した骨を取り上げたものである。動物種は数点魚類が出土した他は哺乳類で、同定できたものはウシとシカである（各獸骨の詳細は第4分冊に記載の「35. 第203次調査出土動物遺存体について」を参照）。

取り上げ後細片化した骨片には同定できなかったものもあるが、その中で出土状況を示した



Fig.13-78



Fig.13-79

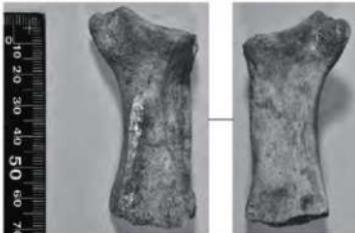


Fig.12-R3 (シカ右肩甲骨遠位部)



Fig.12-R8 (シカ左上腕骨遠位部)

Ph.10 060040 出土遺物・獣骨①

Ph.9 をみると、赤丸印い部の①と②は連結した状態で出土しているため、すべてウシと考えられる。①はウシの左側橈骨と尺骨に手根骨で Ph.9 では連結した状態であるが、写真撮影後の掘削中に周囲の土砂が崩落しており、その際に尺骨と手根骨は失われたため Fig.12 には記載されていない。②はウシの左側肩甲骨と上腕骨で肩甲骨は粉々になっているものの、写真からは連結した状態と推定される。赤丸印い部③は若干ウシ(ウマ)の骨が混じるものシカを主体とし、右側の肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨と続き、左側は上腕骨の遠位端関節部が 1 点含まれる。

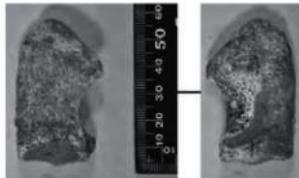
①と②は手根骨のような小さな骨まで連結した状態で出土しており、多少肉がついた状態で廃棄されたものである。③はまとまって廃棄されているものの、各骨が原位置を保っていないことや刃物により切断された骨があること、骨の割れ口がスパイラル状を呈し、解体後油が抜けきらない状態で割れていることから、廃棄後に土圧等で割れたのではなく、割れた後に廃棄したものと考えられる。3ヶ所以外からもウシ・シカの骨は出土しているが、ウシに関しては同定できた骨に重複がみられないこと、いずれも関節部が未癒着か癒着後まもない若い個体であることから同一個体の骨である可能性が高い。シカは上腕骨や橈骨に重複がみられるので、少なくとも 2 頭の骨を廃棄している。ウシ・シカとも出土部位は四肢がほとんどで、頭骨、椎骨、肋骨、寛骨などがほぼ見られない点は共通しており、これは内臓を含めた胴体部分は他所に持ち出されて消費されたためと考えられる。またウシとシカの骨を比べると、ウシは関節が連結する程度肉や筋が着いた状態で廃棄されているのに対し、シカは連結部を刃物で切断して細かく骨を割っている点に違いがみられる。これについては筋や腱の利用法に関してウシとシカでは違いがあった可能性があり、今後も資料の集積が必要である。



Fig.12-R9 (ウシ左上腕骨遠位部)



Fig.12-R10 (ウシ左桡骨近位部)



06040 底部付近より出土
(シカ左尺骨近位端)



Fig.12-R19
(シカ右上腕骨遠位部)

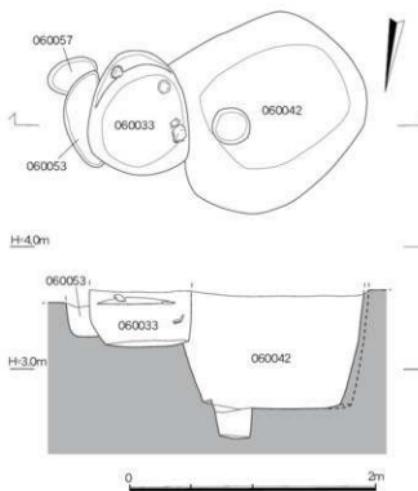


Fig. 14 SK060042、SK060033実測図 (S = 1/40)

界は丸みを帯びている。外面の器面について 81 は微かな稜を持ち 82 は滑らかな屈曲のみである。

83、84 は瓦器碗。

83 は口縁部～高台にかけての破片で口縁部～体部 1/6 程度、高台部は完形で残存。器種は瓦器碗だが焼成が付く、色調は外内面共に口縁部付近は黒褐色、体部～高台にかけては色調が黄灰色を呈する。傾斜する低い貼り付け高台。体部外面は指頭圧痕がまばらにみられるが直口縁をなす口縁部付近ではナデ消されている。内面は摩耗しており、調整は不明。

84 は体部下～高台にかけて 1/3 ～ 1/2 程度の残存。傾斜著しい貼り付け高台。調整はナデだが、内面見込み部に指オサエの痕跡あり。

85 は口縁部～体部上半にかけて 1/4 程度残存する破片。白磁碗 II -5 類もしくは IV 類か。長く扁平な玉縁口縁をもつ。体部外面上半まで施釉を施し、下半は釉なし。11 世紀後半～12 世紀前半。

86 は器種不明白磁 (Ph.12)。破片のため全体の形状は不明であるが、上端は扁平で明瞭な稜をもつなど生きており、口縁とみられる。また下部は明瞭な稜をもちながらくびれ、下部につながっていたと考えられる。外面は横方向の沈線を上下 2 条ずつ巡らせた後、ヘラ描き文様を施す。また残存する外面の中央からやや上部において、多角形上の孔が施され、その後施釉されている。内面は滑らかにナデを施すのみで口縁端部付近を除き施釉なし。

87 は小型の水注片か。口縁部～体部上半にかけて 1/2 程度の残存。口縁付近に沈線状に段 2 つ巡らし、のちに体部にかけて縦方向に沈線を間隔おき巡らす。外面のみ施釉。

88 は器種不明土師器。上面が欠失しており、内面の上部はしぶり痕があるのみで調整なし。土師器の高杯くびれ部の破片とも考えられる。

SK060042 (Fig.14) 調査区中央西側
1 面から検出した。060042 は最大径 170 cm、深さ 90 ～ 100cm を測る大型の土坑である。埋土からは 11 世紀後半～12 世紀前半頃のものと考えられる遺物が出土したが、遺構の性格は不明。後述する遺物の他、ガラス炉壁の破片が 1 点出土している。ガラス炉壁については、第 4 分冊「34. 第 203 次調査出土金属製品・生産関連資料等について」の項目において報告する。

出土遺物 (Fig.15～16 Ph.12) Fig.15-80 は土師皿。口縁～底部にかけて 1/2 程度の残存。復元外径は 10.6cm と推測される。器面はやや磨滅している。底部ヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。

81、82 は土師器の壊でともに口縁部～底部にかけて 1/3 程度の残存。81 は復元外径 15.6cm、仮 81 は復元外径 14.0cm。共にやや磨滅しているが底部ヘラ切り、外面、内面共に回転ナデで、外面体部と底部の境界は丸みを帯びている。外面の器面について 81 は微かな稜を持ち 82 は滑らかな屈曲のみである。

83、84 は瓦器碗。

83 は口縁部～高台にかけての破片で口縁部～体部 1/6 程度、高台部は完形で残存。器種は瓦器碗だが焼成が付く、色調は外内面共に口縁部付近は黒褐色、体部～高台にかけては色調が黄灰色を呈する。傾斜する低い貼り付け高台。体部外面は指頭圧痕がまばらにみられるが直口縁をなす口縁部付近ではナデ消されている。内面は摩耗しており、調整は不明。

84 は体部下～高台にかけて 1/3 ～ 1/2 程度の残存。傾斜著しい貼り付け高台。調整はナデだが、内面見込み部に指オサエの痕跡あり。

85 は口縁部～体部上半にかけて 1/4 程度残存する破片。白磁碗 II -5 類もしくは IV 類か。長く扁平な玉縁口縁をもつ。体部外面上半まで施釉を施し、下半は釉なし。11 世紀後半～12 世紀前半。

86 は器種不明白磁 (Ph.12)。破片のため全体の形状は不明であるが、上端は扁平で明瞭な稜をもつなど生きており、口縁とみられる。また下部は明瞭な稜をもちながらくびれ、下部につながっていたと考えられる。外面は横方向の沈線を上下 2 条ずつ巡らせた後、ヘラ描き文様を施す。また残存する外面の中央からやや上部において、多角形上の孔が施され、その後施釉されている。内面は滑らかにナデを施すのみで口縁端部付近を除き施釉なし。

87 は小型の水注片か。口縁部～体部上半にかけて 1/2 程度の残存。口縁付近に沈線状に段 2 つ巡らし、のちに体部にかけて縦方向に沈線を間隔おき巡らす。外面のみ施釉。

88 は器種不明土師器。上面が欠失しており、内面の上部はしぶり痕があるのみで調整なし。土師器の高杯くびれ部の破片とも考えられる。

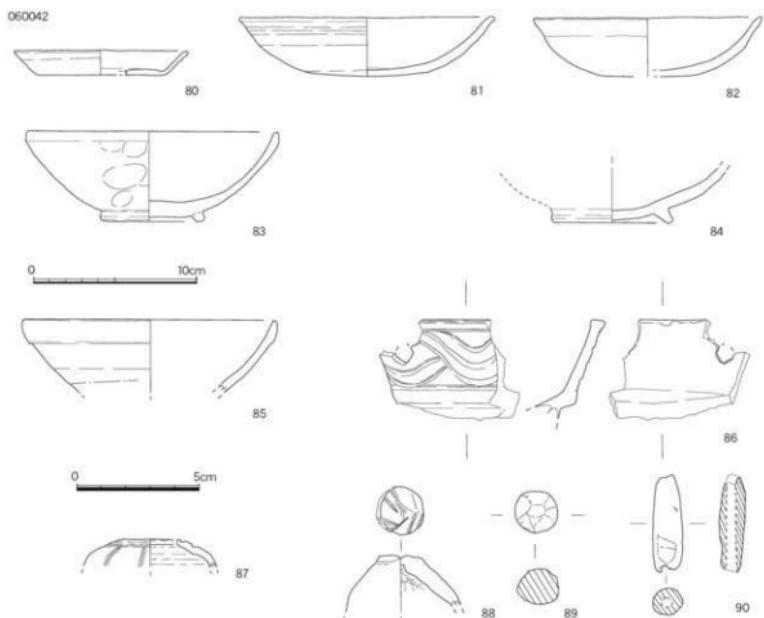


Fig. 15 SK060042出土遺物実測図① (80~86、90はS=1/3、87~89はS=1/2)

Fig. 15-89は土玉。手づくね成形で孔なし。実測後、整理中の不手際で報告書刊行現在所在不明となっており、捜索中である事をご容赦いただきたい。

90は土鍤。管状だが手づくね成形で外形はいびつ。長径に径0.5～0.7cm程度の内孔が貫通する。

Fig. 16-91、92、95は砥石か。

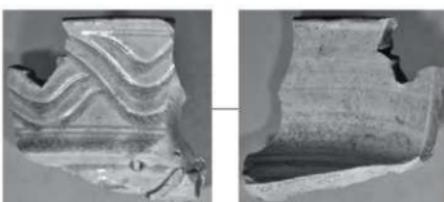
92は3面において黒色タール状の付着物あり。表面とみられる1面には断面U字状の窪みが縦長に走っており、使用痕とみられるが具体的な用途は不明。

95は3面に複数平行するキズ状の使用痕が確認できる。

93、94は碁石。

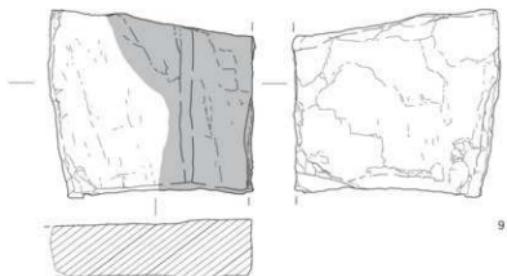
93は暗緑交じりの灰色で94より顕著な楕円。ともに使用による摩耗か。

94は暗緑交じりの褐色、楕円形。



Ph.12 SK060042 出土器種不明白磁 (Fig.15-86)

060042



■…黒色タル状付着物

0 10cm

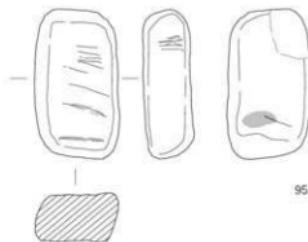
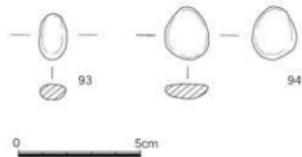


Fig. 16 SK060042出土遺物実測図② (91、92、95はS=1/3、93、94はS=1/2)

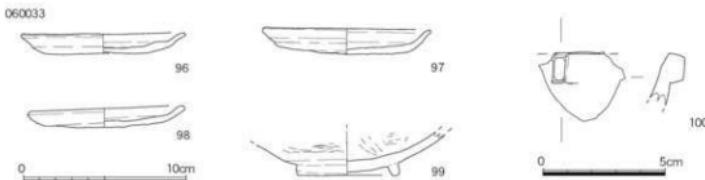


Fig. 17 SK060033出土遺物実測図 (96~99はS=1/3、100はS=1/2)

SK060033 (Fig.14) 調査区中央西側1面から検出した。060033は060042埋没後にできた土坑で、長径約100cm、深さ約50cmの土坑。遺構の性格は不明である。出土遺物から、時期は11世紀後半から12世紀前半頃か。

出土遺物(Fig.17 Ph.13) Fig.17-96, 97, 98は土師皿。いずれも11世紀後半から12世紀前半。96は接合後一部口縁欠損を除いて完形。外径10.2cm程度。底部ヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。97は1/2程度の残存。復元外径10.4cm程度。底部はヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。

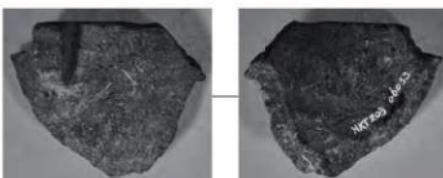
98は接合後完形。外径9.8cm。底部はヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。

99は土師質碗。口縁部欠失で体部下～高台にかけての残存。傾斜する低い貼り付け高台を施す。外面、内面共にヘラによる調整痕あり。

100は滑石製石鍋の破片(Ph.13)。小片のため径は不明だが、器厚が0.5cm前後で把手も小さく、小型のものと考えられる。

SK060046, SK060047 (Fig.18 左

Ph.15) 調査区西壁付近1面から検出した土坑群である。いずれも標高3.65m付近で検出し、底部は060046で標高3.28m、060047で標高3.24mを測る。また060046、060047両者に切られる形でSK060039が隣接する。切りあい順序は060039→060046→060047である。060047検出中、5cm～20cm大の不定形の石が5つ検出した。精査したところ、先述の不定形石はいずれも扁平なもので検出面付近のみに存在しており、土坑下部には石は見当たらなかった。柱の土台などの可能性等があるが、詳細は不明である。



Ph.13 SK060033出土小型滑石製石鍋片 (Fig.17-100)

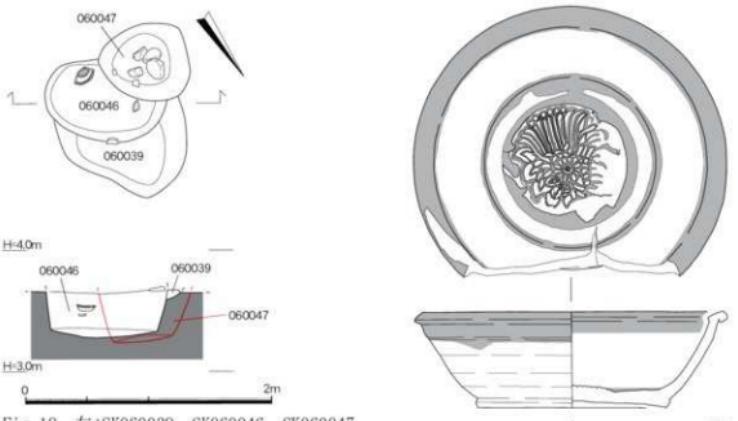


Fig. 18 左:SK060039、SK060046、SK060047
(S=1/40)
右:SK060046出土遺物実測図 (S=1/3)

101



Ph.14 SK060046 出土盤 (Fig.18-101)



Ph.15 SK060046、SK060047 (南から)

出土遺物 (Fig.18 右 Ph.14) Fig.18-101 は SK060046 から出土した陶器で盤Ⅲ類 (Ph.14)。節合後口縁部～体部 7/8 程度、底部は完形で残存。口縁部はやや内傾した逆 L 字状を呈するが、口縁端部は内側にも若干突出している。底部は上げ底気味の平底である。

施釉は体部内面に黄褐色の施釉の後、見込み部には花文を彫り込み、そこに鉄釉を施す。それとまた別に口縁部およびその付近では体部施釉後、茶褐色の施釉を施し、施釉後ふき取っている。11 世紀後半から 12 世紀前半。

(2) その他 1 面遺構出土遺物 (Fig.19 ~ 20 Ph.16)

以下記述する出土遺構の位置は Fig.2 を参照。

Fig.19-102 は SP060001 から出土した土師皿。

103 は同じく SP060001 出土の笄石。暗灰白色を呈し、0.05mm 大程の褐色粒子をまばらに含む。楕円形状。復元外径 7.3cm 程度

104 は SK060031 出土の白磁片。口縁から高台にかけて残存するが底部中央が欠失している。高台は低い輪上で高台の外端部は若干浮く。XI 類か。10 世紀後半～11 世紀中頃。

105-1、105-2 は SK060031・060036 において出土した破片である。盤または鉢か。逆 L 字状の口縁で体部には内外面共に茶褐色の鉄絵を施す。105-1、105-2 両者は接合しないためそれぞれ口縁部 1 片と底部 1 片の破片の傾きから器形を復元した。別個体の可能性もある。

106 は器種不明の土師器片 (Ph.16)。底部と思しき平坦面に「田」の字に似た墨書が確認されるが、欠損で文字全体が見えないため、判読不可。SK060034 からの出土。

107 は土師器甌。口縁から体部にかけての破片を回転復元した。内面は斜め方向のケズリ調整。外面は磨滅のため詳細不明。体部は器厚が 3mm 程度と薄い。SK060034 からの出土。

108 は土師器甌か。口縁部から頸部付近の破片であり、径は復元できず。内面は斜め方向のケズリ調整、外面は縱方向にハケ目あり。SK060039 からの出土。

Fig.20-109 は SK060040 を切るピット SP060048 から出土した土師器環。器面は内外面ともに磨滅しているが、外面は体部～底面付近および底面中心付近に指頭圧痕が連続し、凹凸が目立つ。

110 は SK060052 から出土した不明口縁片を回転復元。胎土は細かいが焼成は甘く土師質。口縁部下に蓋の受部とみられる突帯が巡る。頸部にかけてのくびれが強いことから、壺と思われる。

111 は SK060052 出土の瓦質甌。口縁部～体部上半にかけて 1/6 程度の破片を回転復元。口縁は丸みを帯びており、外面は横方向のミガキ、内面はジグザグ状に連続するミガキが施される。

112 は白磁小碗 V-1a 類。SK060033 付近に所在する SP060057 からの出土。口縁部～高台部にかけて 1/6 ～ 1/4 程度の破片を回転復元。低い高台を持つ。外面体部下半～高台にかけては施釉後釉を搔きとる。内面体部上半に沈線一条巡る。

113 は白磁皿 II-1a 類。口縁部 1/8 程度、体部は 1/8 ～ 1/4 程度、高台部 1/4 程度の残存。体部はやや内湾気味に傾斜し、口縁部は弱く外反する。体部内面に段が 1 つ巡る。後述する SE060060 に上部を切られたと考えられる土坑 SK060058 からの出土。

114 は滑石製の不明円盤状製品。用途不明。SK060058 からの出土。

115 は砥石片か。左半が欠失しているため詳細は不明だが、確認できるだけで表面、裏面、側面の 3 面を使用している。SK060058 からの出土。

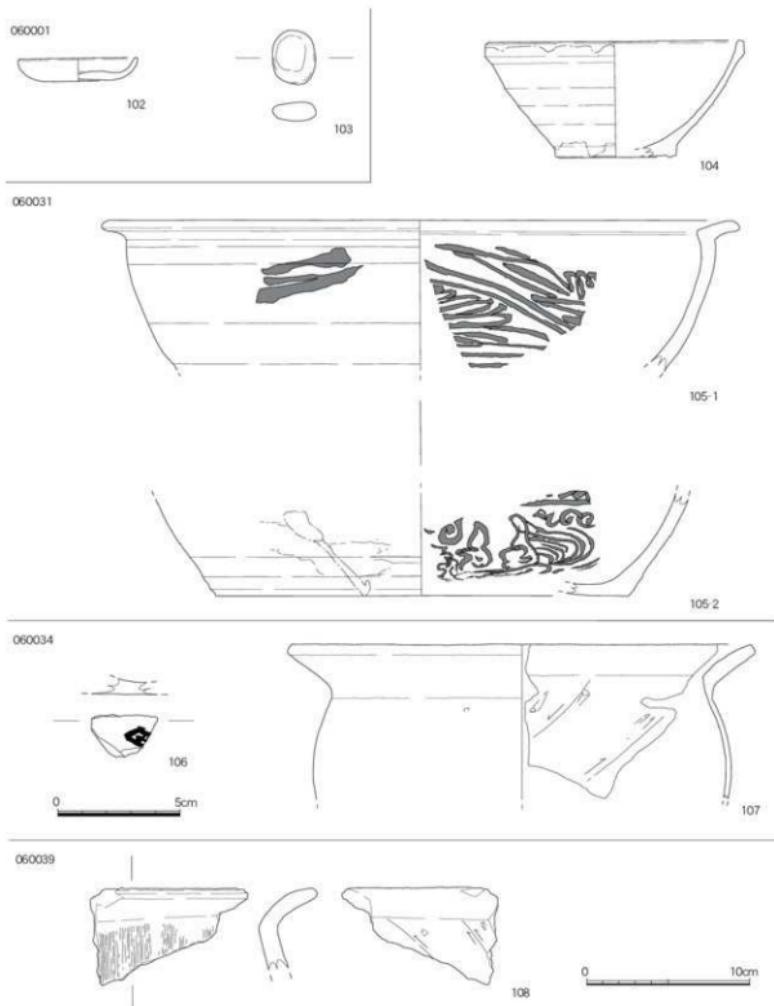


Fig. 19 6区1面その他遺構出土遺物実測図①
(102、104、105、107、108はS=1/3、103、106はS=1/2)

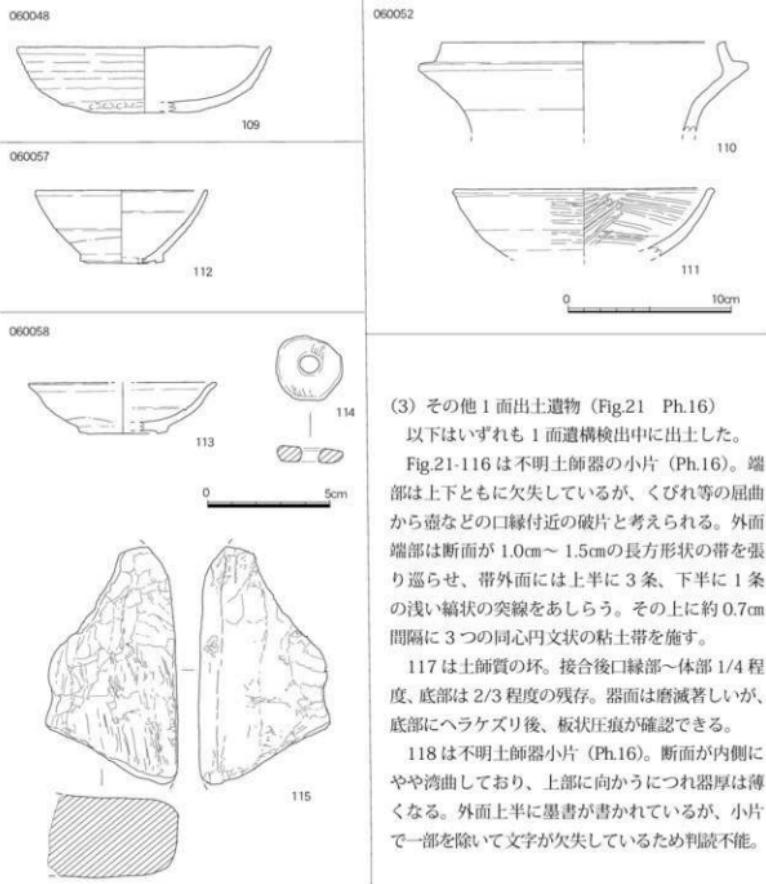


Fig. 20 6区1面その他遺構出土遺物実測図②
(109~113、115はS=1/3、114はS=1/2)

(3) その他 1面出土遺物 (Fig.21 Ph.16)

以下はいずれも 1面遺構検出中に出土した。

Fig.21-116 は不明土師器の小片 (Ph.16)。端部は上下ともに欠失しているが、くびれ等の屈曲から壺などの口縁付近の破片と考えられる。外面端部は断面が 1.0cm ~ 1.5cm の長方形形状の帯を張り巡らせ、帯外面には上半に 3 条、下半に 1 条の浅い縞状の突線をあしらう。その上に約 0.7cm 間隔に 3 つの同心円文状の粘土帯を施す。

117 は土師質の坏。接合後口縁部～体部 1/4 程度、底部は 2/3 程度の残存。器面は磨滅著しいが、底部にヘラケズリ後、板状圧痕が確認できる。

118 は不明土師器小片 (Ph.16)。断面が内側にやや湾曲しており、上部に向かうにつれ器厚は薄くなる。外面上半に墨書きが書かれているが、小片で一部を除いて文字が欠失しているため判読不能。

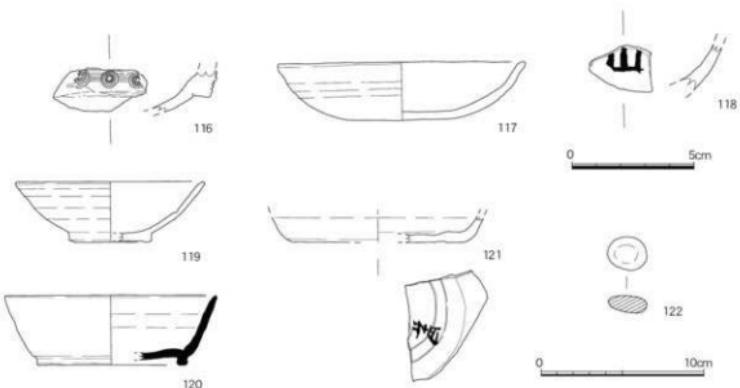


Fig. 21 6区1面その他出土遺物実測図
(116、117、119～121はS=1/3、118、122はS=1/2)

Fig.21-119は白磁皿II -1a類。口縁～体部1/3、高台部1/2程度の残存。高台が低い輪状で外面端部が若干浮く。体部中央付近に段が一つ巡る。施釉は外面体部下半以下において軸を挿き取っている。

120は高台付の須恵器环身。口縁部～底部にかけての破片であり、口縁部～体部は1/8以下、高台部は1/6程度の残存であり、底部中央は欠失している。体部はやや外斜方向に立ち上がる。

121は土師器の皿もしくは環か(Ph.16)。口縁～体部上半は消失し、わずかな体部下半と1/4～1/6程度残存の底部片。底部外面は回転ヘラ切り、墨書で漢字が書かれているが、字の一部が欠落しているため判読はできない。

122は碁石(Ph.16)。楕円形状で白色を呈する。

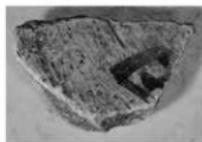


Fig.19-106

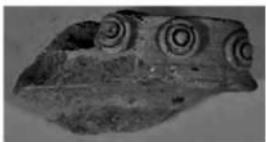


Fig.21-116

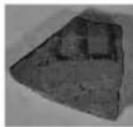


Fig.21-118

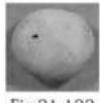


Fig.21-122



Fig.21-121

Ph.16 6区1面その他出土遺物

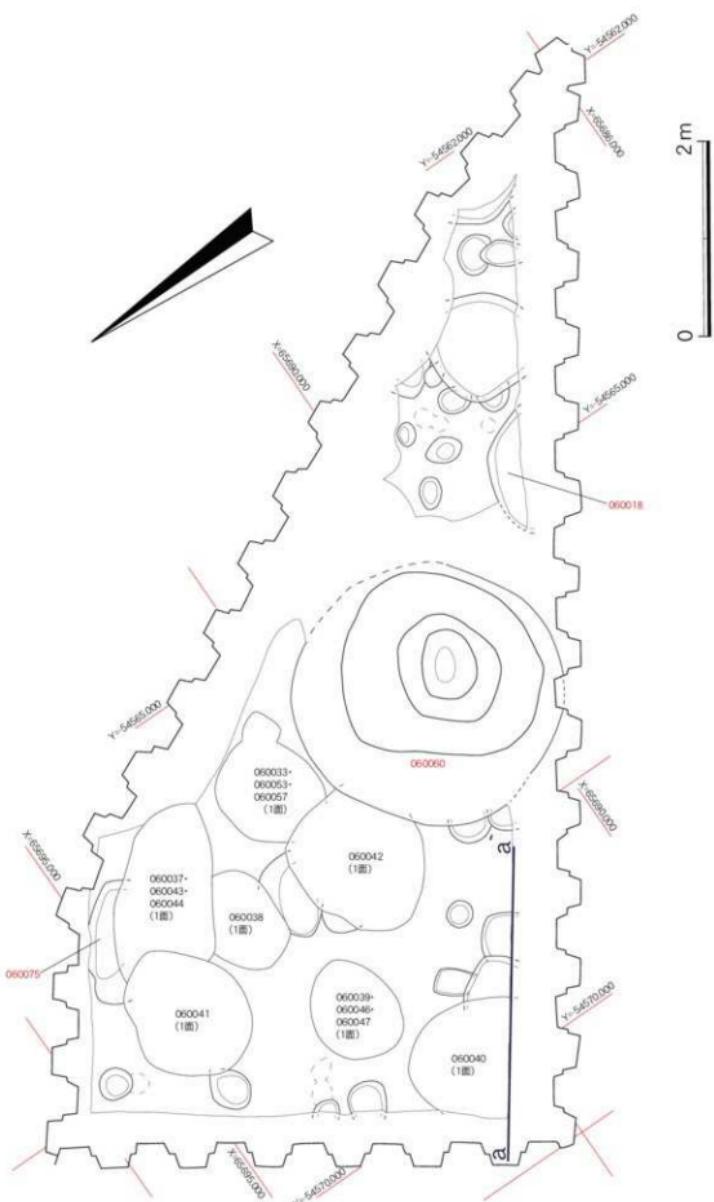


Fig. 22 6区2面平面構造配置図 (S = 1/50)

4) 2面の調査 (Fig.22～25 Ph. 17～20)

2面目は暗赤褐色砂質土を基盤とする。第2面の遺構は1面で検出した大型遺構に切られる場合が多いため、遺構の残存状況はよくなく、数も少ない。土坑5基、ピット22基の他、調査区中央付近において、1面掘削時現代攪乱を除去したのち、攪乱下から中世の井戸SE060060を1基検出した (Fig.22 Ph.17、18)。SE060060については上端と底部の高低差が激しいため、周囲の記録と整地面掘下げを並行しながら段階的に掘り下げ、周囲との高低差を抑えながら掘削した。



Ph.17 6区2面西側全景（南から）



Ph.18 6区2面東側全景（南から）

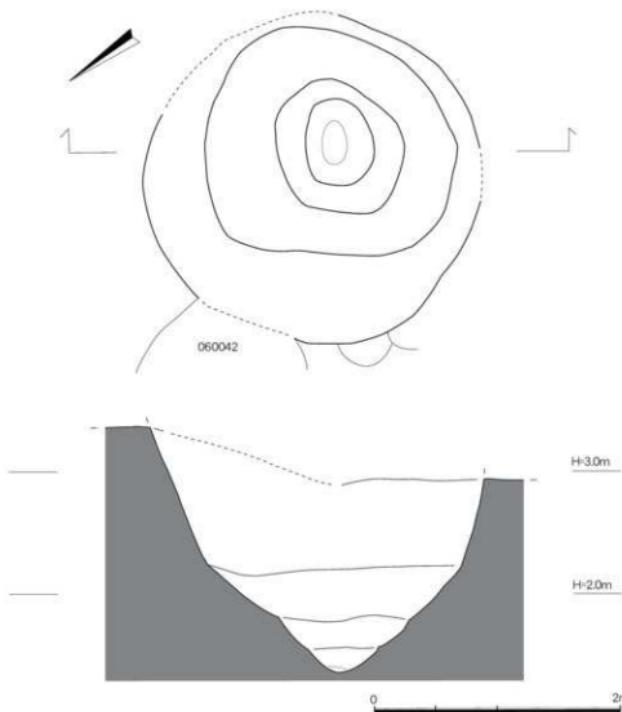


Fig. 23 SK060060実測図 (S = 1 / 40)

(1) 2面検出遺構

井戸

SE060060 (Fig.23 Ph.19) 1面にて検出したSK060058の上端を切る。2面において検出したが、この遺構の直上は現代がれきを含む搅乱に覆われており、この遺構の上端は削平されている可能性が高い。よってこの井戸の掘り込みがどこから始まっているかは不明である。搅乱除去後標高3.2m～3.0mにかけて遺構を検出し、計3つの鈍角の段を境界に掘り方が狭まる。最深部は円形のピット状で、最深部は標高1.37mを測る。なお、現在は湧水していない。埋土からは11世紀後半～12世紀前半にかけての遺物が出土した。



Ph.19 SE060060 完掘状況（南西から）

出土遺物 (Fig.24) Fig.24-123 は土師皿。上部掘削時より出土。口縁～底部 1/3 程度の残存。復元径 9.4cm 程度。底部ヘラ切りで外面、内面共に回転ナデ。

124 は須恵器壺。上部掘削時より出土。口縁部～底部にかけての 1/8 程度の破片。回転復元径は口縁部 17.4cm、底部 13.4cm、高さ 2.2cm を測る。底部中央は欠失している。底部はヘラ切りでヘラ記号が確認できる。

125 は瓦質の碗。上部掘削時より出土。口縁部～体部下半にかけて 1/8 以下の破片をわずかな曲線をもとに回転復元。内面および外面体部上半にヘラミガキ、外面体部下半に粗いミガキが不連続に巡る。

126、127 は白磁碗 VI 類。11 世紀後半～12 世紀前半。

126 は下部掘削時より出土。口縁部～底部、高台にかけて 1/6 程度の破片。口縁部は弱く外反する。内面体部下半に段が 1 つ巡る。内面見込みに施釉後焼成中に付着したとみられる 1 ～ 2mm 大の砂粒がまばらにみられる。高台は低く、外面内面ともに側部を斜めに削りだす。高台裏は中心に向かうにつれ断面が肥厚化する。施釉は外面体部高台付近以下から施釉されない。

127 は下部掘削時より出土。口縁部～高台にかけての 1/8 程度の破片。直口縁。高台は低く斜めに削りだしており、やや外傾する。内面体部下半に段が 1 つ巡る。外面高台付近以下は一部上部からかかっている箇所を除いて施釉なし。

128 は白磁碗 IV -1b 類。下層掘削時に出土。口縁部～体部 1/6 程度、高台部 1/2 程度の残存。玉縁口縁を持ち、体部は丸みをもたず直線的である。高台裏は浅く、周縁部を斜めに削り、置付幅が狭い。内面体部下半に段が 1 つ巡り、見込み部が窪む。体部背面下半以下は施釉後釉を掻きとっている。

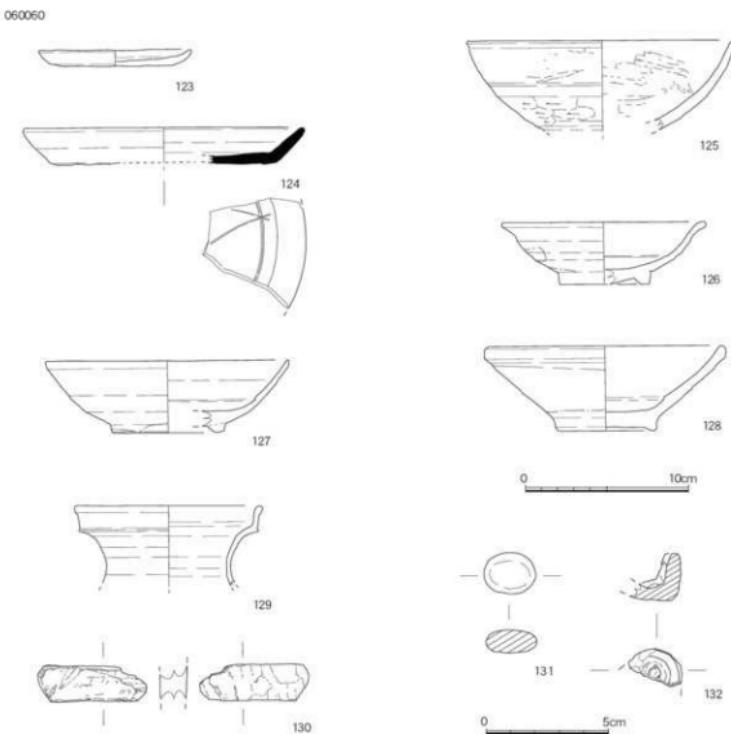


Fig. 24 SK060060出土遺物実測図 (123~130はS=1/3、131、132はS=1/2)

Fig.24-129は下部掘削時より出土した二重口縁の不明陶器壺。口縁～頸部にかけて1/4程度の破片。復元口縁径12.6cm、頸部のくびれが強い。器厚は0.3～0.5cmと薄い。内外面ともに黒褐色の釉を施し、くびれ付近に灰色あぶく状の斑が多くみられる。胎土は赤褐色を呈する。

130は不明滑石製板状品。内堀部の下部より出土。厚みが8mm～15mmと漸移的に肥厚する形状から、滑石製石鍋等の破片と考えられる。転用途上品か。

131は碁石。一部淡い橙色混じりの乳白色を呈する。上部掘削時より出土。楕円形を呈するのは使用による磨滅か。

132は不明製品。滑石を短筒状に繰りぬいて整形しているが、欠損しており全体の器形は不明。

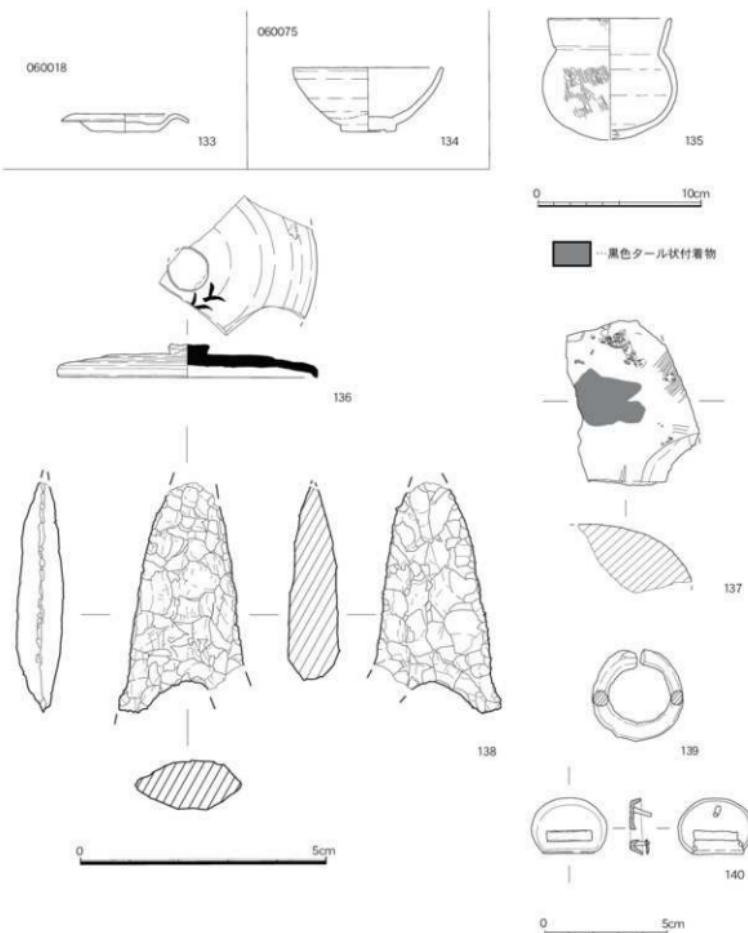


Fig. 25 6区2面その他出土遺物実測図 (133~137はS=1/3、138はS=1/1、139~140はS=1/2)

(2) その他2面構出土遺物 (Fig.25)

Fig.25-133は不明容器。SK060018からの出土。

134はSK060075から出土した白磁小碗V-1a類。口縁～高台にかけて1/2程度の残存。外面体部下から高台裏にかけては無釉。高台は浅く直立する。内面体部と見込み部は明瞭な角をもって区切られる。

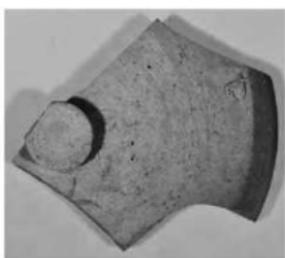


Fig.25-136

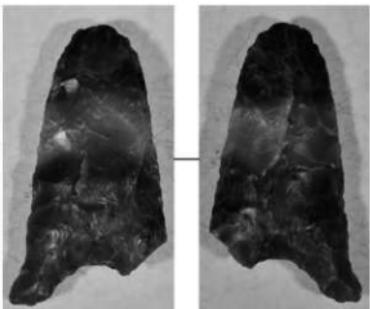


Fig.25-138



Fig.25-139

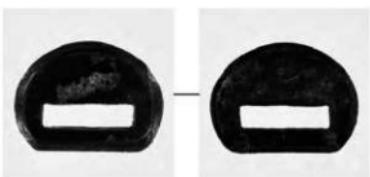


Fig.25-140

Ph.20 6区2面その他出土遺物

(3) その他2面出土遺物 (Fig.25 Ph.20)

以下の遺物はいずれも2面整地層中から出土したものである。

Fig.25-135は土師器小壺。接合後口縁部1/4、体部～底部1/2程度の残存。回転復元したところ底面中央は欠失している。器面は磨滅しており詳細は不明だが、外面に斜方向で不連続のハケが確認できる。

136は須恵器蓋 (Ph.20)。天井部に円柱状に把手が削り出される以外は、外面内面ともに回転ナデである。把手付近に墨書きがあるが、破片で文字の全容がつかめないため、判読不可。

137は不明石器片。一面を除き破損しているため全貌が掴めず不明だが、敲打を受けた痕跡がある。敲打部及び一部器面に黒色付着物が確認でき、不定方向のキズが単位状に走ることから、台石や砥石などの道具類と考えられる。

138は調査区西側から出土した通称トロトロ石器と呼ばれる異形局部磨製石製品である (Ph.20)。材質は黒色の脈がはいった乳白色～青灰色の脈が走るチャートか。石材を極めて緻密に打ち欠き、側面は鎌の刃部状に整形しているが、その後研磨によって表面側面は極めて滑らかな質感に仕上げている。縄文時代早期の資料とされるが、整地層中の出土であり周囲に関連する遺構もないため、後世の土地改変の際に掘り起され、整地層中に混在したものとみられる。

139は不明環状鉄製品 (Ph.20)。形状は耳環に酷似するが、詳細不明。

140は青銅製の丸剣 (Ph.20)。SK060042南、SE060060西付近の1面整地層最下部～2面整地層上部掘削中に出土した。遺物そのものは奈良時代ごろのものだが、こちらも138と同様、後世の土地改変の際に掘り起され、整地層中に混在したものとみられる。

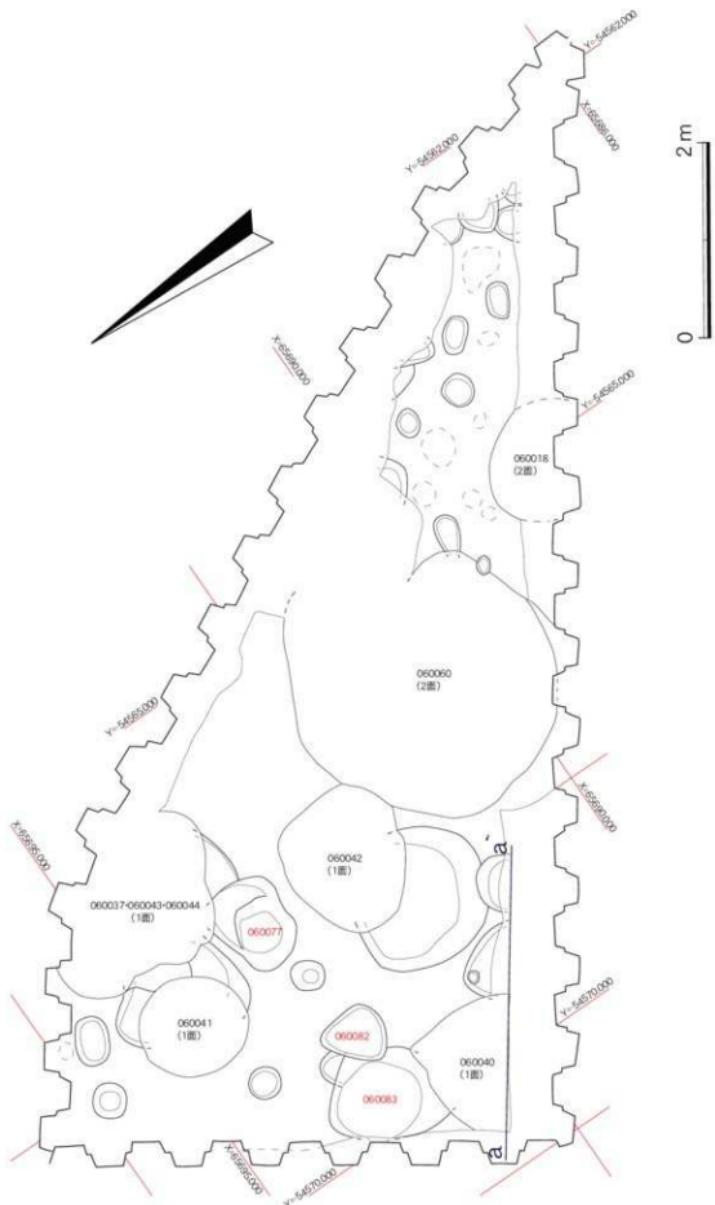


Fig. 26 6区3面平面遺構配置図 (S = 1/50)

5) 3面の調査 (Fig.26 ~ 28 Ph.21 ~ 23)

3面目は黄灰色砂質土を基盤とする砂丘面である。1面・2面で検出した大型遺構に切られる場合が多いため、遺構の残存状況は2面よりも限られており、数も少ない。土坑7基、ビット20基を検出した (Fig.26 Ph.21・22)。

なお、調査の経過で述べたように遺構掘削・記録後、3面砂丘整地層である黄灰色砂質土を1m以上掘り下げたが、遺構・遺物は全く検出されなかったため、3面以下は地山であると判断した。

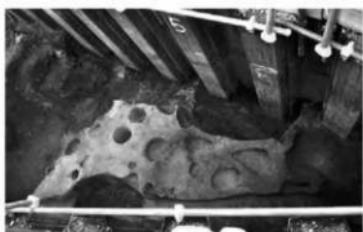
(1) 3面検出遺構

土坑

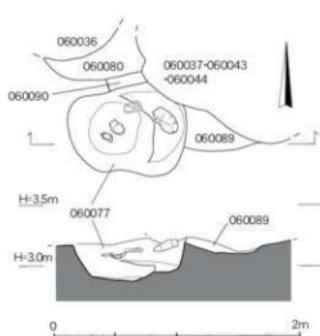
SK060077 (Fig.27 Ph.23) 6区西側北寄り、SK060037に切られている事や、上部にSK060038が位置している事から、SK060038の最底部の可能性もある。11世紀後半～12世紀前



Ph.21 6区3面西側全景（南から）



Ph.22 6区3面東側全景（南から）



Ph.23 SK060077 (南西から)

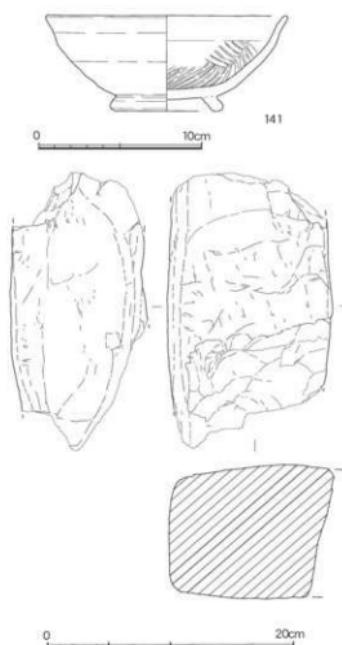


Fig. 27 SK060077 (S=1/40)、
SK060077出土土器(141、S=1/3)、
SK060077出土石器(142、S=1/4)

半のものと思しき瓦器碗のほか、脆弱につき取り上げ時に細片になってしまったものの、シカの肩甲骨と考えられる獸骨が出土している。

出土遺物 (Fig.27)

Fig.27-141は瓦器碗。口縁部1/8以下、体部1/6程度、高台部は完形で残存。口縁部復元径15.0cm程度。口縁は緩やかに外反し、体部は丸みをおびる。腰は低く、高台は外傾している。内面見込み部に一方向のミガキ、体部はやや磨滅しているがジグザグ方向らしきミガキがかかる。時期は11世紀後半～12世紀前半か。

142は定形の砥石または台石か。SK060037の境界付近の出土。短辺側は両端とも欠失している。現状少なくとも3面に使用の痕跡あり。

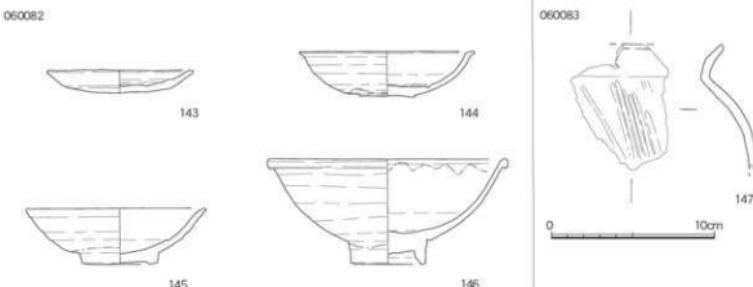


Fig. 28 6区3面その他遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

(2) その他3面遺構出土遺物 (Fig.28)

Fig.28-143、144、145、146はSK060082 (Fig.26) からの出土。

143は土師皿。接合後1/3程度の残存。器面は内外面共に磨滅している。

144は白磁皿V-2a類。口縁～体部1/2程度、高台部は完形で残存。外面は底部に1mm程度のごくわずかな高台削り出しが確認できる。体部は内湾状に立ち上がり、口縁部は横に短く屈折する。内面見込み周辺には段が1つ巡る。11世紀後半～12世紀前半。

145は白磁皿II類。口縁～体部2/3程度、高台部は完形で残存。高台は低く厚い。口縁はやや外反し、体部内面下半部に段が1つ巡る。11世紀後半～12世紀前半。

146は白磁碗V-3a類。口縁部～体部1/3程度、高台部は完形で残存する破片。高台は直立するが、高台内はやや斜めに削り出しており、鈍角の稜線が中央付近に巡る。高台の高さと比較してやや浅く削り出しているため、底部は厚底である。外面の体部と高台部の境界は段が施されている。体部は内湾状に立ち上がる。口縁は小さな玉縁風になるが、外面の体部との境界線は段が施される。施釉は口縁部とその付近は重ねて施釉されるのに対して、高台部は外面内面ともに施釉無し。11世紀後半～12世紀前半。

147はSK060083 (Fig.26) からの出土で土師器の甕か。口縁部から体部上部にかけての小片であり、径は復元できず。外面はたたき整形のちハケの後、ミガキを施している。口縁は頸部の稜線を境にくの字に外反しており、ハケなどのちナデ消し。内面もハケのちナデ。

6) 6区調査のまとめ

以上、6区の調査と出土遺構、遺物について述べてきたが、成果を以下にまとめる。

1面で検出した遺構については、SK060036、SK060037、SK060038、SK060041、SK060043、SK060044は切り合いが激しく境界が不明瞭な部分はあるが、遺物はいずれも11世紀後半～12世紀前半にかけての遺物が集中しており、その他遺構もおおむねこれらと同じ時期の遺物であるため、本調査区の主な造営時期だと考えられる。またSK060036土坑下部から出土した古墳時代の雁股式鉄鎌片のほか、整地層中から古墳時代～古代にかけてとみられる土師器片等が出土しているが、これらの時代を特定できる遺構は確認できなかった。

2面で検出した遺構については、先述の通り1面で検出した大型遺構に多くが削平されているため残存状況が悪く数も少ない。遺構検出中および整地面及び層中からは陶磁器片と土師器片のほか、古代官人が身に着けていたと思われる丸鞆（Fig.25-140）や縄文時代早期の異形局部磨製石製品（Fig.25-138）が混ざって出土した。異形局部磨製石製品の存在は縄文時代早期の人間の活動を、丸鞆の存在は古代官人の存在の可能性を高く示す重要な資料だが、これらに関連する遺構は確認できなかった。

3面で検出した遺構については、上位面調査において検出掘削が及ばなかった遺構が多く、時期については言及することが難しい。1面、2面同様11世紀後半～12世紀前半ごろの遺構を確認したが、それ以前の時代の遺構は確認できなかった。

以上をまとめると、6区においていえば11世紀後半～12世紀前半ごろに整地といった土地の改変、遺構の造営が活発に行われており、その際にそれ以前の遺構は削平された可能性が高い。ただし、1～3面に渡って整地層中より古墳時代から古代の資料が出土していることから、少なくとも古墳時代以降に整地と土地改変が繰り返し行われていたものと考えられる。また1点のみであるが縄文時代早期の異形局部磨製石製品の出土は、博多浜で縄文時代早期から人々の活動が行われていた可能性を示すものであり、今後の調査で縄文時代以前の遺構の発見が期待される。

7) 6区矢板敷設に伴う立会報告（Fig.29、30 Ph.24～35）

6区掘削にあたって土砂崩落防止のため、事前に矢板を敷設する必要があった。そのため本調査前の2014年9月23～24日、10月2日において、矢板敷設に伴う重機掘削に立会った。この立会は重機によって調査区周縁部幅約1mを掘削し、遺構・遺物が確認され次第重機掘削を中断させて記録を行うものである。工期が短く時間の制限が大きかったため、記録は写真の他は巻尺やスタッフ等を用いた緊急の略測であり、実測の精度は低いため6区および周辺の遺構配置とは位置的に齟齬が生じている。また場所についても廃土置き場がなく、およそ3m間隔ずつ掘削し、都度リレー方式で産業廃棄物運搬車が回収する方法をとらざるを得なかつたため、廃土中の資料の取上げ・回収も極めて限定的なものとなつた。

Fig.29下は立会時に略測した土層図である。数値は標高ではなく、地表面（以下GLと表記）からのマイナス値である。およそGL-0～-70cmまではアスファルトの道路盤および道路工事用とみられる黄灰色の真砂土、GL-70～-100cmにかけては瓦や磁器陶器等を多く含む暗茶褐色土（1面）、GL-100～-120cmにかけて陶磁器や土師皿を多く含む茶褐色砂質土（2面）、GL-120～-150cm以下にかけては黄褐色砂屑（3面）という区分を行つた。本立会では配管の有無を確認する趣旨からGL-150cmで試掘を停止したため、後の本調査時に3面以下が地山であるということが分かつた。

遺構はピット、土坑、溝が確認でき、特に西辺～南辺にかけて切り合いが激しく集中している。

Fig.29 上は本立会でとった略側図を本調査区の平面図と照らし合わせ、GLをおおよその標高に当てはめたものである。位置・標高ともに略側のため不正確な部分は否めないが、矢板掘削時に検出した⑥-14、⑥-28、⑥-23などは、6区の本調査報告で述べたようにSK060040 (Fig.12 Ph.9) と同一遺構であった可能性が高い。同様に、⑥-3とSK060036、SK060037、SK060043、SK060044 (Fig.3 Ph.5)、⑥-29、⑥-30とSE060060 (Fig.23 Ph.19)、⑥-34とSK060010といったものは同一遺構であった可能性がある。

調査区⑥-26、27より東、⑥-33より西の地点は GL-0 ~ -150cm 以下にかけて大型の現代擾乱が存在した。同じく⑥-2より東、⑥-32付近にわたって、GL-0 ~ -150cm 以下にかけて現代の擾乱が確認できた。これらは調査区外に向かって大きく広がるものと考えられる。



Ph.24 挖削前現況（西から）

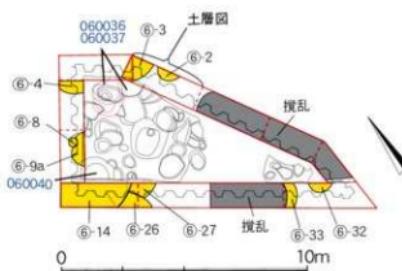


Ph.25 重機掘削状況（西から）

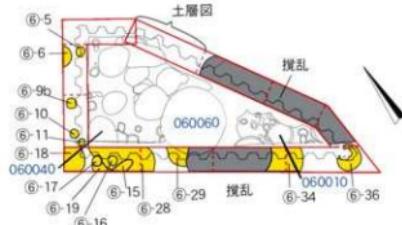


Ph.26 GL-0~-150cm土層 (Fig.29 下) 検出状況（南から）

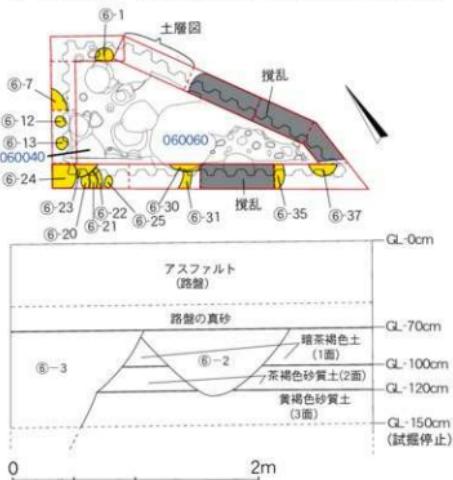
1. GL-70cm～100cm(標高4.0m～3.7m前後か)検出遺構



2. GL-100cm～-120cm(標高3.7m～3.5m前後か)検出遭構



3. GI=120cm~150cm(標高3.5m~3.2m前後か)検出構



出土遺物 (Fig.30) 出土位置については Fig.29 を参照。

Fig.30-148 は⑥-7 から出土した土師器の杯。外面・内面ともに回転ナデを密に施す。

Fig.30-149、150 は⑥-9a から出土したものである。

149は同安窯系青磁III-1b類。口縁から底部まで1/4～1/3程度残存する破片。12世紀中～後半頃。体部中位でごくわずかに外反する。内面は段が遡る。底部外面下半以下には一部上からかかる部分を除いて施釉無し。内面見込みにはヘラによるジグザグ状の櫛点描文が施される。

150は白磁盤VI-2a類。11世紀後半から12世紀前半にかけてか。口縁は1/5程度、体部から底部まで1/3～1/2程度残存する破片。口縁部は直口で底部はやや上げ底で周縁部が突き出す。内面は体部中央からやや下半に段1つ巡り、ここから内湾気味に屈曲して立ち上がる。ヘラ描きによる花弁状の文様が施される。

このほか、6区調査報告で述べたようにFig.4-1は土坑⑥-2、⑥-3で出土した破片と、SK060036の底部付近で出土した破片が接合したもの。Fig.6-24、26は土坑⑥-3出土の破片とSK060037出土の破片との接合。またFig.6-19、22は本立会の廐土から発見した破片とSK060037出土の破片が接合したものである。

Fig. 29 6区矢板敷設に伴う立会調査構造配置図及び土層図
(構造配置はS=1/200、土層はS=1/40)

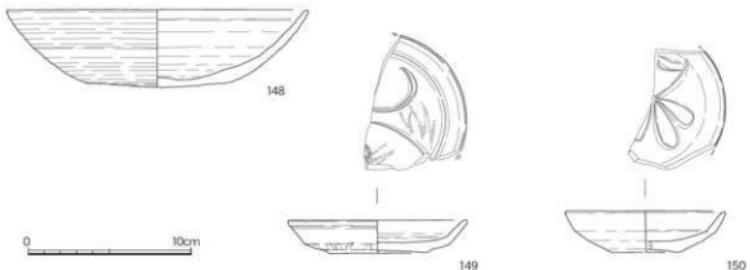
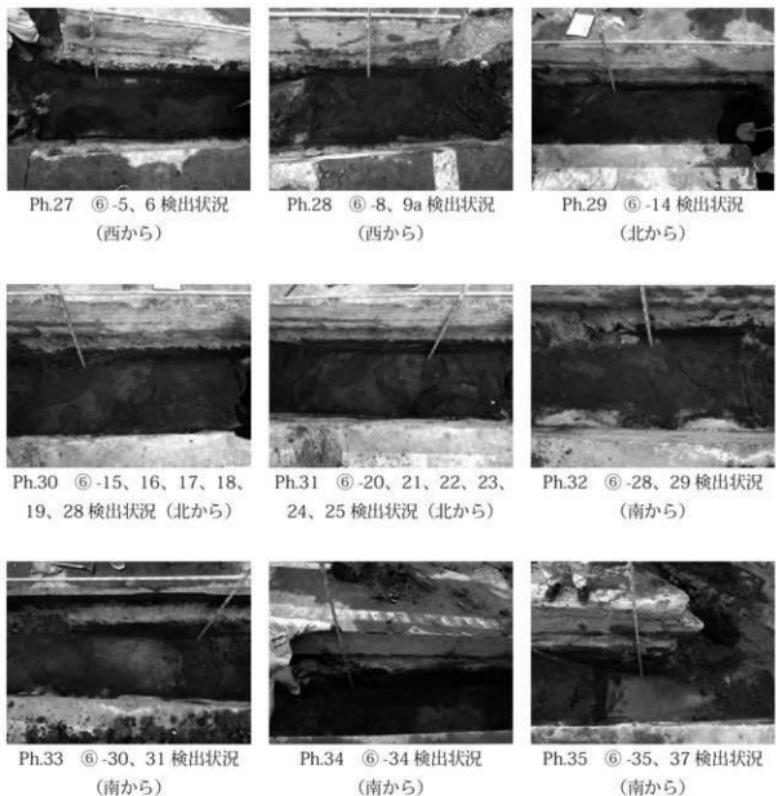


Fig. 30 6区矢板敷設に伴う立会調査出土遺物実測図 (S=1/3)



8. 7 区の調査

1) 概要 (Fig.1・2 Ph.1 ~ 4)

7 区は、西工区の西北端に位置し、1 区同様旧地形の博多濱の砂丘 I の西端に立地する。南側の 1 区の調査や周辺の過去の試掘状況から、概ね旧那珂川の河道域に含まれていることを想定していたが、確認のため、2015 年 3 月 3 日に試掘調査を行った。

試掘は 2 简所設定し、事業主による籠装剥ぎ取り、路盤掘削・搬出をした後、重機により掘削した。試掘箇所および土層図は Fig.1 に示す。2 简所ともに上層よりアスファルト舗装、路盤、海砂（埋土）、煉瓦・パラスが混入する黒色粘質土が道路面より約 1.1m 下まで堆積する。トレント 1 では煉瓦構築物も残っていた (Ph.3)。その下に遺物を含まない黒色粘質土が堆積し、西側へ約 60cm 傾斜する。河川堆積に由来する黄灰色砂質土は道路面から約 2.7m で検出し、南側の 1 区で確認した同堆積層と比較すると、北側から南側へ向かって、地形は傾斜する。試掘調査の結果、1 区同様、7 区も河川堆積であることが判明したため、発掘調査は不要とした。なお、2 区と 8 区において、旧那珂川の河道と考えられる落ちが確認できた。また、北側に位置する柳田神社の南側の試掘調査でも、河川堆積物を検出していることから、旧那珂川が本調査地点の西端で、大きく蛇行渦曲し流れていたことが想定される (Fig.2)。

本調査区が立地する砂丘 I は縄文時代晩期中葉、北側の砂丘 II は弥生時代前期末前後に形成されたと考えられている。1 区と 7 区はこの砂丘 I と II の境にあたり、砂丘 I の西端を侵食するように旧那珂川が流れ、博多湾に注いでいたことがうかがえる。203 次調査北側の 19 次調査付近では、古代の港湾域が配置されており、中世の国際貿易港「博多」へつながっていく。砂丘を超えると眼前に小舟が接岸する好立地に本調査区の集落は築かれていたと考えられ、古代・中世における工房も盛んになったと考えられる。

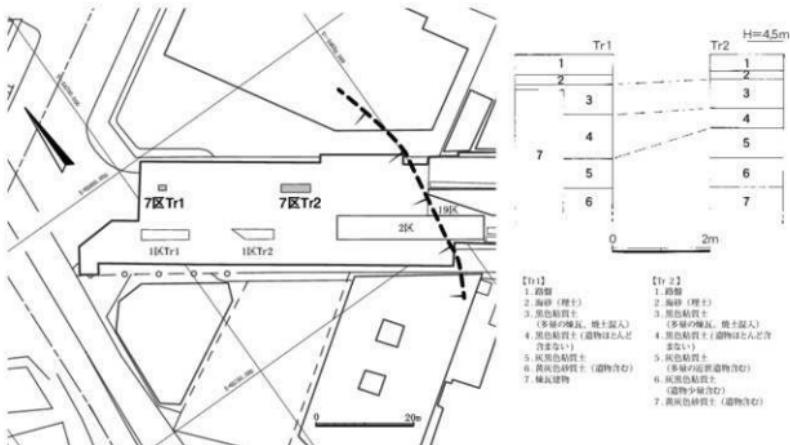
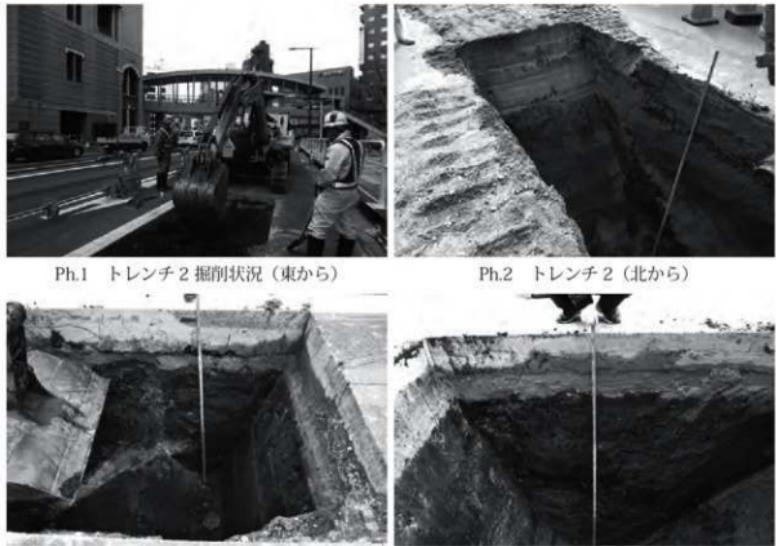


Fig.1 調査区位置図 (1/1,000) および土層略図 (1/100)



Ph.1 トレンチ 2 挖削状況（東から）

Ph.2 トレンチ 2（北から）



Ph.3 トレンチ 1 煉瓦構築物検出状況（北から）



Ph.4 トレンチ 1（北から）

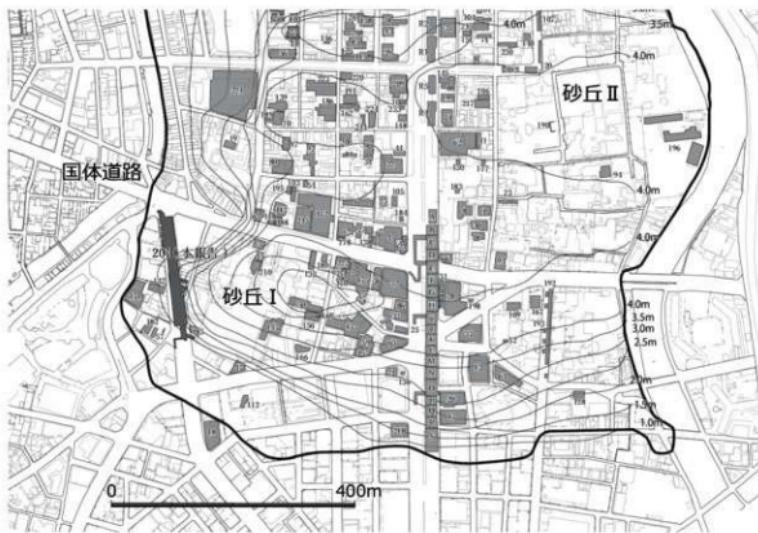


Fig.2 12世紀の等高線と調査区位置図（1/8,000）

博 多 170

〈第 1 分冊〉

—博多遺跡群 第203次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1405集

2021年（令和3年）3月5日

発 行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
印 刷 株式会社トータルブルーフ
福岡市南区清水4丁目6-3
